

YOSHIGASAKO

芳ヶ迫第1遺跡

芳ヶ迫第2遺跡

芳ヶ迫第3遺跡

FUDANOMOTO

札ノ元遺跡

県営農地開発事業前平地区に伴  
う埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和61年3月

田野町教育委員会

## 序

この報告書は、宮崎県の委託を受けて昭和58年度から2ヵ年にわたり、前平地区県営農地開発事業地内に所在する芳ヶ迫第1、第2、第3遺跡・札ノ元遺跡の発掘調査を実施した記録であります。

この調査では、縄文時代早期や旧石器時代の集石遺構、住居址や集石、土壌をはじめ、環状石斧や13世紀ごろの土器等も多数検出されております。これらは、宮崎県における貴重な研究資料となることでしょう。したがって、本報告書が広く活用されることを願う次第であります。

終わりに、発掘調査から報告書刊行にいたるまで終始熱心に御指導下さいました諸先生方をはじめ、調査に深い御理解をいただきました関係機関・地元町民各位に心から感謝申し上げます。

昭和61年3月31日

田野町教育委員会

教育長 種子田 栄 幸

## 例 言

1. 本書は、前平地区県営農地開発事業に伴い、昭和58・59年度実施した前平地区埋蔵文化財調査報告書である。
2. 発掘調査は、宮崎県中部農林振興局の委託を受けて、田野町教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆は、第1章～第3章を面高哲郎、第4章～第6章、第8章を寺師雄二が行った。
4. 年代測定については、奈良教育大学市川米太教授、京都産業大学山田治教授に依頼し、その結果について掲載している。
5. 本書の方位は、磁北である。
6. 本書の編集は面高があたった。
7. 遺物等は、田野町教育委員会で保管している。

# 本文目次

第1章 序説	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	3
第2章 前平地区遺跡群の位置と周辺遺跡	
第1節 前平地区遺跡群の位置	3
第2節 周辺遺跡	3
第3章 芳ヶ迫第1遺跡の調査	7
第1節 調査の概要	7
第2節 層位	8
第3節 遺構と遺物	8
1. 旧石器時代	8
2. 縄文時代	14
第4章 芳ヶ迫第2遺跡の調査	40
第1節 調査の概要	40
第2節 遺構と遺物	41
1. 縄文時代	41
2. 中世	41
第5章 芳ヶ迫第3遺跡の調査	47
第1節 調査の概要	47
第2節 層位	47
第3節 遺構と遺物	48
1. 旧石器時代	48
2. 縄文時代	48
第6章 札ノ元遺跡の調査	75
第1節 調査の概要	75
第2節 層位	75

第3節 遺構と遺物 .....	76
1. 旧石器時代 .....	76
2. 縄文時代 .....	76
第7章 年代測定の結果 .....	140
第1節 熱ルミネッセンス法及び $C^{14}$ による年代測定結果 .....	140
第8章 結語 .....	142

# 第1章 序 説

## 第1節 調査に至る経緯

昭和56年4月、宮崎県農業開発公社が農地造成のため田野町東部の前平地区で土地購入の計画があり、町教育委員会及び県教育委員会で分布調査を実施した。当地区では、以前箱式石棺が確認<sup>(1)</sup>されていたが、分布調査により遺物散布地が新たに2ヶ所確認された。昭和57年5月、町教育委員会で試掘調査を実施したところ、3ヶ所の遺跡の所在が確認された。うち2ヶ所では、アカホヤ層の下で貝殻文土器等を共伴して多量の焼石が出土し、縄文早期の集石遺構等が良好な状態で存在することが判明した。以前、箱式石棺が確認された地点ではその追認はされず、土器器小片が出土<sup>(2)</sup>したのみで今後の課題として残された。

試掘調査の結果により、農地造成の事業主体である宮崎県中部農林振興局と埋蔵文化財の保護について協議を重ねた結果、札ノ元遺跡(旧1号地)の一部については設計変更により現状で保存されることになったが、他については、小谷を埋めて農地とする事業施行上現状保存は困難であったので発掘調査を行い記録保存することになった。

発掘調査は、町教育委員会が調査主体となり、昭和58年度芳ヶ迫第1遺跡(旧3号地)を行い、昭和59年度は、昭和58年度新たに発見された芳ヶ迫第3遺跡を含めて、芳ヶ迫第2遺跡、札ノ元遺跡の3ヶ所の調査を実施した。<sup>(3)</sup>

なお、昭和58年度の調査で、配石をもつ集石遺構、札ノ元遺跡は昭和59年度遺構取り上げを行い、現在、町役場において出土遺物と共に展示している。

注(1) 宮崎県教育委員会「九州縦貫自動車道(宮崎線)関係遺跡分布調査報告書」1968。

注(2) 面高哲郎・長津宗重「前平地区遺跡発掘調査報告書」宮崎県文化財調査報告書第26集 1983。

注(3) 面高哲郎「芳ヶ迫第1遺跡一県営農地開発事業前平地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概要一」田野町文化財調査報告書第1集 1984。

寺師雄二「芳ヶ迫第2遺跡、芳ヶ迫第3遺跡、札ノ元遺跡一県営農地開発事業前平地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概要一」田野町文化財調査報告書第2集 1985。

## 第2節 調査体制

発掘調査の体制は次のとおりである。



## 第2章 前平地区遺跡群の位置と周辺遺跡

### 第1節 前平地区遺跡群の位置(第1図)

前平地区遺跡群の所在する田野町は、宮崎市の南西約20kmにある田野盆地を中心とする町である。田野盆地は、南那珂山地の鱒塚山系、苜井岳山系などを外輪山として、南西から北東へ階状(長径7km、短径3km)に開ける小盆地である。田野盆地内には、扇状地が発達しているが、盆地北縁を北流する片井野川、南縁を北流する井倉川及びその支流によって開析されて舌状の台地となっている。沖積地は、河川周辺にわずかに分布するのみで盆地内に所在する遺跡は、大半はこの台地上に分布している。

前平地区は、盆地南東の標高約600mの荒平山、前平山の北西裾に位置する。当地は、西面する扇状地で、各所に湧水があり、小川となり、井倉川に注いでいる。扇状地は、この小川等に開析され、西へ延びる低丘陵や丘陵性台地となっている。前平地区で確認・調査された5遺跡は、この丘陵上及び山裾端部の西斜面に立地している。

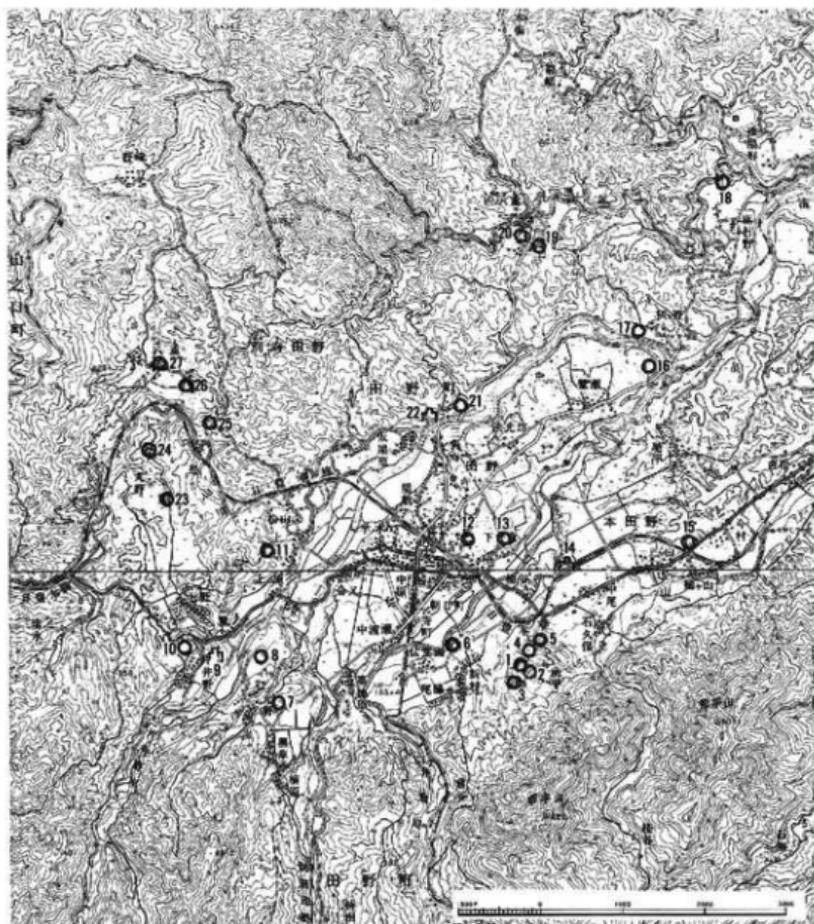
### 第2節 周辺遺跡(第2図)

田野町内で確認されている遺跡は、現在まで27ヶ所である。発掘調査は、前平地区の5遺跡、他は青木遺跡、黒草遺跡、灰ヶ野地下式横穴群、高野原地下式横穴と少ない。旧石器時代の遺跡はナイフ形石器を出土した萩ヶ瀬遺跡(宮崎大学実習林入口)の1ヶ所が知られている。縄文時代の遺跡は、確認されている遺跡の半数を占める。芳ヶ迫第3遺跡では、宮崎市堂地東遺跡出土の瓜形文土器に類似する草創期の土器が出土している。早期の遺跡は、貝殻条痕文土器を出土した前畑遺跡<sup>(1)</sup>が知られていたが、今回調査された遺跡等を含めると6ヶ所となった。黒草遺跡の道路のり面でも、アカホヤ層の下に焼石が包含されており、今後ともその数は増加すると考えられる。前期の遺物は、昭和53年、県教委が発掘調査した黒草遺跡で曾畑式土器が出土している<sup>(2)</sup>。中期の遺物は、県内でも出土例が少ないが、田野町においては確認されていない。後期の遺跡は、発掘調査された青木遺跡、黒草遺跡がある。青木遺跡は、昭和38年賀川光夫、鈴木重治氏等により調査され、不整形円形プランの配石遺構、トチの実が出土し、貯蔵穴と推された罌穴等が検出されている。出土土器は、指宿式、綾式、市来式、下弓田式など後期初頭から中頃のものが出土している。黒草遺跡は昭和46年宮崎大学、昭和53年に県教委によって調査されている。遺物は、青木遺跡と同時期のもの他、晩期の黒色磨研土器が出土しているが、遺構は検出されていない。当遺跡は、以前より広範囲にわたり遺物が散布するところで土器の他、多量の石鏝、石匙、磨石、石皿等が採集されて



第1図 前平地区の遺跡と周辺の地形

①芳ヶ迫第1遺跡 ②芳ヶ迫第2遺跡 ③芳ヶ迫第3遺跡 ④札ノ元遺跡 ⑤又五郎遺跡



第2図 前平地区遺跡群の位置及び周辺遺跡

1. 芳ヶ泊第1遺跡
2. 芳ヶ泊第2遺跡
3. 芳ヶ泊第3遺跡
4. 札ノ元遺跡
5. 又五郎遺跡
6. 青木遺跡
7. 黒草遺跡
8. 高野原地下式横穴
9. ヒダカン城址
10. 片井野遺跡
11. 天建神社址
12. 桜町遺跡
13. 井倉洞穴遺跡
14. 梅谷城址
15. 船ヶ山遺跡
16. 灰ヶ野遺跡
17. 灰ヶ野地下式横穴
18. ブクノ山遺跡
19. 堀口A遺跡
20. 堀口B遺跡
21. 萩ヶ瀬遺跡
22. 田野城址
23. (仮)七野地区遺跡
24. 丸野遺跡
25. 前畑遺跡
26. 八重A遺跡
27. 八重B遺跡

おり、今後、住居跡等が発見されると思われる。七野地区遺跡（仮称）は、発掘調査されていないが、畑のり面で甕穴住居跡と推定される掘り込みが確認されている。土器は青木、黒草と同時期のものである。田野町内には、縄文早期、後期の有望な遺跡が多く、この密度は県内でも高く、今後に期待される地域である。

縄文遺跡の多さに比べ、弥生時代の遺跡はほとんど知られていないが、県教委が黒草遺跡を調査した際出土した弥生終末期の土器は貴重な資料である。

古墳時代の遺跡は、灰ヶ野<sup>(4)</sup>、高野原<sup>(5)</sup>で地下式横穴が調査されている。昭和47年調査された灰ヶ野地下式横穴からは、蛇行剣が出土している。集落等の遺跡はまだ確認されていないがこれは調査等が少ないためと思われる。古墳時代の墳墓である高塚古墳は、現在のところ確認されていない。

縄文時代の遺跡の多さに比べ、弥生時代以降の遺跡は極端に少なくなっている。明治中ごろの地誌である平部藤南の「日向地誌」によると、田野町は、水利は極めて便ならず、往々に旱害があり、土地はやせていたとある。弥生時代以降の遺跡が少ないことは、このような環境に適應できる採集経済である縄文時代の遺跡に比べ、農耕を主とする弥生時代以降の遺跡にとっては、悪条件であったと思われる。

延喜式によると、古代日向の官道に設けられた駅は16駅が記されている。16駅の推定より日向には、国府より南へのルートには、諸県を通り肥後へ至るルートと島津庄へ至る2ルートが想定されている。島津庄へ至るルートの場合、「救麻（クマ）」が宮崎市熊野、「水保（ミマク）」が都城盆地の三股町あるいは山之口町が推定地であり、田野町は島津庄へ至る中間に位置し、16駅のうち「教式（クニ）」を田野町七野にあてる考えもある。田野町内において地下式横穴は、灰ヶ野と高野原で発見されている。灰ヶ野は、清武から田野へ入る入口にあたる要所であることは田中茂氏の指摘があるが、高野原について、田野から都城盆地へ至る出口にあたる。田野町は、海岸部の清武町から内陸部の都城盆地へ至る交通の要衝の地であったと考えられることから、今後の時代の遺跡も少なからず発見されるであろう。

注(1) 茂山 護「宮崎郡田野町採集の貝殻条痕文土器」宮崎考古第4号 1978。

注(2) 岩永哲夫、北郡泰道「黒草遺跡」九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書(3) 宮崎県教育委員会 1979。

注(3) 鈴木重治「宮崎県田野町青木遺跡の調査」日本考古学協会第28回大会研究発表要旨 1963。

注(4) 田中 茂「宮崎郡田野町灰ヶ野地下式横穴」宮崎県総合博物館研究紀要(6) 1972。

石川恒太郎「田野町灰ヶ野地下式古墳調査報告書」宮崎県文化財調査報告書第17集 宮崎県教育委員会 1973。

注(5) 日高正晴「高野原地下式1号墳発掘調査」宮崎県文化財調査報告書第24号 宮崎県教育委員会 1981。

注(6) 注(4)に同じ。

### 第3章 芳ヶ迫第1遺跡の調査

#### 第1節 調査の概要(第3図)

調査は、前年度の試掘調査結果より調査の対象をアカホヤ層下位の縄文時代早期の集石遺構等におき、その推定範囲内を調査した。試掘調査では、アカホヤ層上位での包含層、遺物等の出土はみなかったため、アカホヤ直下の小白斑を含む黄褐色土層まで重機で剥ぐことにしたが、アカホヤ層を除去後、焼石のまとまりが数ヶ所確認されたので重機の使用をこの面までとした。この焼石のまとまりは、球状の地層の回転部であることが、その後の調査過程の中で判明している。地層の回転部は、径2~3m前後で、アカホヤ、黄褐色土、褐色土、第2オレンジを含む礫層が乱れることなく回転している。このような箇所は数10ヶ所あり、その一つでレベル的には縄文早期のレベルで旧石器時代のナイフ形石器が出土し、これが旧石器時代の包含層を調査する発端となった。

調査対象地は、最大幅70m前後の半平坦面を有する丘陵性台地的様相を呈していたが、アカホヤ除去後の地形は、中央部に西へ傾斜する凹地があり、2つの丘陵に分けられ、北丘陵の中央にわずかな平坦面が存在していた。縄文早期の地形は、この地形に類似していたと思われるので、この面で1辺10mのグリッドを設定し、同面で100分の1の地形測量を行った。

今回の調査は、試掘調査の結果よりその対象をアカホヤ層下位の縄文時代早期においたが、調査区のはほぼ全面にわたって集石遺構が検出された他、焼石群、石組遺構、土坑等が検出された。集石遺構54基は、分布状態から4群に分けられ、調査区の中では平坦の地形となっているF・G-2・3区では、その密度は低い。F・G-2・3区では、遺物も多く出土し、特にチャート等のチップが多量に出土している。この区で炉跡と推定される石組遺構も検出された。焼石群は、B・C-4・5区、D・E-3区、H・1-3区、J-6区で4群確認され、土坑は、C-3区、E-3区の2区で検出されている。

C-3区の地層の回転部においてナイフ形石器が確認されたので、B・C-3区では、第2オレンジを含む層まで調査を行った。C-3区では、三稜尖頭器、剥片尖頭器が出土した他、流紋岩の剥片が多く出土している。遺構は、集石遺構が2基検出された。

その他、縄文時代晩期の罅穴遺構2基が検出された。I-5区では、焼土を含むピットが2個確認されている。また、時期不詳の長方形プランの土坑8基も検出されている。

## 第2節 層位(第4図)

芳ヶ迫第1遺跡の基本層序は、第1層が表土(15cm)、第II層アカホヤ風化土(30cm)、第III層アカホヤ(第1オレンジ・15cm)、第IV層小白斑を含む黄褐色ローム(30cm)、第V層小白斑を含む黒褐色ローム(30cm)、第VI層褐色ローム(40cm)、第VII層第2オレンジを含む機層となっている。なお、第I層表土下位に黒色土が部分的に残存している。

遺物は、第VI層褐色ローム下層から第VII層上層で旧石器時代遺物が出土し、第IV層から第V層上層で縄文時代早期の遺物、焼石が出土している。縄文早期の集石遺構は、第V層で確認している。縄文時代晩期の包含層は、アカホヤ層上位の黒色土に存在するが、耕作等により既に消滅している。アカホヤ層までは重機を使用したため、第IV層上面で遺構を確認している。

## 第3節 遺構と遺物

### 1. 旧石器時代

#### 遺構(第8図)

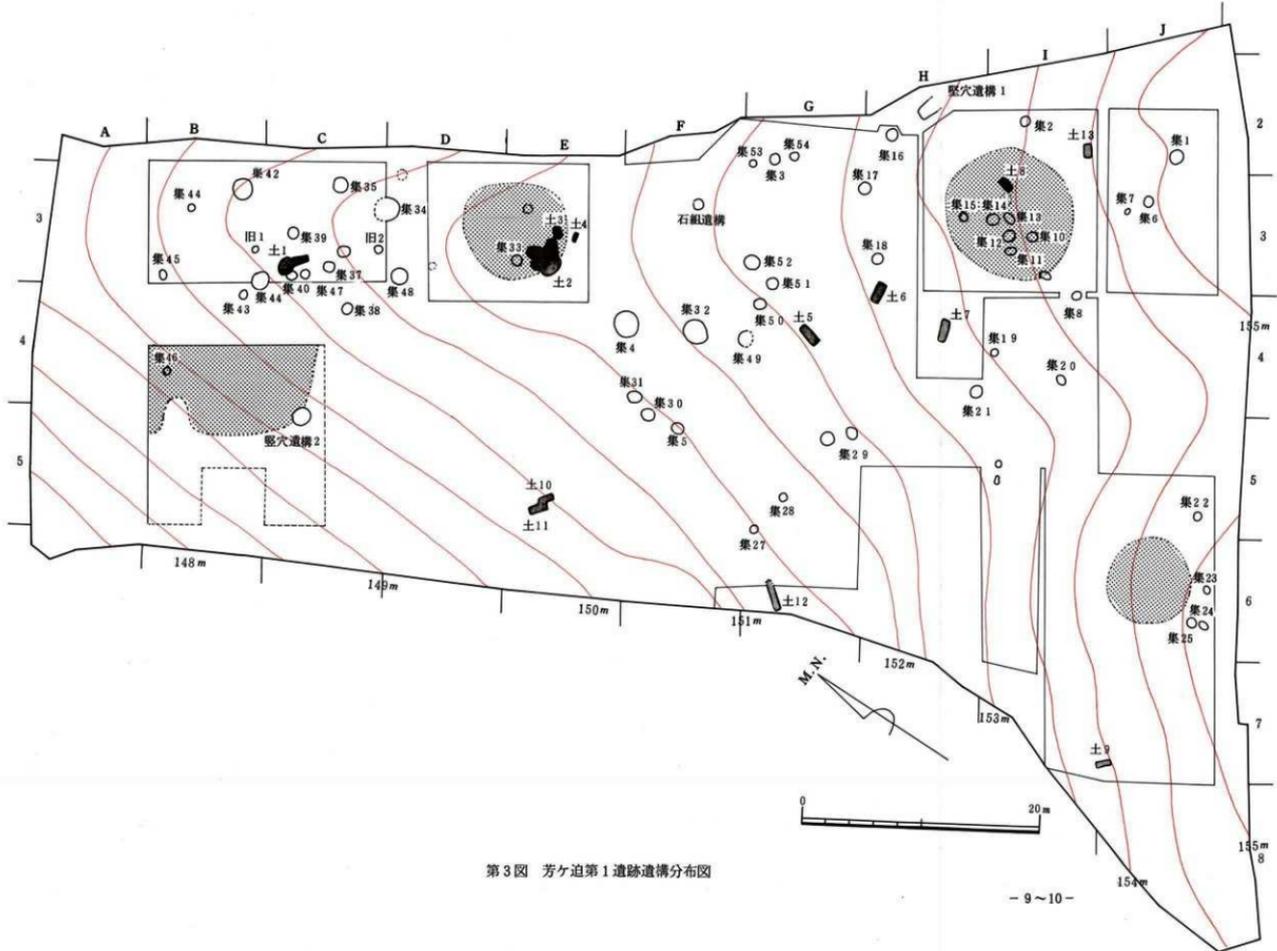
旧石器時代の遺構は、B-3区で1基(Ⅷ1)、C-3区で1基(Ⅷ2)の2基が検出された。検出された層は、第VII層第2オレンジを含む機層の直上である。Ⅷ1集石遺構は、拳大の焼石が約20個が楕円状(長径60cm、短径40cm)に集石し、下部に土坑は伴わない。Ⅷ2集石遺構は、1辺40cmの方形状に集石し、Ⅷ1と同様下部に土坑をもたない。

#### 遺物(第7・8図)

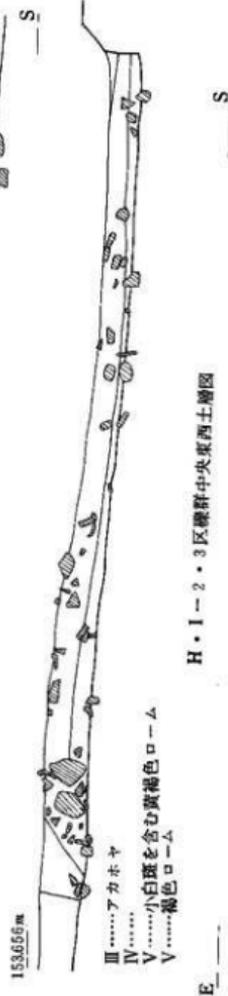
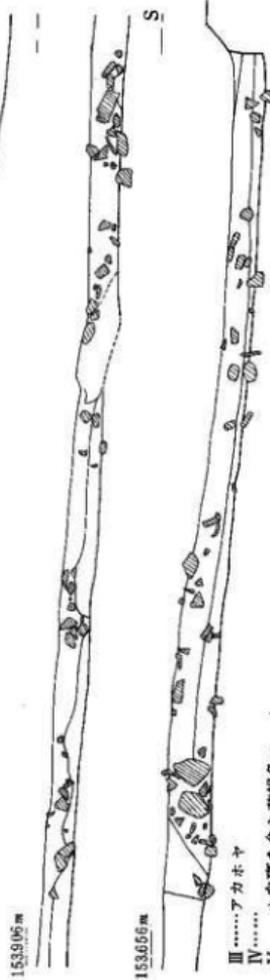
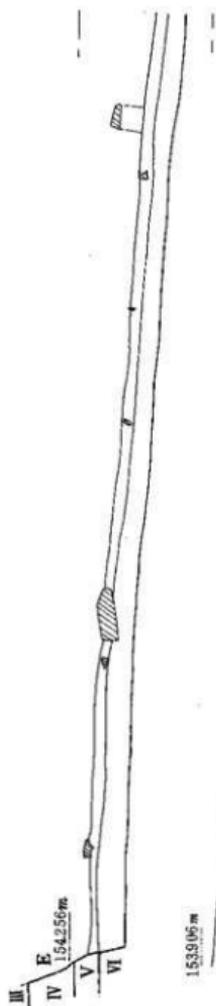
遺物は、ナイフ形石器、剝片尖頭器、三稜尖頭器、彫器、使用痕のある剝片等が出土している。その分布は、2基の集石遺構間の径5mの範囲内にまとまりを呈していた。14～16はナイフ形石器である。14は、地層の回転部で出土したものである。安山岩系の縦長の剝片を素材としており、背部の刃澁しを行っている。現長5.1cm、幅2.5cm、厚さ0.9cm。15は安山岩系の剝片を素材とし、基部の両側を刃澁し、加工を行っている。現長4.4cm、幅2.1cm、厚さ1.1cm。16は、砂岩の縦長の剝片を素材とし、基部の両側を刃澁し加工を行っている。

17は、一面に剥離を残し、二面に二次加工を加えた三稜尖頭器である。石材は安山岩系。長さ6.9cm、幅1.1cm、厚さ1.6cm。18は、縦長の剝片を素材とした剝片尖頭器で背及び基部の刃澁し加工を行っている。砂岩製。現長6.8cm、幅3.8cm、厚さ1.5cm。

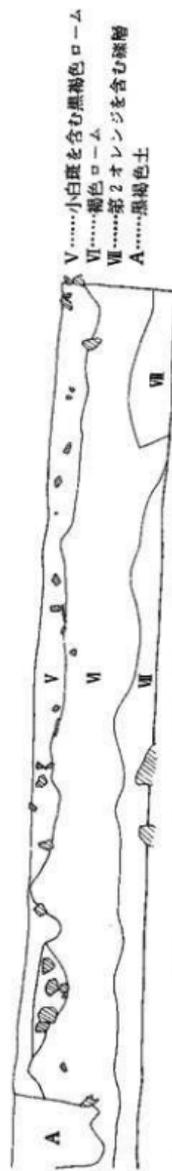
19は、頁岩を素材した彫器である。彫刀面は1辺にそって一面施されている。長さ5.4cm、幅2cm、厚さ2.5cm。20は、一面に自然面を残した剝片に、2辺に二次加工を加えられた搔器である。素材は粘板岩。長さ4.5cm、幅3.9cm、厚さ1.8cm。21は、下端に使用痕と推定される面を



第3図 芳ヶ迫第1遺跡遺構分布図

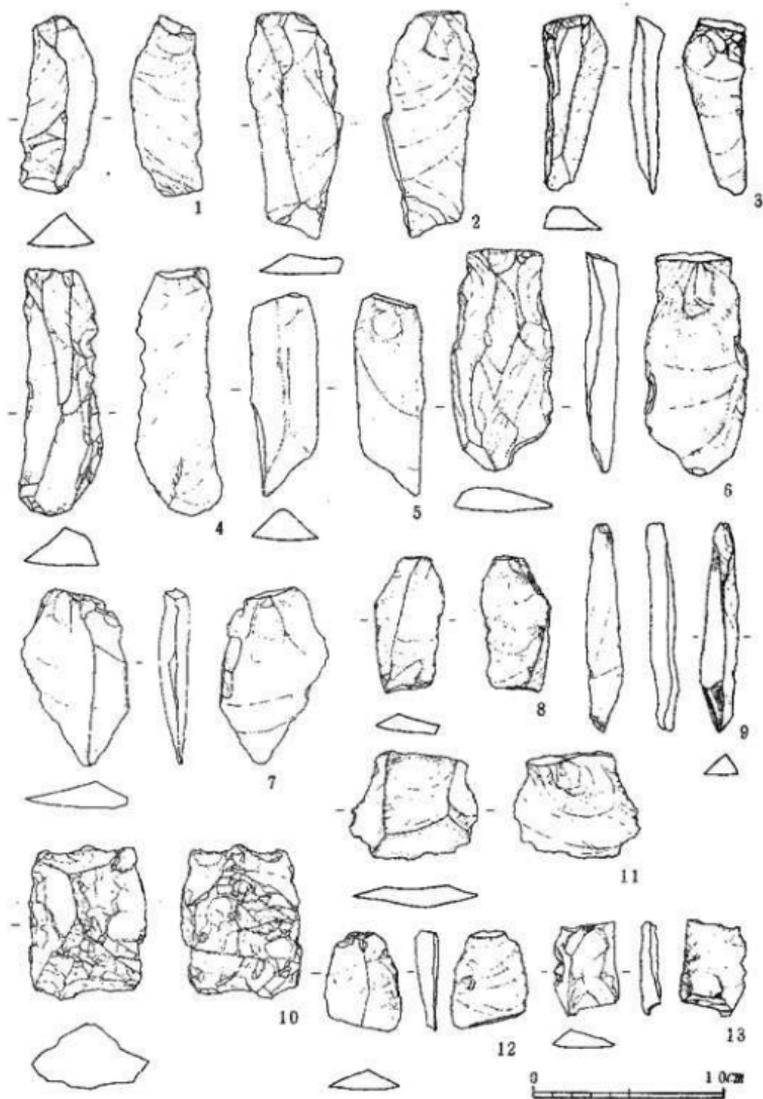


H・I-2・3区群中央東西土層図

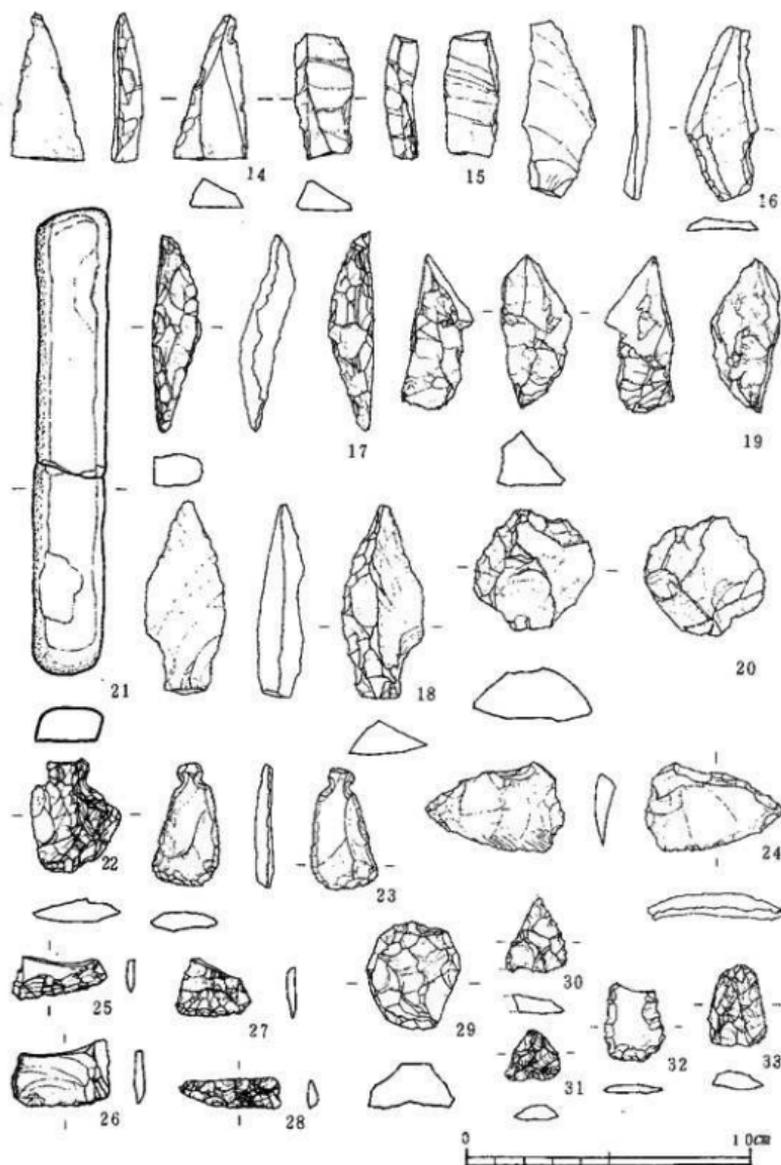


C-3区 北壁西土層図

第4図 土層図



第5图 出土石器实测图(1)



第6图 出土石器实图(2)

もち丁具と推定されるものである。石材は砂岩、長さ16.4cm、幅2.2cm、厚さ1.4cm。1、8、11、13は、流紋岩の割片で、8は使用痕がみられる。2～6は、縦長の砂岩の割片で、割片尖頭器、ナイフ形石器の素材と考えられるものである。7、9は安山岩系の割片で7は使用痕をもつ。10は、粘板岩の石核で長さ8.3cm、幅6.2cm、厚さ3.7cmである。

## 2. 縄文時代

### 遺構(第8～15区)

縄文時代の遺構は、早期と晩期の二時期のものが検出された。早期の遺構は、第V層で検出されている。第四層最下層付近より拳大の焼けた角礫が出土しはじめ、その分布範囲は、密度に濃淡はあるが、ほぼ調査区全域にわたっている。その中であって焼石が0.5m～2m前後にまとまる所謂集石遺構が54基確認された。さらに、西斜面にあたるB・C-4・5区、D・E-3区、H・I-2・3区、J-6区の4ヶ所では、焼石が数mの範囲に集中する焼石群が確認された。D・E区の焼石群の下部では土壇数基、H・I区では集石遺構が検出されている。この他、C区で土壇1基、F区で石組遺構が検出されている。

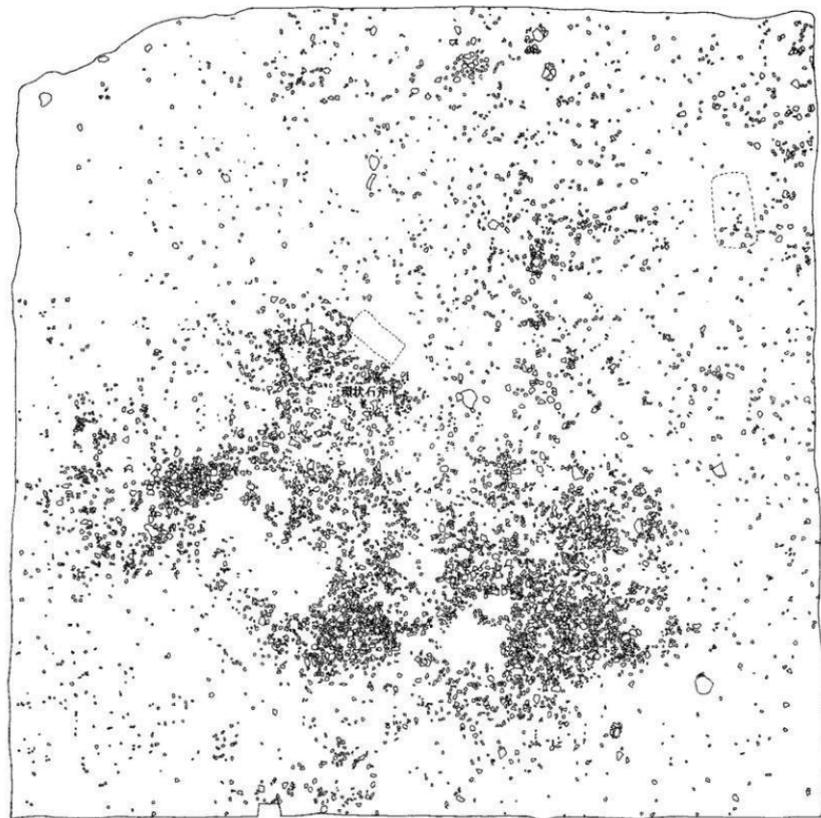
集石遺構54基は、分布状況から、B・C-3区、H・I-2・3区、J-6区、F・G区の4群に大きく分けられ、F・G区については、平坦部と西斜面部に細分できる。E～G-3区は、調査区内では最も平坦的地形を示すが、集石遺構の密度は低い。この区においては、土器やチャート、粘板岩等のチップが多く出土し、また、石組遺構も検出されている。当遺跡では竪穴住居跡は、確認されていないが、F・G区は、居住空間とも考えられる。

集石遺構は、拳大から小児頭大の焼石が径0.5～2m前後の範囲に円形ないし楕円状に集石している。焼石は、砂岩の角礫で熱のため赤色に変色しひびのはいるものも多く見られた。また、中には煤あるいはタール状の物質が付着している焼石もある。集石遺構は、単に平面的に集石するものと下部に土壇を伴うものがある。土壇を伴うものの中には、底面に配石をもつものもある。土壇内にはいる礫は、床面より数cmういておりその間に多くの炭化物が含まれており、埋土は黒褐色ないし黒色を呈していた。また、礫の量が少ない場合でも埋土に炭化物の混入が認められたが、土壇内に焼土が含まれたり、壁面が焼けたりしているものは認められなかった。

集石遺構は、その形態から次のように分類される。

I類は、焼石が平面的に拡がるものである(厩2、5、7、22、23、28、31)。礫は、1m前後の範囲に集石している。集石はその状態が密なものも粗なものもある。

II類は、土壇の径が1m以下のものである(厩3、6、8～10、12、13、18～20、



第7図 H·I-2·3区種分布状況図

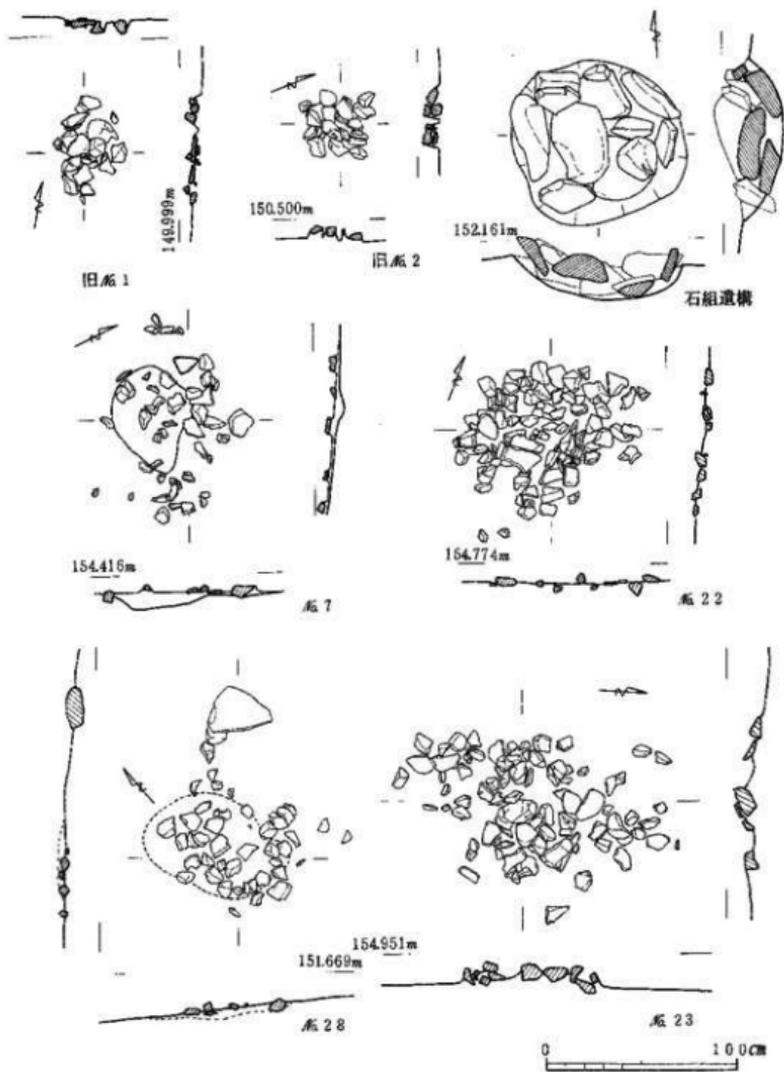
24、29、38、44~46、53、54)。芳ヶ迫第1遺跡で検出された集石遺構の多くはⅡ類である。土坑のプランは、円形と楕円形のものがあり、円形ものは礫が多い傾向がみられる。厩39は、長径1.2m、短径0.7mで礫の量は少なく、埋土に炭化物が含まれている。礫は、白っぽい色を呈し脆い砂岩である。このような砂岩の使用は、B・C3区の厩36、37の集石遺構でみられ、礫の量が少ない。厩46は、B・C4区の焼石群の下で検出された。長径60cm、短径50cmの土坑をもつ。礫は床面より10cmほど浮いた状態であり、下部に炭化物がみられた。厩6、10、12、18などは径0.9cm前後の円形ないし円形に近い楕円形の土坑をもつ。礫は土坑内に密集している。下部に炭化物が含まれている。厩8は、I-3・4区の境で検出されたもので、礫は中央に盛り上がりが見られた。厩54は、礫の量も少なく、径が60cm前後、深さが10cmほどで浅くⅠ類に含めた方がよいかもしい。

Ⅲ類は、土坑の径が1m以上のものである(厩11、33、34、40、47)。厩11は、長径1.45m、短径1.06m、深さ25cmあまりの楕円形の土坑をもつ。確認時は、径0.5mの小規模の集石遺構の様相を呈していた。厩1は、径約1.1m、深さ25cmあまりの土坑をもつ。多量の礫が詰まるが、床面より10cmあまり浮いており、その間に炭化物が多く見られた。厩34は、大型の集石遺構で径1.85m程で、すり鉢状を呈する。C-3区のり面で確認されたもので土坑上位には礫をあまり含まない。Ⅲ類集石遺構は、全体に占める割合は少なくB・C-3に集中している。

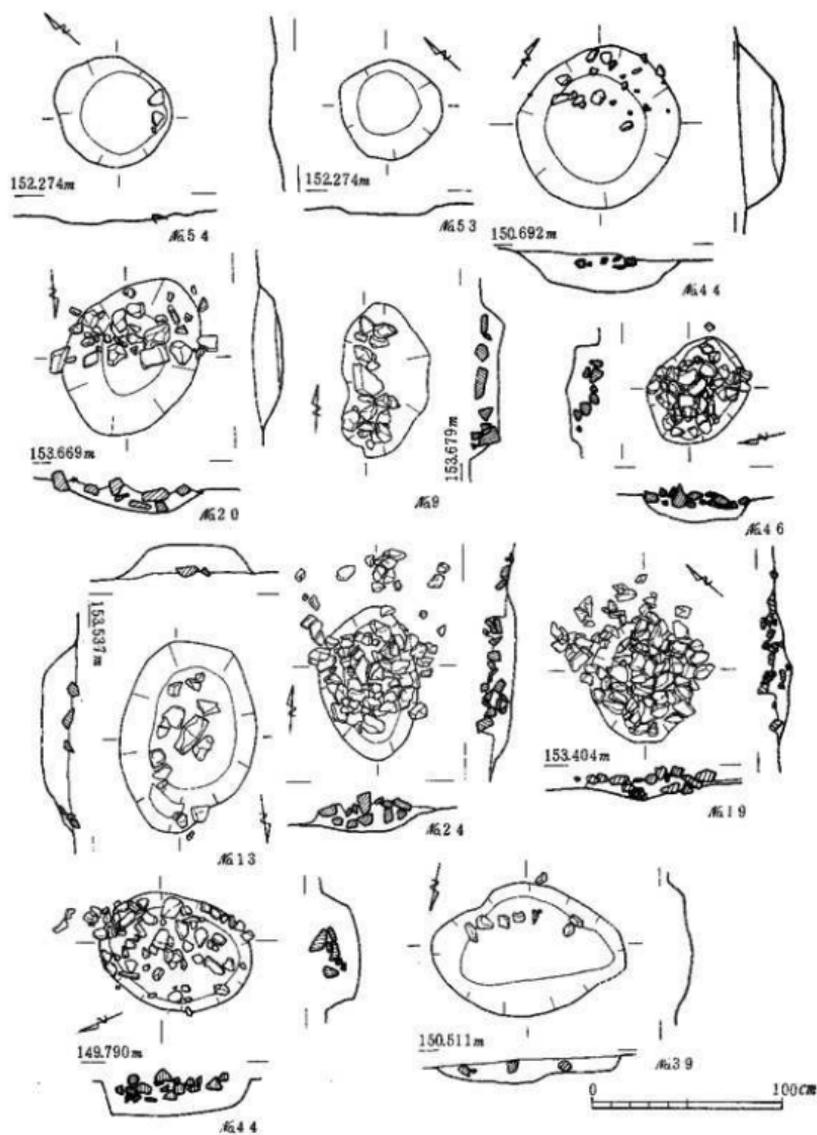
Ⅳ類は、土坑床面に配石をもつもので厩16、31、52の3基が検出された。厩14、15号は床面に平たい石があるが、先の3基に比べ配石とは言い難い面がある。厩16は、径95cm、深さ20mを測る土坑をもち、床面中央に30cm×25cm前後の偏平な河原石による配石がある。河原石は熱のため赤色に変色し、脆く剝離等が見られた。配石直上で炭化材や炭化粒が出土し、埋土下部も黒色ないし黒褐色を呈している。厩52は、径1.7m、深さ30cmほどの土坑をもつ。中央に偏平な河原石を1個もち、宮崎学園都市遺跡群内の前原西遺跡で検出された集石遺構に類似した形態であった。厩31は、径90cmは円形の土坑をもつ。深さは15cmあまりが確認されている。配石は長径35cm、短径20cm、厚さ15cmを最大とする河原石で配石を行っている。Ⅳ類集石遺構は、調査区内では最も平坦面的地形であった地区に集中している。

Ⅴ類は、厩4集石遺構1基であるが、二段掘りの特異な土坑をもつ。土坑は上面で径約2mを測り、中位面で径1.1mを測る。深さ約1m。土坑内の礫は中央が盛り上がり、集石確認面では、径1.5mの範囲に礫の集中がみられた。礫は下位にいくほど大きくなり、下段土坑の壁面に丁寧さはないが、配石的様相を呈していた。中央に底石はない。埋土に炭化物を含む。

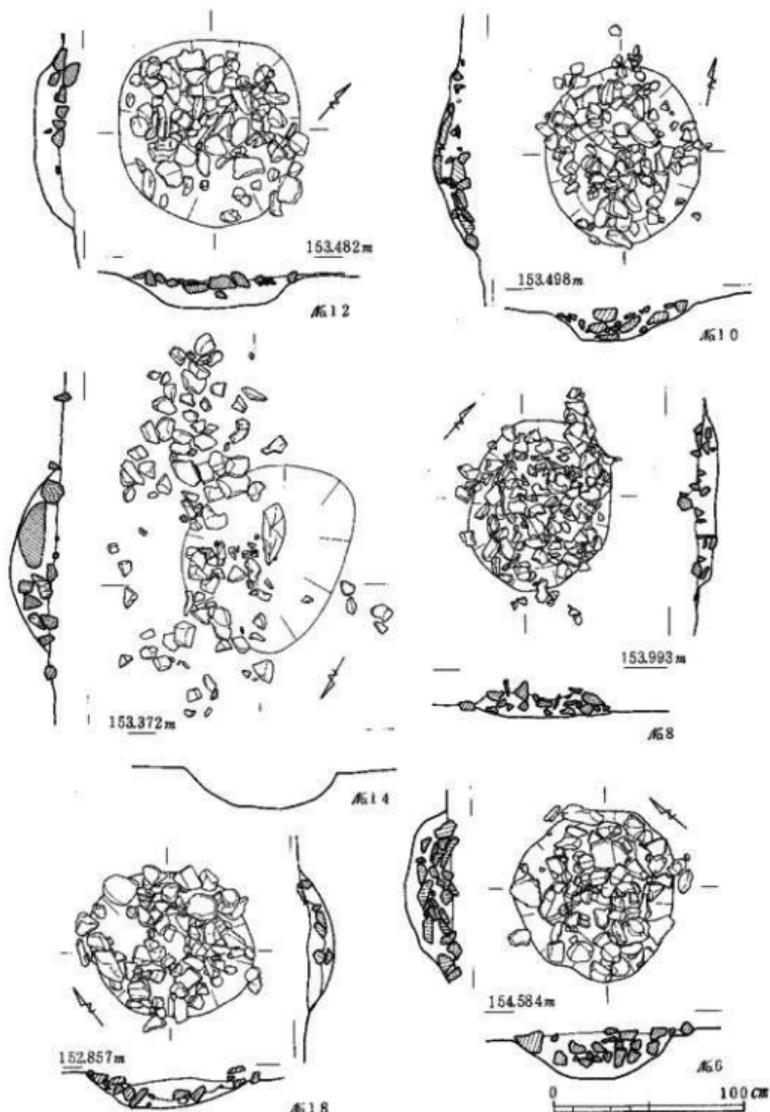
石組遺構(第8図)は、F-3区で検出されている。径90cmほどの土坑の壁面に偏平な河原石



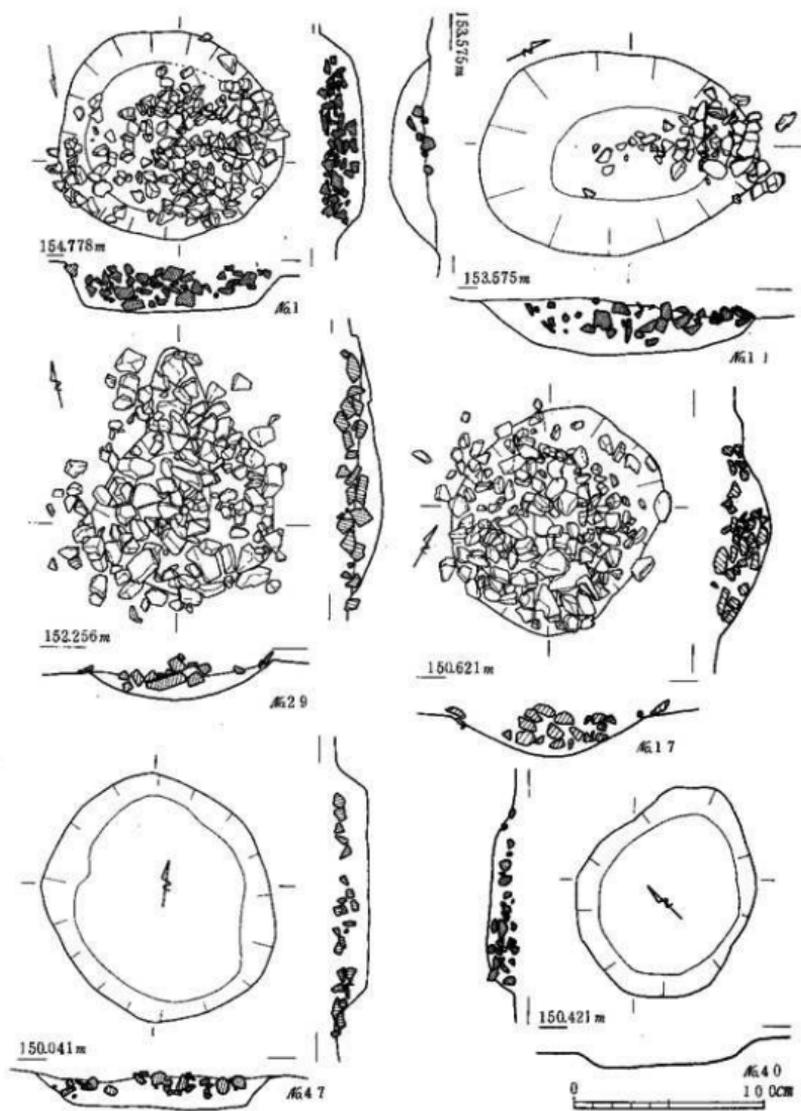
第 8 圖 集石遺構等実測図 (1)



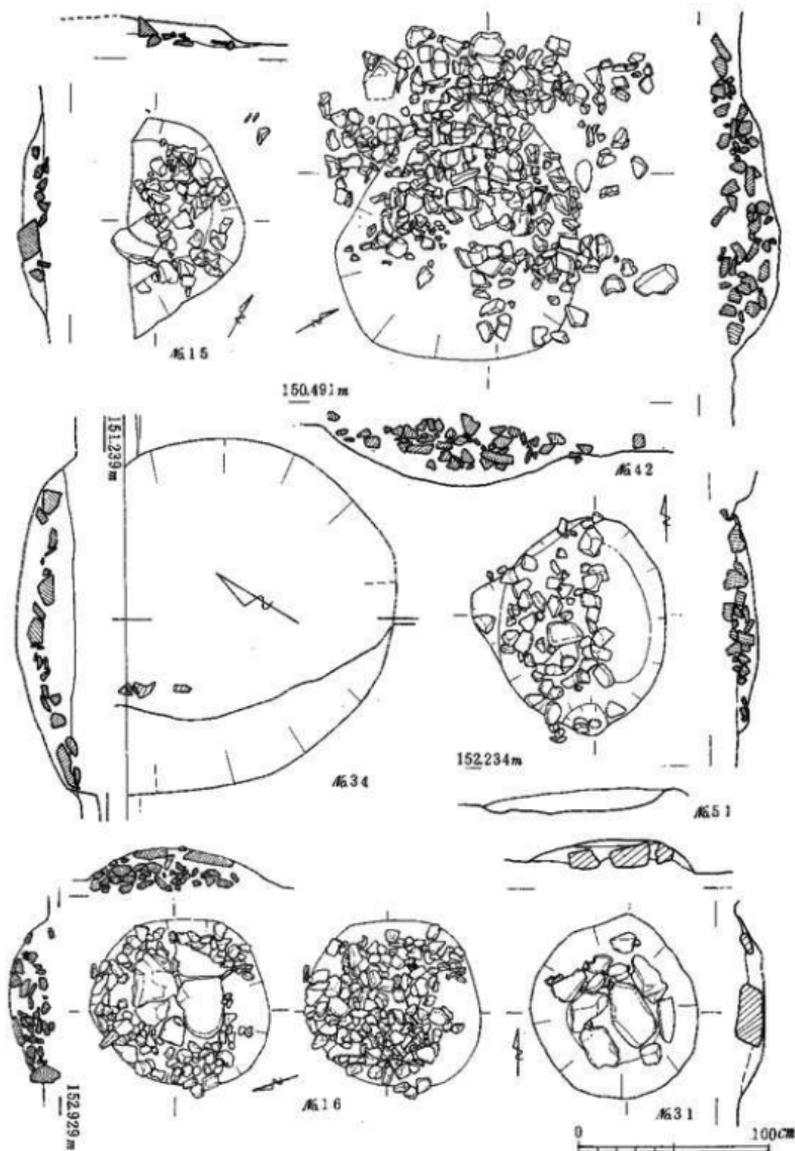
第9圖 集石遺構実測図(2)



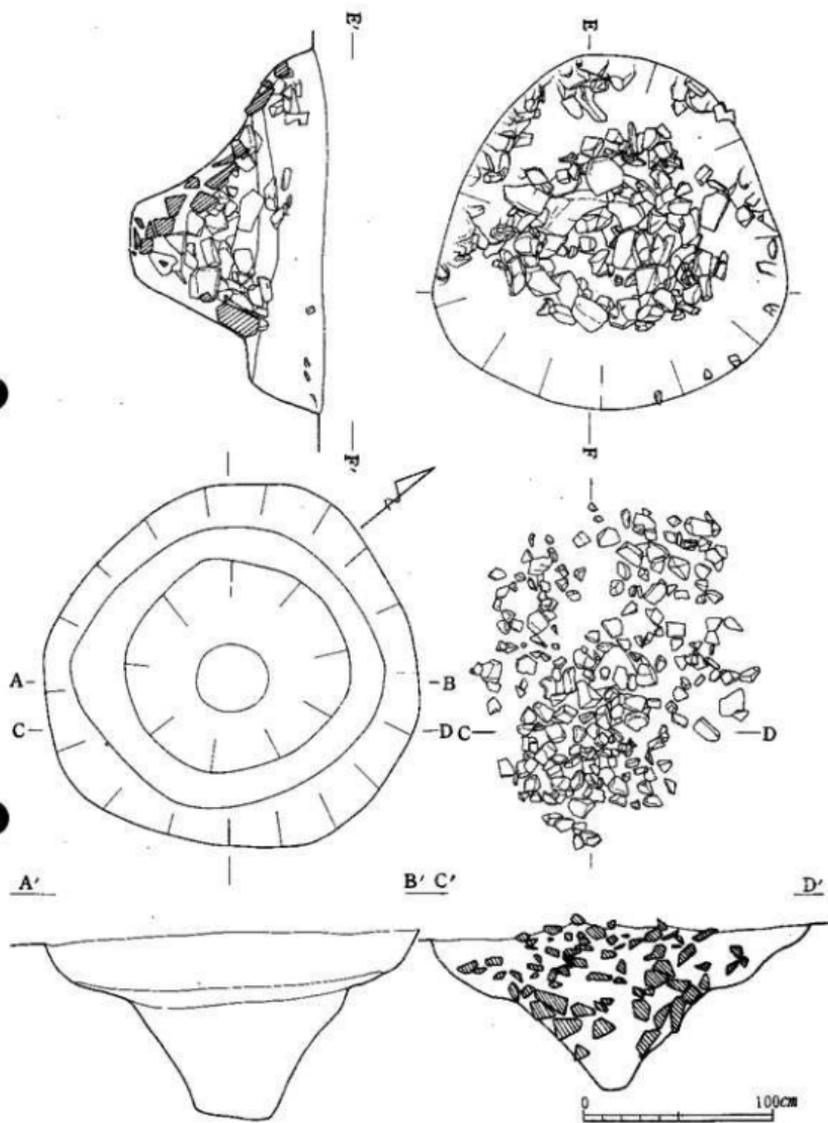
第10図 集石遺構実測図(3)



第 11 圖 集石遺構実測圖(4)



第 12 圖 集石遺構実測図(5)



第13図 集石遺構No. 4実測図(6)

を立てかけ、中央にも河原石をおいている。遺構は、炉的形態をもつが、火を受けて赤化している部分は見られなかった。床面から石鏃が1点出土している。石組遺構内からは、周辺に見られる焼石は出土していない。

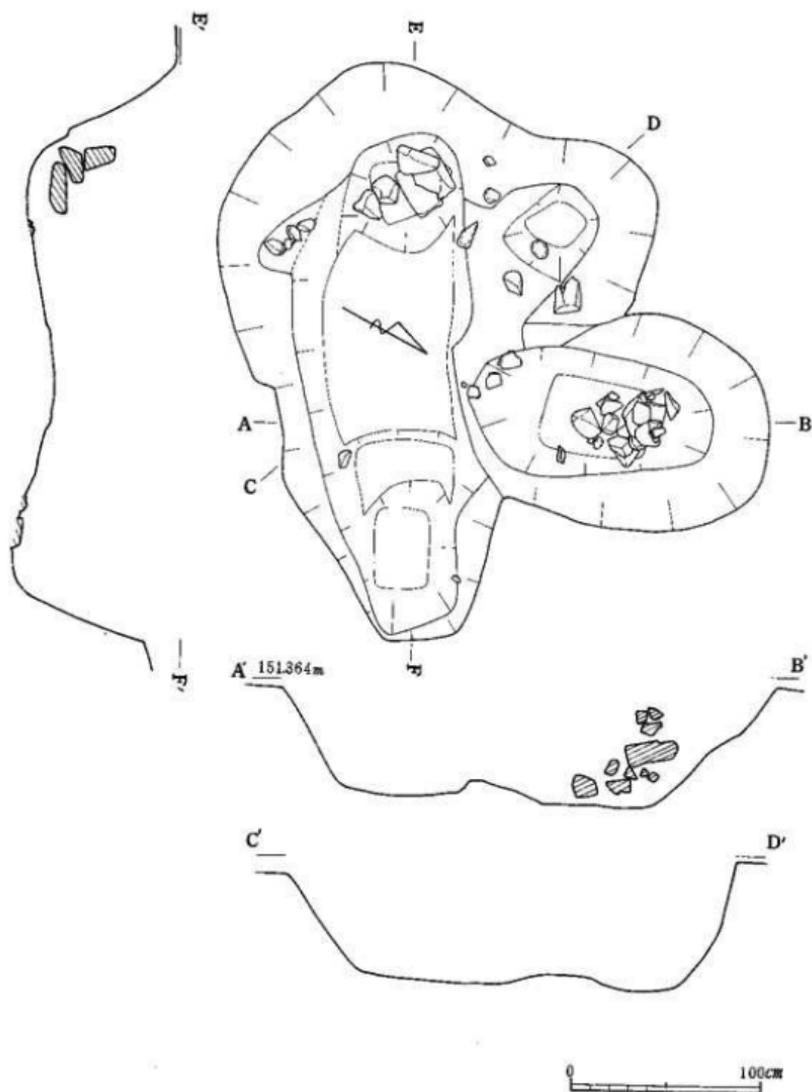
土城は、C-3区で検出されている。C-3区のⅡ1土城(第15図)は、1.5m×1.1m、深さ0.8m前後を測る隅丸長方形の土城と1.9m×0.7m、深さ0.2m前後を測る長方形の土城が切り合っている。切り合い関係から後者が新しい。埋土は小白斑を含む黒褐色系である。遺物は出土していない。

E-3区では、3基の土城が検出されている。うち2基は、焼石群の下に位置する。Ⅱ2土城は1.6m×1m、深さ0.7m前後の土城が4~5基切り合った状態であるが、前後関係は確認できなかった。うち2基は、壁際に焼石が見られ、1つは流れ込んだ状態で、1つは偏平石を積んだ状態であった。Ⅱ1土城からは、貝殻炭文土器が出土している。埋土は小白斑を含む黒褐色土である。Ⅱ3・4土城は、1.25m×0.75mほどの長方形プランで浅い土城である。

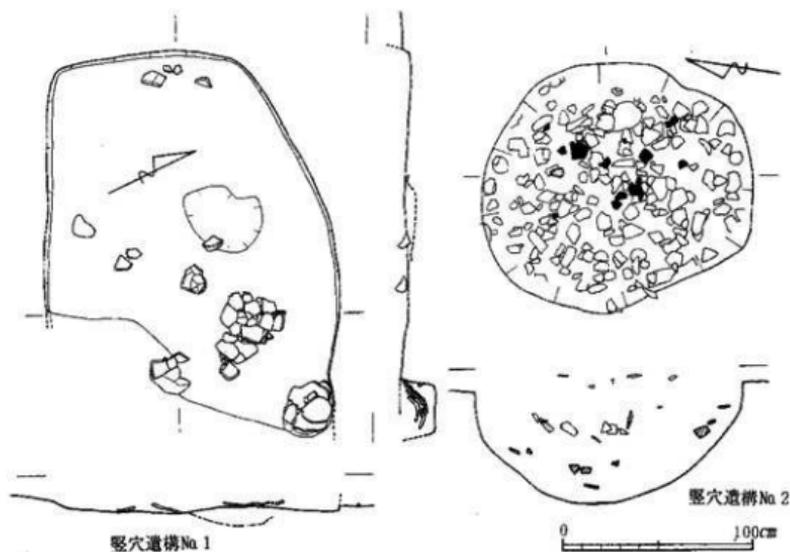
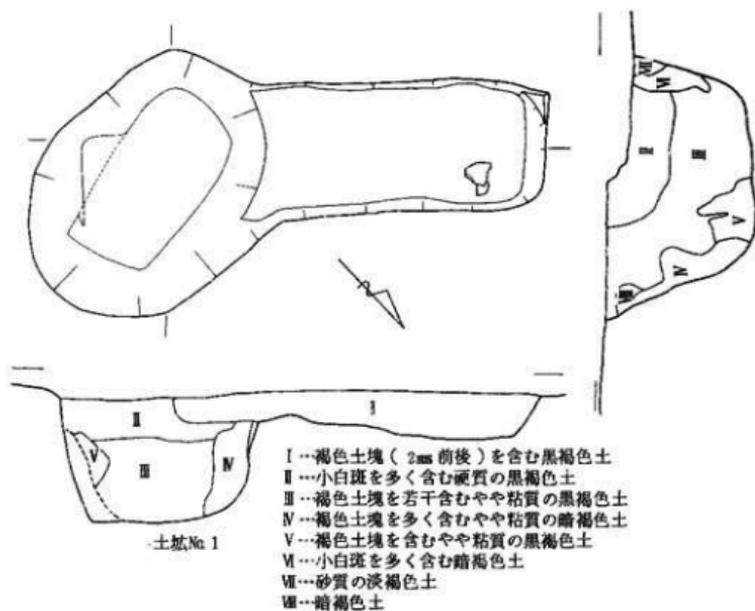
縄文晩期の遺構は、2基検出された。H-2区で検出された竪穴遺構Ⅱ1(第15図)は、長軸2m、短軸1.55mを測る不整形の長方形プランである。深さは10cmほどが残存している。中央やや北よりに凹みがあり、焼石が見られた。床面上及び北東隅のピット内より土器が重なって出土した。第22図122~124が床面上、120がピット内出土である。プランは不整形で柱穴は検出されていないが、竪穴住居跡の可能性が高い。

竪穴遺構Ⅱ2(第15図)は、径1.4m、深さ0.6mを測る竪穴である。竪穴上面で土器が出土し、中層に焼石がレンズ状に詰っていた。出土遺物は、土器の他、欠損した石斧を再利用したと考えられるたたき石が出土している。埋土は、アカホヤを含む白黄褐色土である。

その他時期不詳の土城が9基検出されている(第16・17図)。土城は、全長が1m~2.5mであるが、幅は0.5m前後でいずれも長方形プランを呈している。土城Ⅱ7は、1.9m×0.53m深さ0.7mの長方形プランで、埋土は上層がアカホヤを含む黄褐色土、下層がやや粘質の黒褐色土でレンズ状を呈している。Ⅱ8は、1.1m×0.45m、深さ0.35mほどの長方形プランをなす。埋土は、3層に分けられ、ほぼ水平に堆積していた。Ⅱ12土城は、上面プランが現長2.55m幅0.5mの長方形プラン、深さ0.95mで断面袋状となっている。埋土は上層に白灰色のボラ小粒がみられ、下層の中央には幅40cmあまりに黒色土、その両側は暗褐色土となっている。9基の竪穴は、時期は、遺物等が出土していないため不明であるが、Ⅱ8、Ⅱ12以外の埋土は、縄文晩期の竪穴遺構Ⅱ2の埋土に類似していたので、同時期の可能性がある。

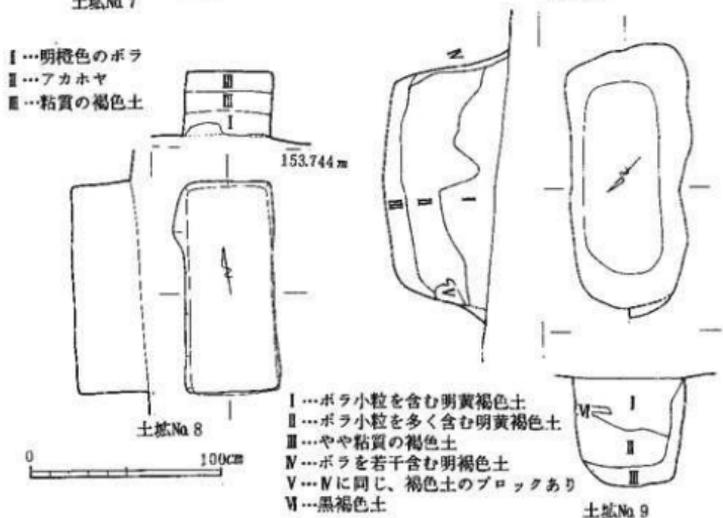
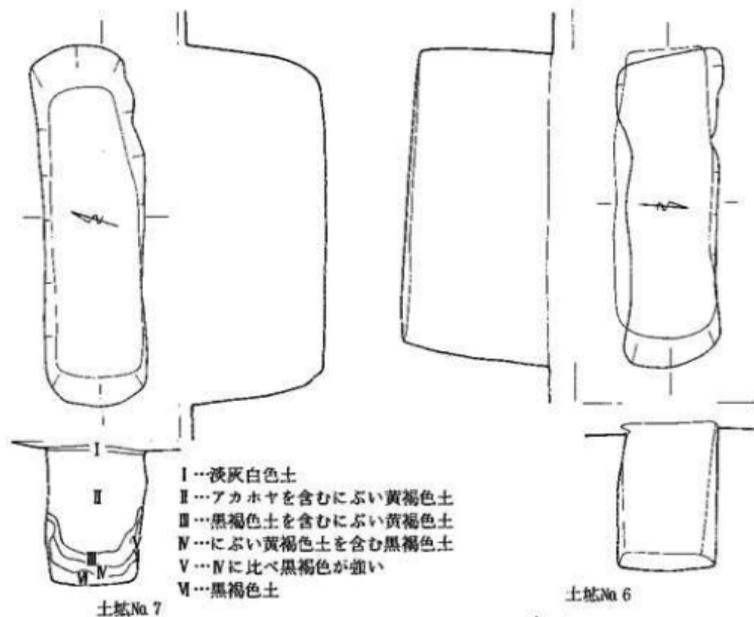


第14圖 土坑No.2突測圖

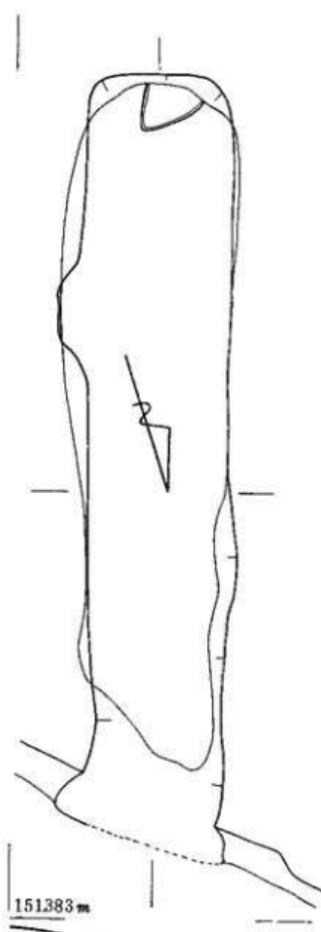
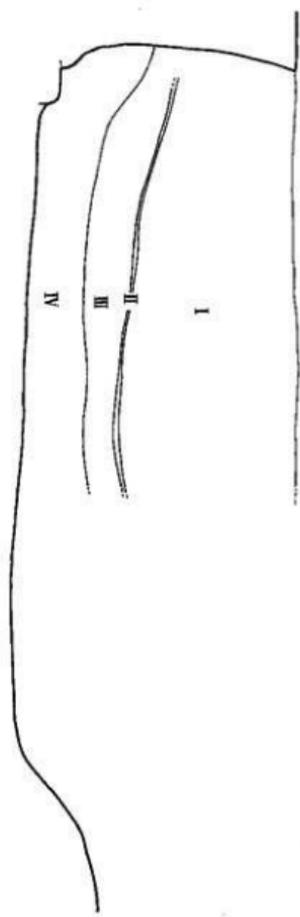


堅穴遺構No 1

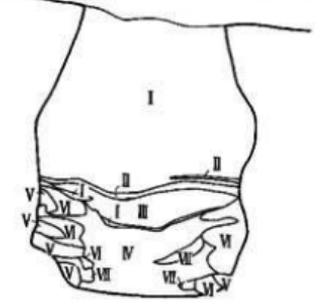
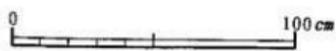
第15図 土坑・堅穴遺構実測図



第16図 土坑実測図



- I
- I ... 白灰色のボラ小粒
  - II ... 粘質ぎみのシラス
  - III ... シラス
  - IV ... 黒色土
  - V ... 黒色土を若干含む暗褐色土
  - VI ... 黒色土を含む暗褐色
  - VII ... 黒褐色土



第17図 土基 No. 12 実測図

## 遺物(第18~24図)

出土した縄文時代の遺物は土器と石器で、大半は集石遺構に伴った早期のものである。晩期の遺物は、竪穴遺構、ピットから出土している。

縄文早期の土器は、押型文土器、日紋文土器、撫糸文土器、無文土器等がある。文様、器形等より次のように分類される。

### I類……楕円押型文土器

- a……横方向に施文された後、ヨコナデにより一部消されてベルト状を呈する。文様も3.3mmと細く整っている。厚さも薄い(1~3)。2は内面に斜沈線が施文されている。
- b……横方向に施文されたもの。(4)
- c……外器面に縦方向に施文され、口縁部内面は横方向に施文される。口唇部にも施文されたもの。(6・7)
- d……縦方向に楕円文が施文され、口縁部内面は横方向に施文されたもの。口縁部は丸く仕上げられ、刻目をもつ。(8・10・24)
- e……口縁部が短く外反し、外器面に縦方向の楕円文が施文されたもの。口縁外反部内面に横方向に施文されている(11)。
- f……外面は無文で、口縁部内面に楕円文が施されたもの。(13)
- g……I類の底部。(14~17)。15~17は平底、14は不明、楕円文はいずれも横方向に施文されている。

### II類……山形押型文土器

- a……横方向ベルト状に山形文が施文されたもの。(21)
- b……横方向に山形文が施文されたもの。(18~22)。19の内面調整は貝殻条痕である。21は、文様が大きく、深く、厚さも他の3点に比べ厚いので2つに細分できる。
- c……口縁部が外反し、外器面に縦方向の山形文、口縁部内面に横方向に山形文が施文されたもの。(28)。27は、風化のため外器面に文様が見られないが、II-Cに含めてよいかと思われる。
- d……口縁部に原体条痕文、胴部に横方向の山形押型文が施文された円筒土器。口縁部は丸く仕上げられ、器壁も厚い。(25・26)
- e……II類の底部。(29・30)。30は、弥生中期の充実した脚台に類似する特異な底部である。

### III類……格子目押型文。(31)

IV類……口縁部文様帯に貝殻による刺突文等をもち、口縁部外端に刻戸をもつ。胴部はナデ調整されている。(32~35)

V類……貝殻条痕文をもつ土器。

a……口縁外端が内傾し、ヘラ様工具で刺突された上器。胴部の貝殻条痕文は浅い。(36)

b……胴部に貝殻条痕文をもち、口縁直下に短沈線やヘラ様工具による刺突文をもつ。内面は丁寧なナデ調整である。(38~40)

c……胴部に貝殻条痕文をもち、口縁部直下に短沈線文、ヘラ様工具による押圧文等をもつ。(41~45) 43以外の土器の内面調整はケズリである。

d……口縁部に横方向、胴部に縦方向の深い貝殻条痕文をもつ。内面はナデ。焼成良好で堅固である。(46)

e……外器面に浅い貝殻条痕文をもつ。内面はヘラナデ調整。(47・48)

f……外反する口縁部で外器面に浅い貝殻条痕文をもち、内面はヘラミガキである。eと類似する。(49)

g……片面に貝殻条痕文をもち、片面はナデ調整されたもの。(50・51)

h……貝殻条痕文をもつもの。(52~54)

VI類……貝殻腹縁刺突文をもつ土器。

a……口縁直下に横位の、胴部に末広がりがり状ないし菱形の貝殻腹縁刺突文が施文され、胴部下端に縦方向の貝殻腹縁による短沈線をもつ。内面はケズリ調整で、上位はケズリ後荒ナデが施されている。器形は円筒形。(57・62)

b……外器面は、浅い斜方向の貝殻条痕文を地文とし、口縁直下に横方向、胴部に菱形に貝殻腹縁刺突文が施文されたもの。内面はケズリ調整。(58~61)

VII類……口縁端部が肥厚し、口縁部が内湾ぎみの土器。口唇部は内傾ないし平坦である。文様により次のように細分される。

a……3単位ほどの貝殻腹縁条痕文が短く横走ないし斜走しそれを繰返すもの。(63~65)

b……貝殻腹縁で稜杉状に刺突するもの。内面ヘラナデ。(67・69・71・72・76)

c……貝殻腹縁で横位に刺突するもの。内面ヘラナデ。(68・70)

d……b・cの底部。

e……貝殻腹縁で縦位に刺突するもの。内面ヘラナデ。(74)

f……ヘラ様工具でハの字状にあるいは縦方向に施文するもの。内面ヘラナデ。(77・78)

g……ヘラ様工具で稜杉状に施文するもの。(80・81)

- h……貝殻腹縁で横位に刺突し、その間にヘラ様工具で稜状に施文し、胴部、下部は貝殻腹縁で縦位に施文するもの。内面ヘラナデ。(81~85)
- i……口縁端部の肥厚は見られないが、口縁部が内湾する。口縁部に棒状工具で横位に刺突し、胴部に曲線文をもつ。内面ナデ。(86)
- j……口縁直下に横位に、その下部に縦位方向に貝殻腹縁を刺突するもの。(87)
- k……無文のもの。(92)

Ⅷ類……外器面及び口縁部内面に燃糸文をもつもの。(93・94)

Ⅸ類……外器面が無文のもの。(100~106) 102は内面に斜沈線文が施文されている。

早期の土器は、この他平格式に類似したものなどが出土している。底部は尖底が1点出土した他は平底ないし上げ底などが出土している。

晩期の土器は、115~119・121が堅穴遺構62 120・122~124が堅穴遺構61から出土している。120は、推定口径27.9cmで胴部でくの字形に内湾し開く。口縁部は、粘土貼り付けで低い立ち上がり部をつくっている。119の内面はヘラナデである。晩期の土器は大半が浅黄色を呈する。

石器は、石鏃、石匙、環状石斧、局部磨製石斧、磨石、たたき石等が出土している。磨石112、たたき石120以外は早期のものである。(第6・23・24図)

石鏃は、70点あまりが出土している。石材は、粘板岩、チャート、流紋岩、黒曜石、メノウがあり、多くは粘板岩製である。黒曜石で姫島産と考えられるものは70・71・100の3点である。石鏃は、凹基式、平基式、円基式があり、形状及び基部等により次のように分類される。Ⅰ類は、二等辺三角形で梯形の挟りをもつもの(34・35等)、Ⅱ類は、正三角形で側縁が外湾し、深い挟りをもつもの(49・50等)、Ⅲ類は、脚部が「ハ」の字状に広がるもの(56・57等)、Ⅳ類は、基部に弧状の挟りをもつもの(66・69等)、Ⅴ類は、基部に浅い挟りをもつもの(74・79等)、Ⅵ類は、磨製石鏃(80)、Ⅶ類は、正三角形をなすもの(82・83)、Ⅷは、鈍片鏃(85・86等)、Ⅸ類は、大型の石鏃(102)、Ⅹ類の円基式(92・103等)に分類される。出土した石鏃は、Ⅰ類の占める割合が大きい。

石匙は3点出土した。22は縦形の石匙で片側縁に刃部をもつ。石材はチャート。23は、粘板岩を石材とした縦形の石匙で、つまみ、刃部の形成は丁寧である。24は、粘板岩を石材とした横型の石匙で、2次加工によりわずかにつまみを造り出している。

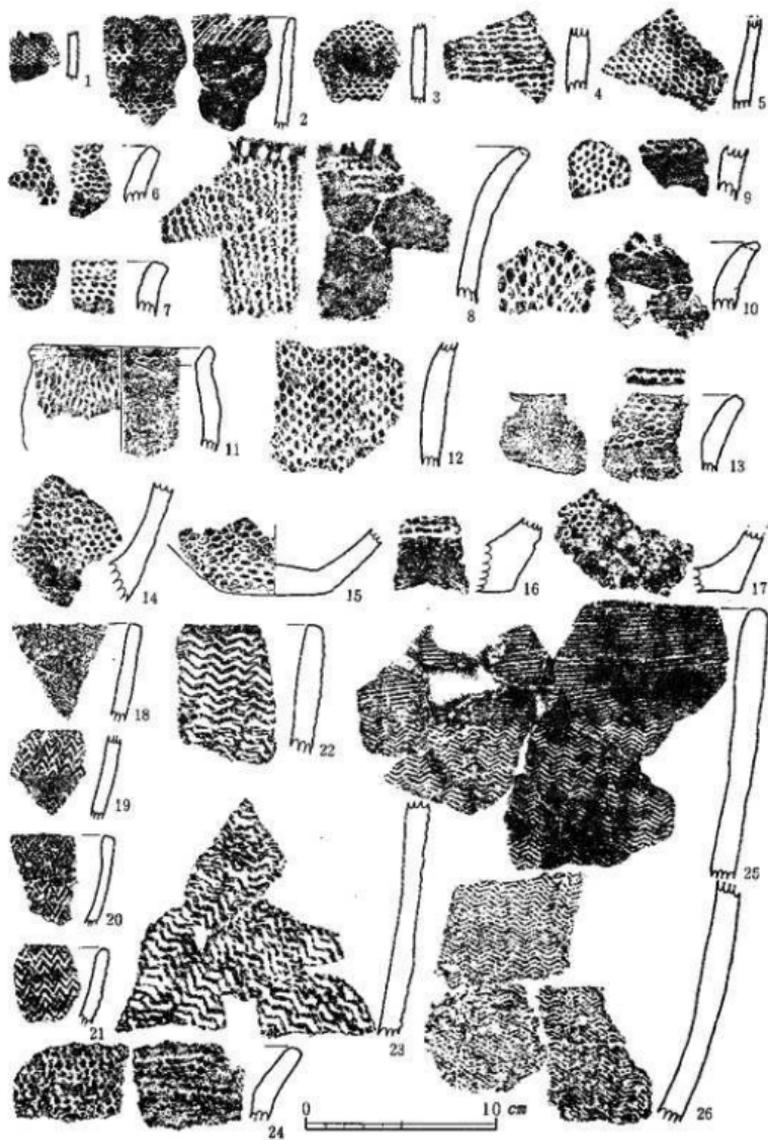
石斧は3点出土している。107・108は局部磨製石斧で粘板岩を使用している。107は短冊型で全長9.6cm、幅5.0cm、厚さ2.0cmである。109は、Ⅰ-3区の礫群内で出土した環状石

斧である。砂岩を使用し、復元径8.4 cm、孔径2.5 cm、厚さ1.6 cmを測る。全周とも丁寧に磨研され、孔内の稜にあたる部分は磨れて丸くなっている。棒状のものをさし込んだものと思われる。刃部に刃こぼれもみられる。106は、C-4区で出土した円盤状石器である。砂岩を素材とし、外周は両面からの剝離により円形に成形している。径10.8 cm、厚さ1.0 cmを測る。

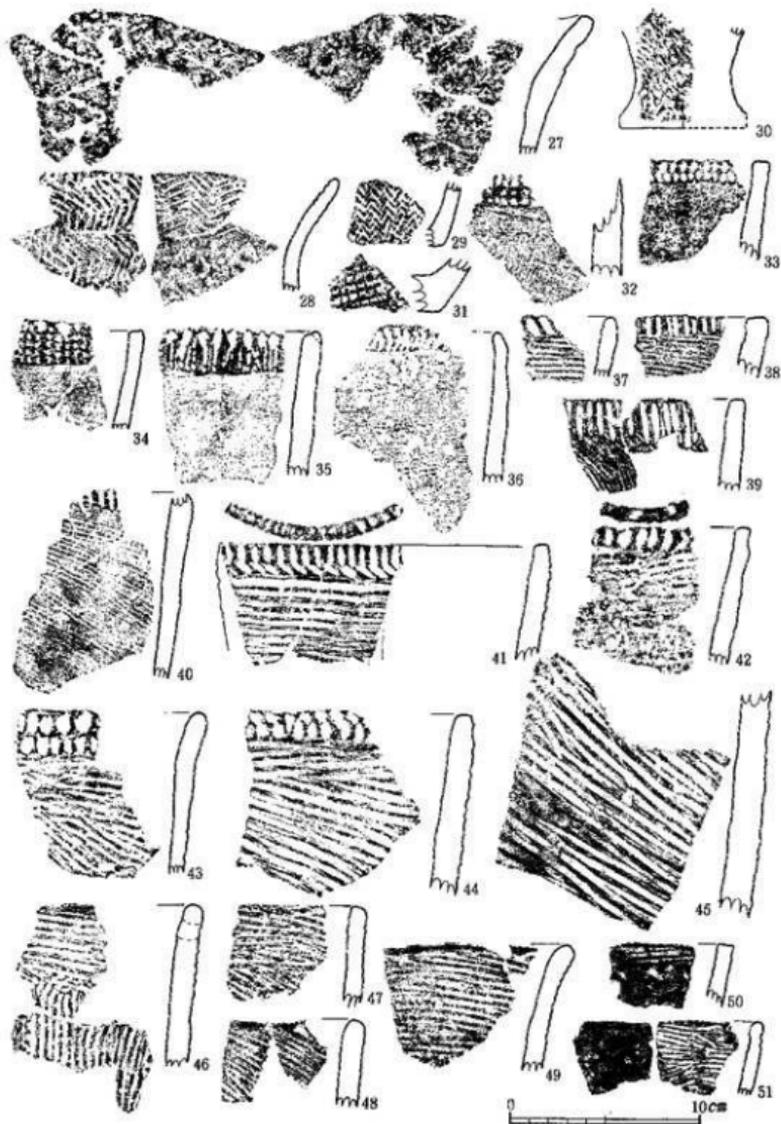
磨石は、10点ほど出土している。石材は、114・115・119が砂岩、116・118が流紋岩、117が石英安山岩である。砂岩を素材とした磨石は径10 cm前後のものが多い。凹石は、いずれも砂岩を使用し、径10 cm以下である。凹み部は片面あるいは両面にもち、深さは0.2 cm前後である。石皿は出土していないが、調査区内に点在していた20~30 cmの大石の片面等に一部磨滅しているものと見られたので、これが石皿として使用されたものかもしれない。

たき石は、晩期の竪穴遺構Ⅱから1点出土している。石英安山岩を使用し、一端部に使用痕をもつ。形状からして石斧の再利用と思われる。全長8.2 cm、幅5.1 cm、厚さ2.8 cmを測る。

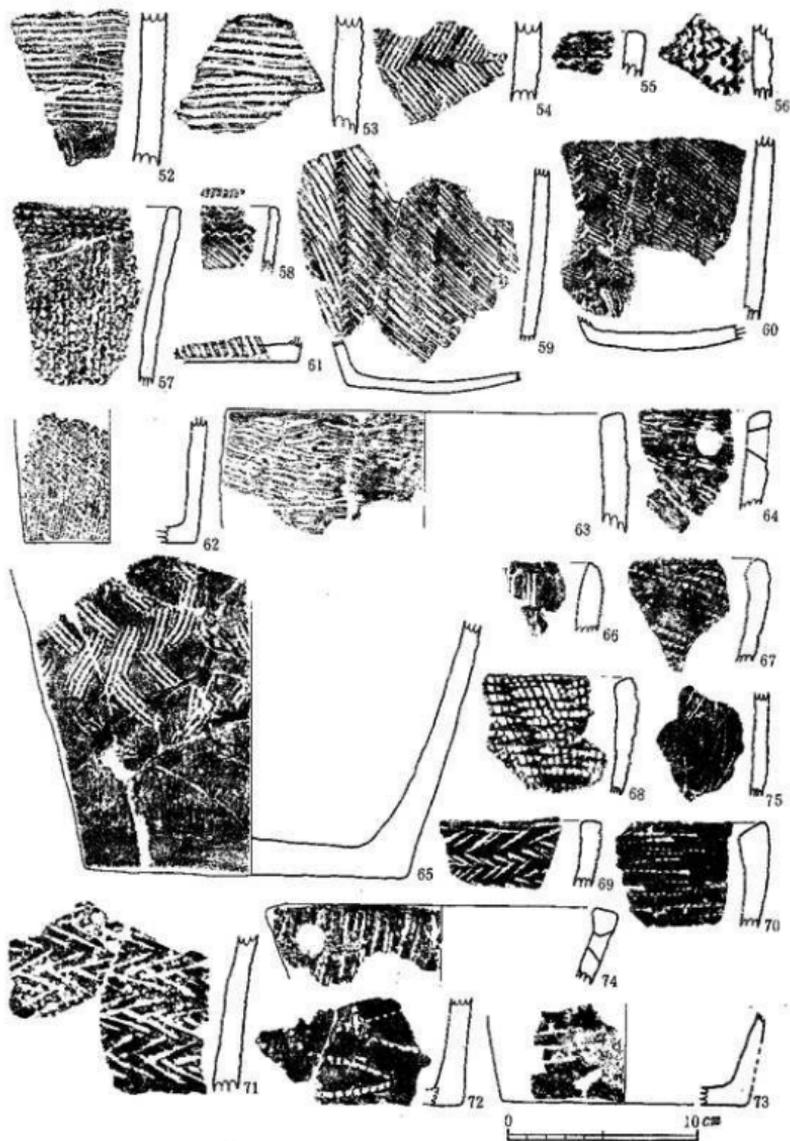
25~27は、一側縁に2次加工により刃部が形成されており、スクレイパーの一種と考えられる。27はチャートを石材としたラウンドスクレイパーである。30~33は2次加工のある石器で30、32が粘板岩、31・33がチャートを使用している。



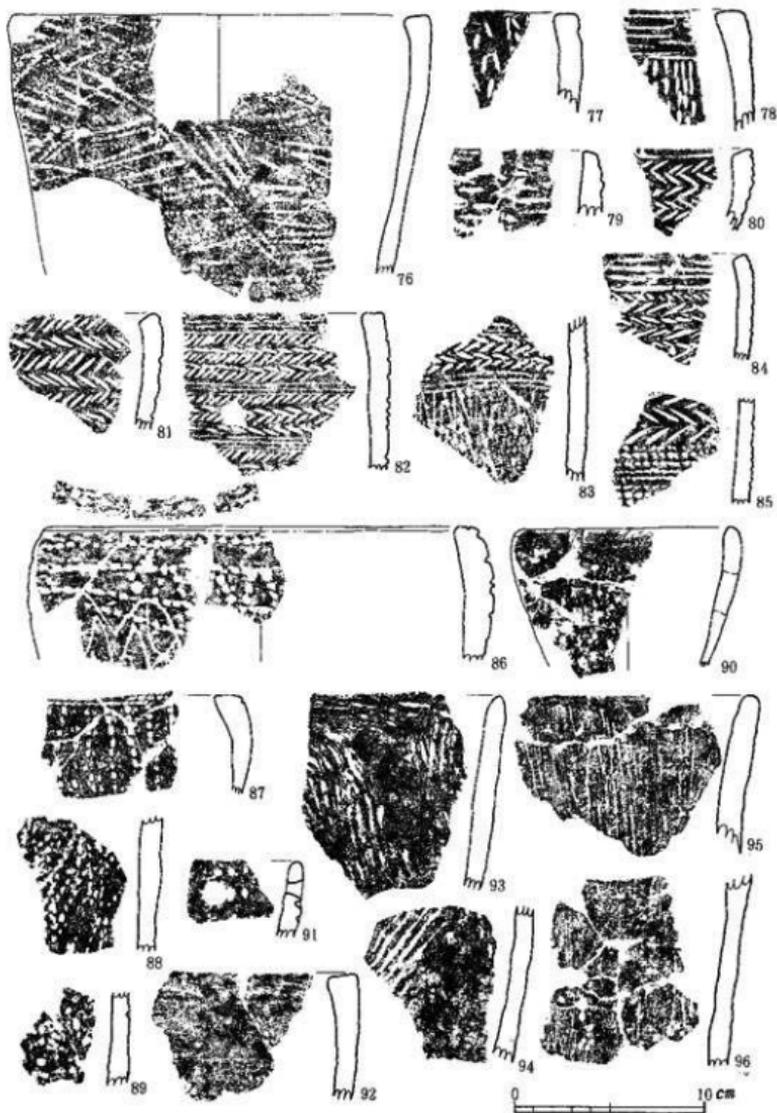
第18圖 出土土器実測圖(1)



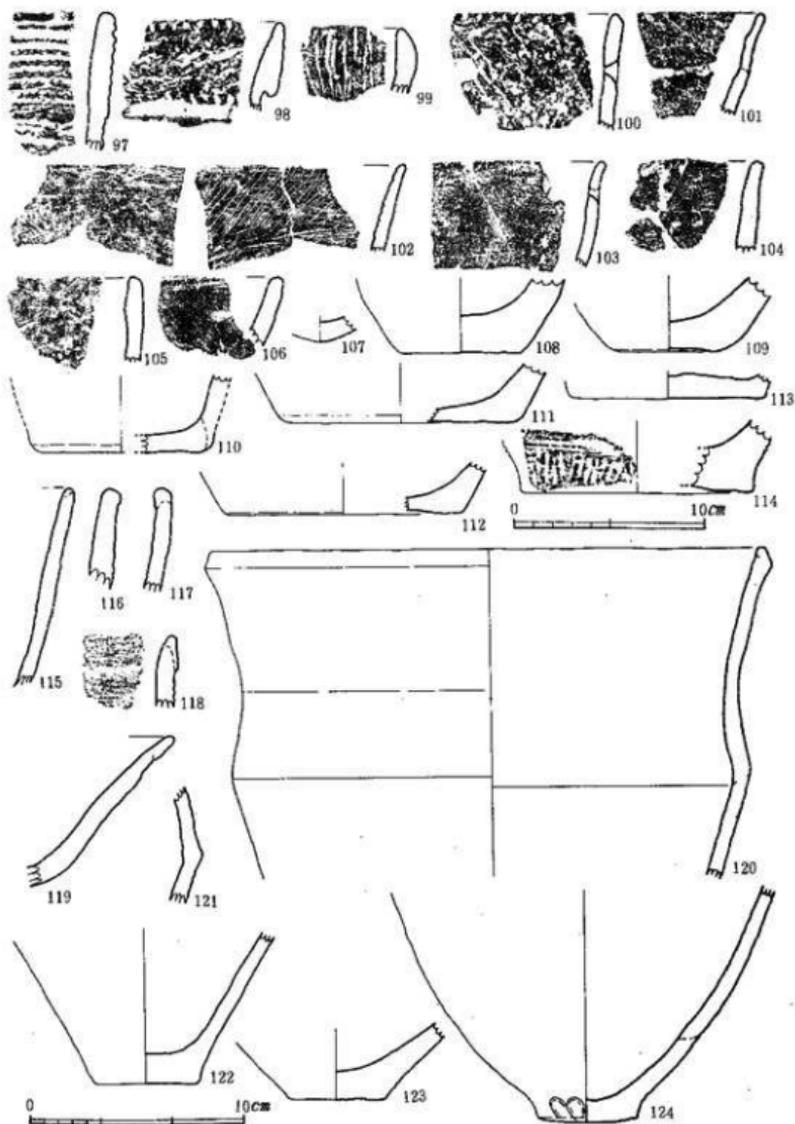
第19圖 出土土器実測圖(2)



第20图 出土土器实测图(3)

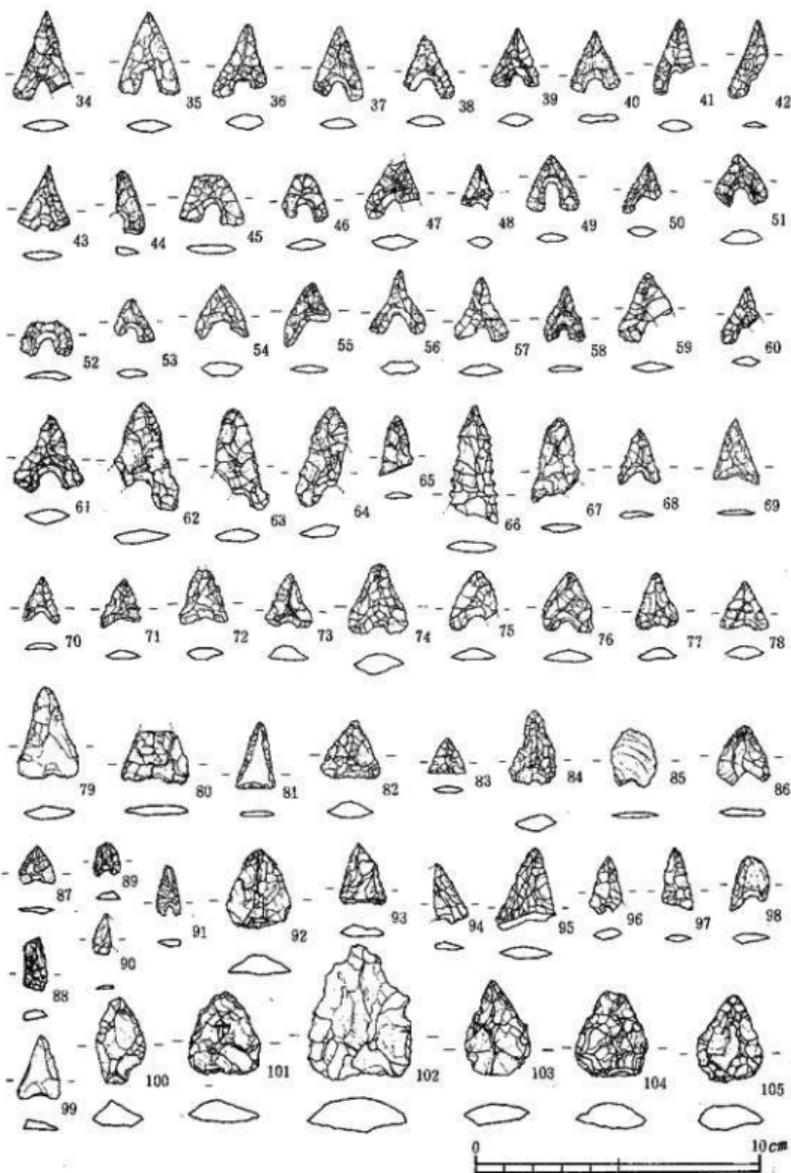


第21图 出土土器实测图(4)

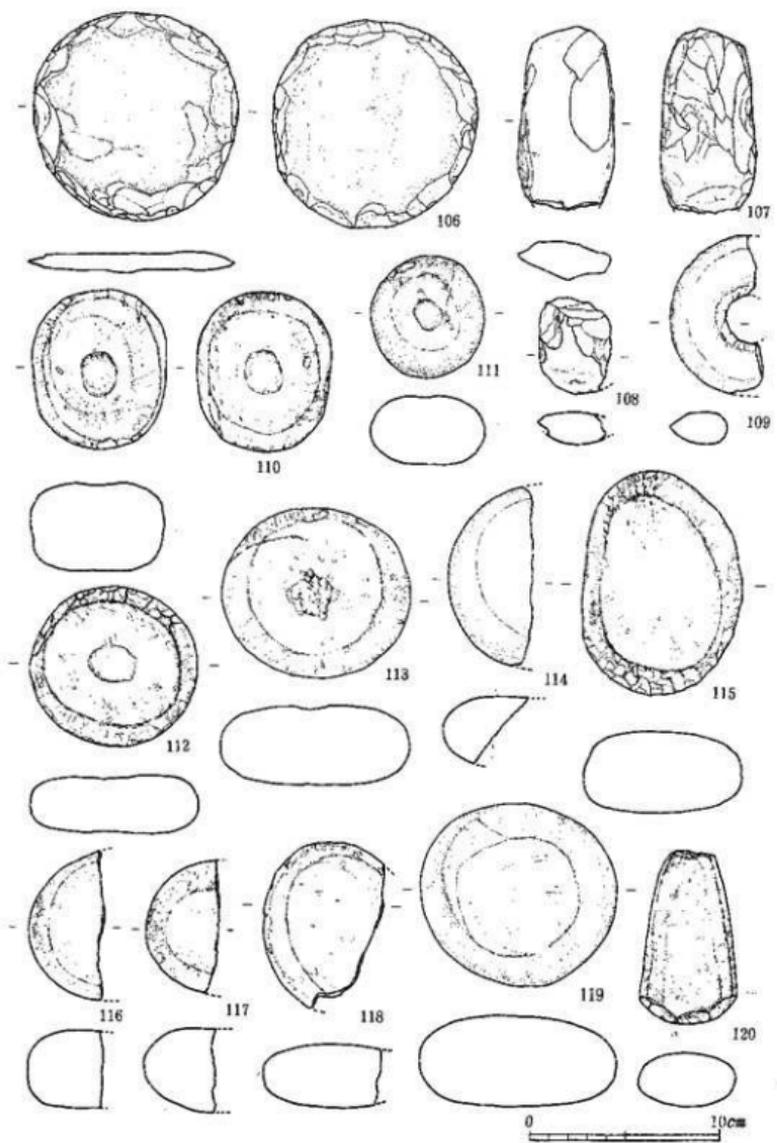


第22圖 出土土器実測圖(5)

(97~121は1/3、120・122~124は1/4)



第23圖 出土石器実測圖(3)



第24图 出土石器实测图(4)

## 第4章 芳ヶ迫第2遺跡の調査

### 第1節 調査の経過及び概要

芳ヶ迫第2遺跡は、前平山の山裾端部にあたる北西向きの緩やかな斜面に位置しており、本地点より延びる丘陵上には芳ヶ迫第1遺跡が位置する。

本遺跡周辺においては、昭和45年に九州縦貫自動車道建設に伴う分布調査が行われた際、箱式石棺が1基確認された。しかし、昭和56年4月の県営農地開発事業に伴う前平地区の分布調査においては、土器片がわずかに採集されたものの、箱式石棺の所在地は判明しなかった。続く昭和57年の試掘調査においても、箱式石棺の所在地として調査の対象となったが、板石の散乱や土師器片がわずかに見られたのみで、その所在は確認されなかった。

そこで、今回の本調査においては、箱式石棺の存在が予想される地点を芳ヶ迫第2遺跡として発掘調査し、箱式石棺の実体を記録保存することを目的とした。発掘調査は、昭和59年7月20日から7月26日まで実施した。

本地点の現況は杉林であったので、昭和57年の試掘調査の際に板石の散乱がみられた地点を中心に杉を約1,300㎡伐採し、重機と人力によって樹根を処理した。そして、ボーリング等による事前作業を行いながら、アカホヤ層上面に堆積した黒色土を重機と人力を併用しながら除去した。

層位としては、耕作土である黒色土層が黄褐色火山灰層（アカホヤ層）上面に50～80cm程度の厚さで堆積していたが、黒色土層中に黄褐色火山灰（アカホヤ）が混在しており、かなり散乱している状態であった。そして40～60cmの堆積が見られるアカホヤ層下には暗褐色の粘質土層が約30cmの厚さで堆積しており、黄褐色バミス層（第2オレンジ層）が下に続いている状態であった。

箱式石棺の確認のためにアカホヤ層上面まで掘り下げた範囲は約1,000㎡であったが、箱式石棺は確認できなかった。そこで調査区域の拡張も検討したが、調査期間や費用等の諸事情を考慮して不可能と判断し断念した。また、調査区周辺部の耕作土上からのボーリングも行ってみたが確認することはできなかった。以上のように、当初の目的であった箱式石棺の検出はできなかったが、アカホヤ層上面において中世を中心とする遺物が出土したため、グリッドを設定して遺物の取上げを行った。

アカホヤ層上面までの調査区域は斜面に直行する状態で20m×50mの東西に長い長方形を呈していたので、それに応じて10m×10mのグリッドを設定し、西から西へA・B……G区、南から北へ1・2・3区と呼称することにし、同時に地形測量も行った。

## 第2節 遺構と遺物

遺構としては、炭化物がわずかに集中する部分が2ヶ所みられたのみで他は検出されず、遺物も層位的には把握できなかった。これは、本地点が杉林になる前にサツマイモの畑であったことが判明しており、実際アカホヤ層に掘り込む状態で30数個の貯蔵穴が確認されている等、立地条件の悪さと、開墾によって攪乱を受けていることに起因すると思われる。

遺物としては縄文土器・土師器・須恵器・備前焼・東播磨陶器・青磁・白磁及び石鏡・石錘・土錘が出土しており、その他鉾鏃も出土している。

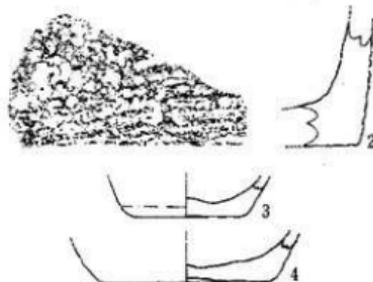
### 1. 縄文土器

縄文早期の貝殻文（吉田・前平系）土器の胴部と底部片が各1点出土している。1と2は同一個体と思われ、外面に貝殻条痕文を施し、内面は底部より上方ヘケズリ調整を施す。



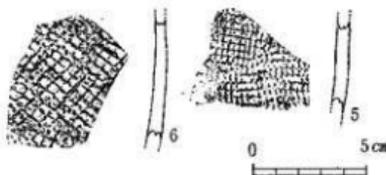
### 2. 土師器

土師器は坏の底部2点と胴部小片数点が出土しており、口縁部は出土していない。3・4ともに底部はヘラ切りで、底部はあげ底状を呈する。3の外面の底部と胴部の境は明瞭な稜線が認められるが、4は丸みを持つ。また4の底部外面には、ヘラ状の工具による沈線が1条巡る。



### 3. 須恵器

須恵器は胴部片のみ7点出土している。全て格子目の刻目が外面に施される。格子目は1単位の大小によって2種類あり色調、焼成も異なる。



第25図 出土土器実測図(1)

#### 4. 中世陶器（備前焼）（7）

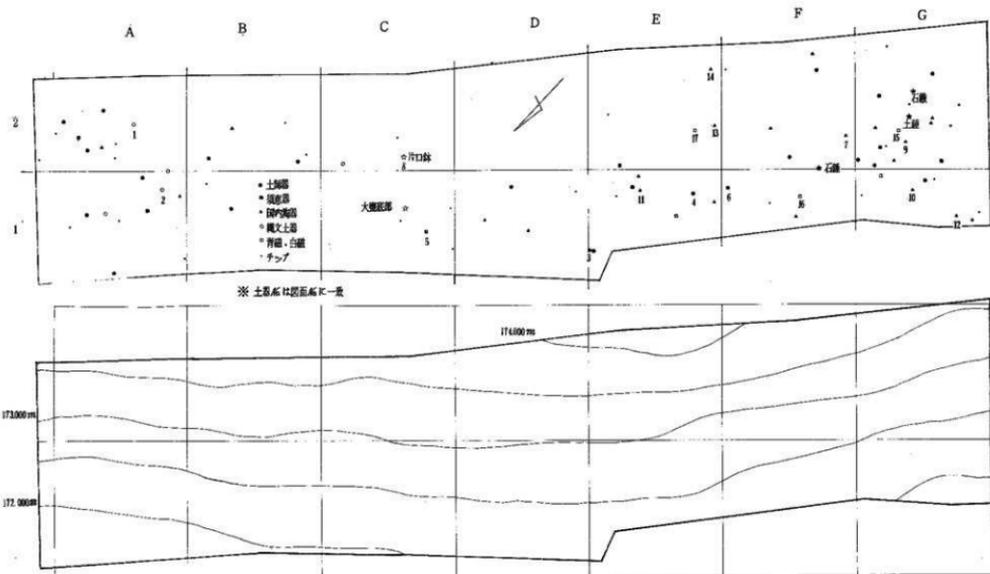
備前焼は口縁部1点と胴部5点が出土している。焼成が口縁部と胴部では異なり、また胴部も全く接合せず調整等も異なる。7は壺の口縁部で、頸部より外開きに立つ玉縁口縁を有する。頸部の下端部にわずかに自然釉がみられることから、胴部には自然釉がかかるものと思われる。

#### 5. 中世陶器（東福系片口鉢）（8～11）

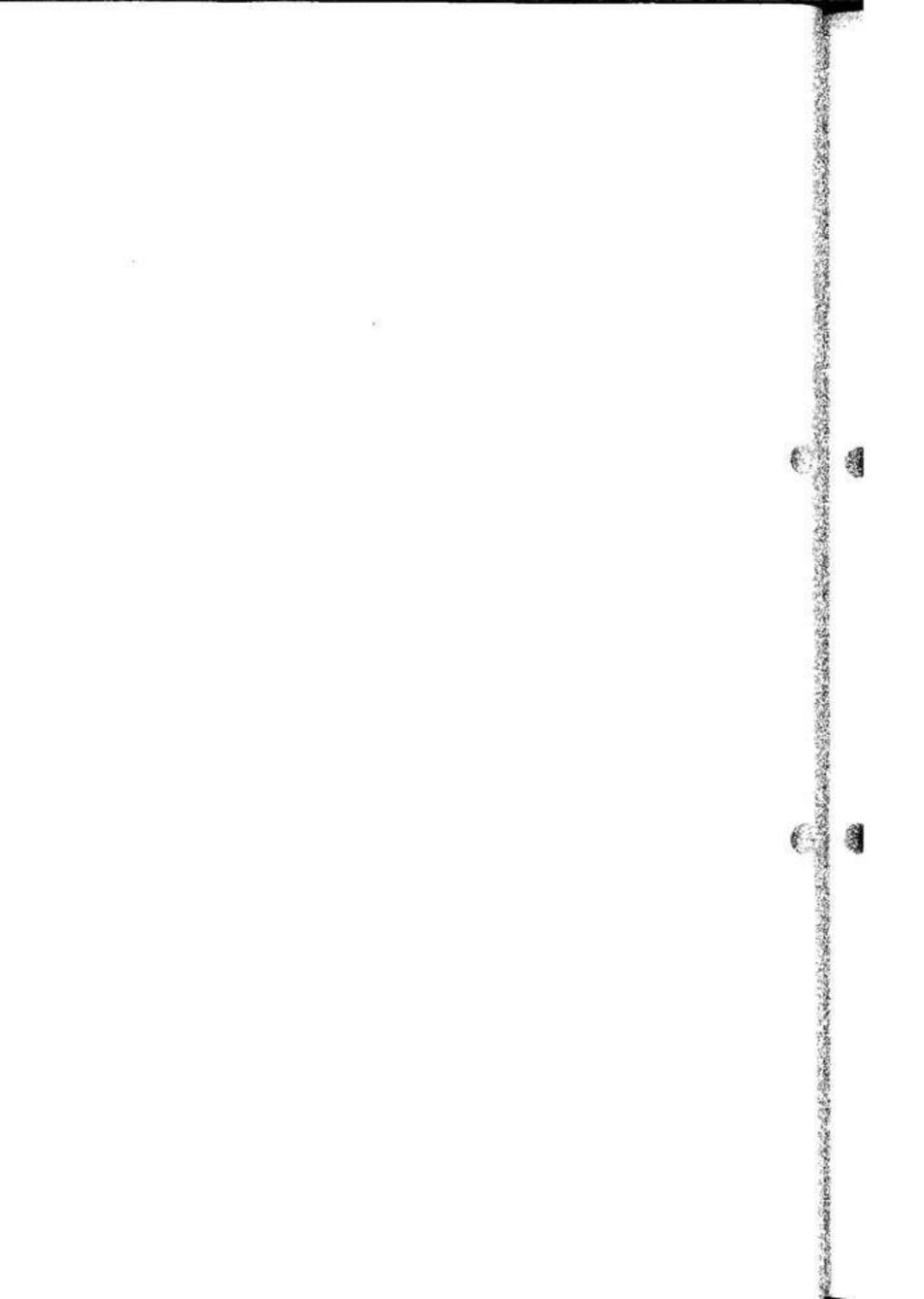
8はほぼ完形で出土した小形の片口鉢である。底部より体部にかけて緩やかに内彎しながら立ち上がり、口縁部内面には指ナデのあとと思われる凹部を有し体部とは稜をなす。さらに影らみを持つ口縁部はほぼ直上に立ち上がる。また外面の口縁部と体部の接点には丸みをもつ稜を有する。内外面ともにヨコナデ調整で底部は回転糸切りである。焼成は甘く土師質状を呈する。9は、焼成・色調ともに8に類似するが、口縁部の形態より別個体と思われる。9は、外面の口縁部と体部の接点に8よりもシャープな稜を有し、内側はかなり彎曲する凹部が続く。10・11はいずれも色調が灰色を呈し、焼成も良好である。8・9の口縁部外面の自然釉に比べ、光沢のある釉がかかる。10の口縁部は小型のもので、内傾するのが特徴である。11は以上の3点に比べ明らかに大型のもので、復元口径は約3.5cmである。口縁部外面には丸みをもつ稜を有し、体部との接点にもシャープな稜が巡る。内面の口縁部直下には、窯日から派生するひび割れのはいた沈線をもつ。出土したものは完形を除くと以上のいずれも別個体と思われる口縁部3点のみであり、体部・底部ともに破片も出土していない。

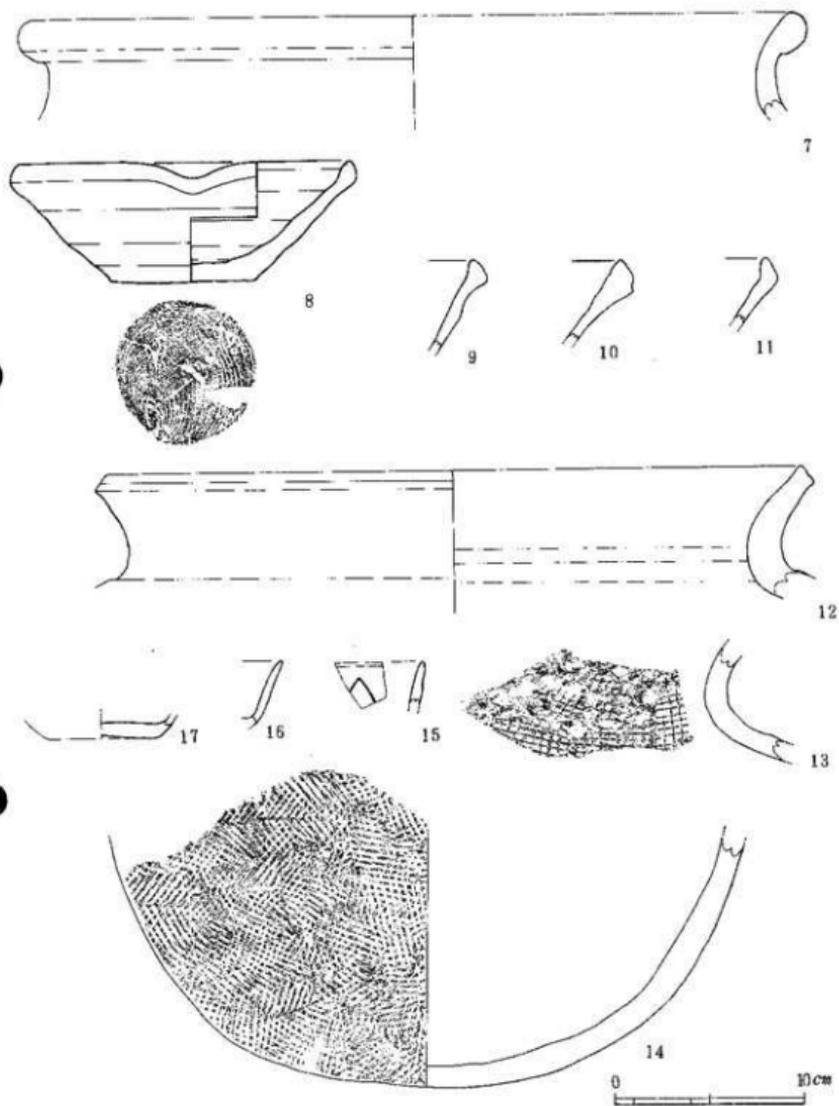
#### 6. 中世陶器（12～14）

12は壺の口縁部で復元口縁径は約3.6cmである。大きく外側へ開いており、肩部もかなり張るものと思われる。口縁部に条線が1条巡ることと肩部に格子目の刻目を有するのが特徴的であり、また内面は平滑なヨコナデ調整であるのに対し、頸部外面に凹凸が顕著なことも特徴の一つである。色調は灰色を呈し、焼成も堅致である。13は壺の頸部であり、口縁部が外反し、肩部が張る器形を有するものと思われる。頸部より肩部へかけての格子目の叩き目及び内外面の調整は12に類似するが、焼成が明らかに甘く器形も異なる。14は丸底を呈する壺の底部であるが、外面の矢羽根状の叩き目が特徴的である。内面はナデ調整であるが凹凸が顕著であり、棒状のあて具を使用しているものと思われる。12・13・14はいずれも1点ずつ出土しており、県内には類例がないものである。



第 2 6 図 遺 物 分 布 図





第27图 出土土器尖测区(2)

## 7. 青磁・白磁

15は、青磁碗の口縁部である。外面にケズリ出しによる蓮弁を有する。16は、口縁部に施釉のないいわゆる口ハゲ口縁を有する白磁碗である。釉の色は青みがかった白色である。17は白磁碗の底部である。景付部を除く全面に白色の軸が施されている。

## 8. 土 鍾

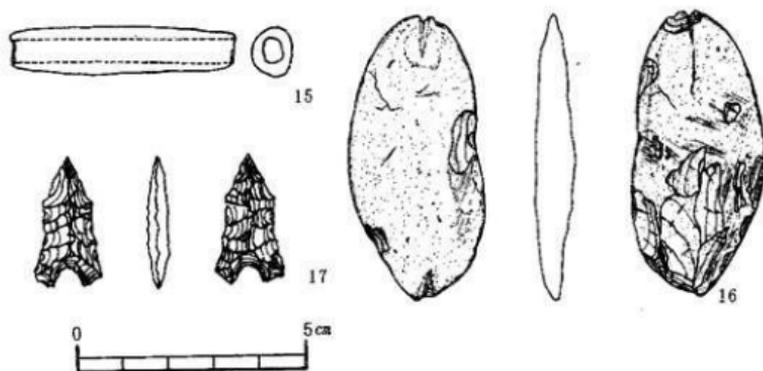
土鍾は1点出土している(17)。最大長4.9cm、内径0.5cm、重さ4.4gを計る。火山灰系の精良な粘土を使用し、焼成は良好で堅致である。色調は黄橙色を呈する。

## 9. 石 鍾

石鍾は2カ所の溝を有する扁平なものが1点出土している。石材は黒色の細粒砂岩でより剝離面のある扁平な河原石を使用している。剝離面は研磨によって平滑に仕上げている。両辺の溝は、一方は表裏面ともに研磨によって作り出しているが、他方は1面のみである。最大長6.2cm、最大幅2.9cm、最大厚0.85cmを計る。

## 10. 石 鏃

石鏃は両側辺に稜を有し、五角形の形状を呈するものが1点出土している。両側辺は表裏面より剝離調整を施し形を整え、基部にも同様の調整によって凹部を作り出す。最大長2.9cm、最大幅1.9cm、最大厚0.5cmを計る。石材は灰緑色のチャートである。



第28図 出土遺物実測図

## 第5章 芳ヶ迫第3遺跡の調査

### 第1節 調査の概要

芳ヶ迫第3遺跡は、芳ヶ迫第1遺跡より南西約200mの地点にあり、立地としては、芳ヶ迫第1遺跡の立地する丘陵の隣の低丘陵の緩斜面にあたる。

本地点は、昭和56年の試掘調査の段階では調査の対象とはならなかったが、芳ヶ迫第1遺跡の発掘調査中に試掘調査が行われ、アカホヤ層下より焼けた礫や遺物が出土したため芳ヶ迫第3遺跡として発掘調査することになった。試掘調査ではサカホヤ層下のみで遺物が出土し、アカホヤ層上は耕作による攪乱が顕著であったため、良好な包含状態にあるアカホヤ層下を重点に調査することになった。

現況は緩やかな傾斜を有する小丘陵であったが、アカホヤ層下の地形及び土層確認の為傾斜に直行する幅2mのトレンチを入れた。遺物はほとんど出土せず、また焼石などもみられなかったが、壁面にアカホヤ層下で掘り込まれた土塚が確認された。そこで丘陵のより先端部を調査することにし、アカホヤ層まで斜いだ後傾斜にそって南北に長い10m×10mのグリッドを設定した。グリッドは南から北へA・B……F区、東から西へ1・2・3区と呼称することにし、同時に地形測量を行った。掘り下げの段階で遺物等の分布域がさらに丘陵の先端部へ拡張することが予測されたが、先端部はかなりの傾斜で下位の耕作地に続いており排土等の問題があり、また保存可能なことも確認されたので、当初の予定区域のみを発掘調査した。発掘調査は昭和59年5月10日から7月20日まで行い、約1,200㎡を調査した。

調査によって、縄文時代晩期の土塚、縄文時代早期の集石遺構・土塚、旧石器時代の集石遺構が検出され、それに伴う遺物が出土した。

### 第2節 層位

本遺跡における層序は第30図のとおりである。

第I層は、黒色の耕作土と黒褐色土が混在し下層のアカホヤの混入もみられるが、現況の雑草地以前は耕作地であったためと思われる。第II層のアカホヤ層は、調査全域に厚さ30～50cmの良好な堆積がみられる。この層の最下部には小粒の軽石層が途切れながらも3cm前後の厚さで堆積している。第II層の下位に焼石の散乱がみられるがまとまりはなく、遺物もほとんど出土しなかった。しかし、C-2区西側にアカホヤが混入する黒褐色土が堆積した縄文時代晩期の土塚がまとまって検出された。第IV層は縄文時代早期の遺物包含層であり、調査区全域に20～30cmの安定した堆

積がみられる。第V層から第VIII層までは無遺物層である。第V層・第VI層は調査区全域に堆積しているが、第VI層はトレンチの東側に堆積がみられるもののC区の土層断面には確認されず堆積する地域は調査区の北東部に偏る。第VIII層は前平地区の遺跡群内では本遺跡のみにみられるもので特異な層である。トレンチでは角礫が詰まった非常に粘質の強い層として確認されたが、調査区内ではA区北側に途切れており、含まれる角礫もほとんどなかった。C・D区にはこの層はみられたが、E区で灰白色の粘質層がみられる。しかし、この層は全く礫を含んでおらず、粘性は弱い。この第VIII層の堆積状況は他の層のそれとは全く異なることから、土石流等による一次的な層であると思われる。第IX層は給良Tノ火山灰層に相当するものと思われ粒の大小によって2層に区分される。第X層は有機物を含む粘質層であるが、第XI層の堆積が厚くトレンチにおける層の確認だけに終わった。

### 第3節 遺構と遺物

#### 1. 旧石器時代

旧石器時代の調査は、縄文時代の調査を終了した後2×10mのトレンチを8ヶ所設定して第IX層まで掘り下げ、集石遺構が検出されたE・F-2・3区は全面調査を行った。

##### 遺 構

E-2区北側トレンチの第VIII層上面で石核・剝片を伴った集石遺構が1基検出された。規模は40×50cm程度のもので、掘り込みはみられなかった。構成する礫は砂岩製の偏平な礫がほとんどで焼けた痕跡は当初みられなかったが、実際は火を受けていることが判明した。

##### 遺 物

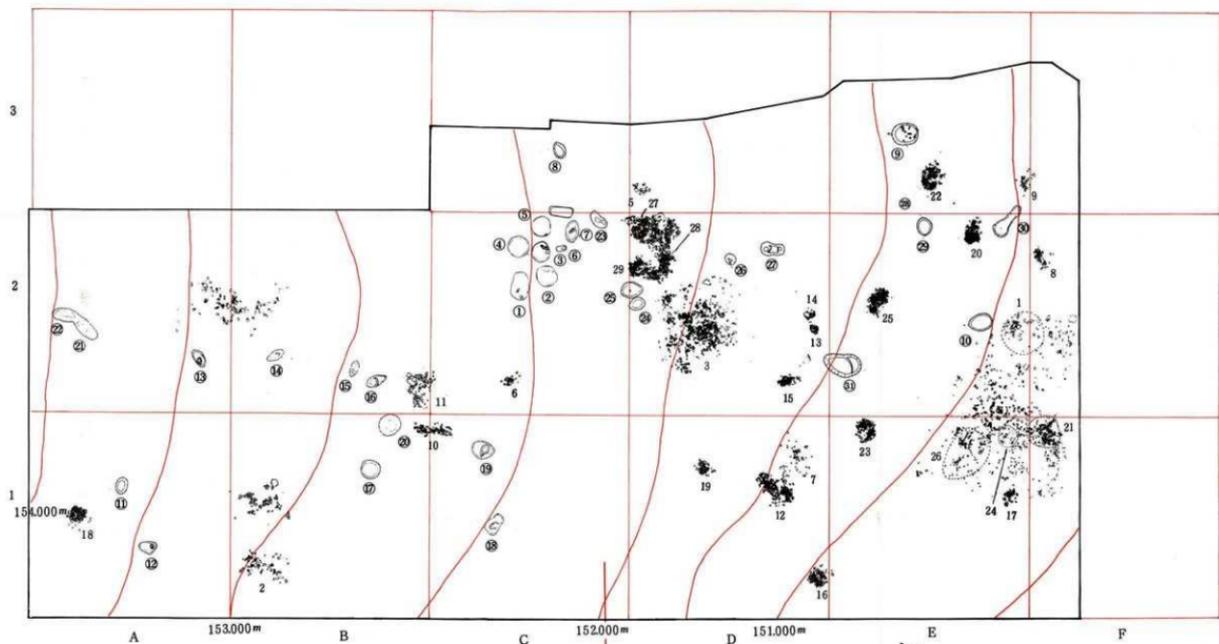
出土遺物は、当初泥質細粒砂岩製の石核1点・剝片26点が集石遺構を中心に径1.5mの範囲で出土したのみであったが、E・F-2・3区を掘り下げたところE-2区北隅において肉厚の黒色泥岩製の剝片尖頭器が出土した。

#### 2. 縄文時代

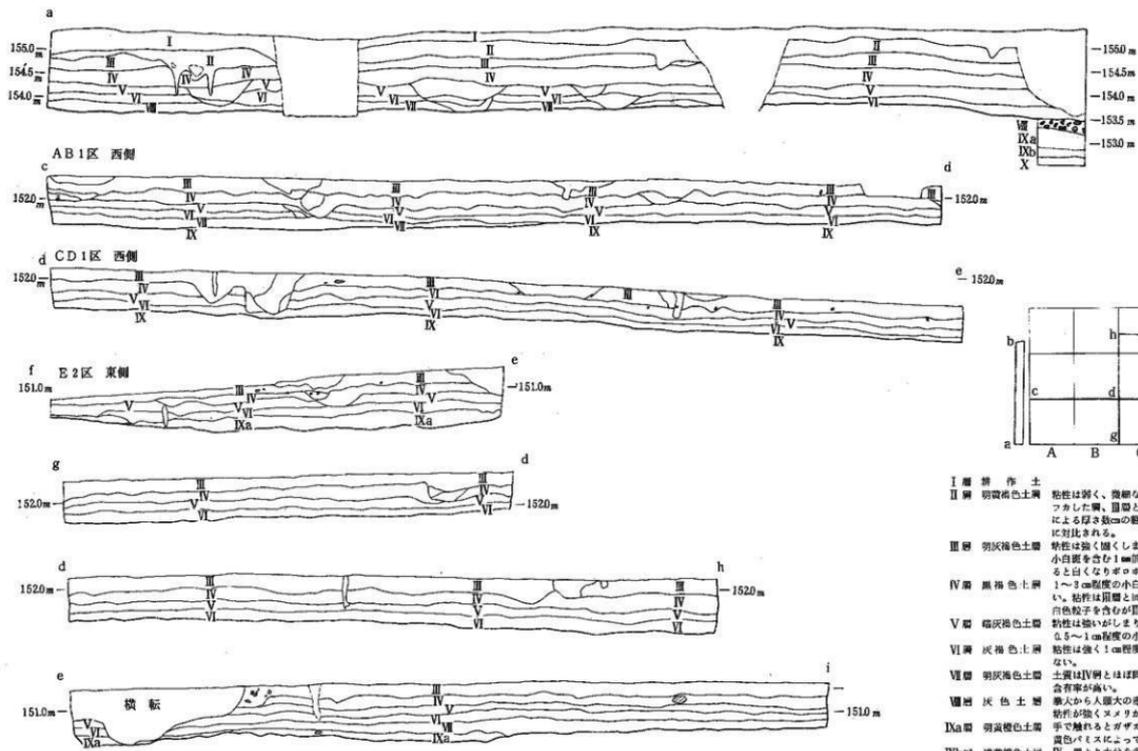
##### 縄文時代の遺構

##### 集石遺構(第31~36図)

集石遺構は全てアカホヤ層下で検出されたものであり、土塚を持つものと持たないものに大別される。前者は12基、後者は17基検出された。その他、土塚をもつ集石遺構を含んだ焼礫群が2ヶ所で確認された。土塚を持つタイプの集石遺構には、土塚底部に配石を有するものが2基存在する。



第29圖 遺構分布圖



第30図 土層図

集石遺構を構成する礫は、ほとんど砂岩の円礫・角礫であり、熱を受けた痕跡として赤変したり、脆くなったりしている。土域中の埋土には炭化物が観察されるものが多いが、焼土は検出されない。土域を持つタイプの集石の土域は径1m前後のものが多く、深さ20～30cm程度の円形のすり鉢状のプランが平均的なものである。

#### 集石遺構の分布(第105図)

集石遺構については、D-2EとE-1・2Eの2ヶ所に焼礫群があり、その間に単独の集石遺構が存在しているがグループとA・B区に独独に存在しているグループとに分かれる。A・B区のグループ内では18号集石を除いて土域を伴っていない。一方、D・E区のグループは土域を伴うものが多いのが特徴である。そして焼土を有する土域が2基ともD・E区のグループに属していることから、焼土を有する土域と土域を伴う集石の関連性が考えられる。その他の縄文早期の土域はD・E区よりもA・B区の方が多い。

#### 土域(第38・39図)

縄文早期の土域は24基検出されたが、掘り込み面がある。第IV層中では確認が困難であり、遺構確認面の第V層上面で第V層以下に掘り込む状態で検出された。形態は様々であるが埋土は全て第IV層の黒褐色土であり、炭化粒を含む土域や小礫を含む土域も数基存在する。その中で30号土域と31号土域は焼土を持つタイプのものである。

#### 縄文早期の遺物

##### 土器(第40・41図)

第IV層の縄文土器包含層からは、押型文土器と貝殻文を施文する土器を中心とする土器が出土している。

##### I類 山形押型文土器

- I a — 外面・口縁部内面に横位に施文し、口唇部に凹線文。(1)
- I b — 外面・口縁部内面に横位に施文し、口縁部内面に棒状施文具による刺突文。(2)
- I c — 外面は縦位、口縁部内面は横位に施文し、口縁部内面に棒状施文具による刺突文。(3)
- I d — 外面は縦位、口縁部内面は横位に施文し、内面に稜を有する。(4・6)
- I e — 外面は斜位、口縁部内面は横位に施文し、口唇部に刺突文。(5)
- I f — 外面は山形文帯を鋸歯状に施文し、内面は横位に施文。(7)

##### I'類 山形押型文土器底部

- I' a — 平底で胴部へ僅かに外傾し、外面は斜位又は横位に施文。(8～11)
- I' b — 平底で胴部へ大きく外傾し、外面は縦位に施文。(12)

Ⅱ類 楕円押型文土器

- Ⅱa — 外面・口縁部内面は横位に施文し、口縁部内面に凹線文。(14)  
Ⅱb — 外面は斜位、口縁部内面は横位に施文し、口唇部にも施文。(20)  
Ⅱc — 外面は縦位、口縁部内面は横位に施文。(16)  
Ⅱd — 外面は縦位に施文し、口縁部内面は凹線文のみ。(17・18)  
Ⅱe — 外面は楕円押型文帯を鋸歯状に口縁部に施文し、胴部及び口縁部内面は横位に施文。(15)

Ⅱ類 楕円押型文土器底部で丸底状の平底。(19)

Ⅲ類 胴部が張り出し、間延びした山形押文を斜位に施文。(21・22)

Ⅳ類 外面に貝殻による施文を施す円筒土器。

- Ⅳa — 口縁部が肥厚して内湾し、外面全面に貝殻腹縁による押引き文を施文。(23)  
Ⅳb — 外面に貝殻腹縁の刺突文を施文。(26)  
Ⅳc — 外面に、1単位4～5条の貝殻条痕文を間隔をあけて口縁部から底部まで施文し、重ねて胴部上半のみ貝殻条痕文を横位に施文。(27)  
Ⅳd — 貝殻条痕文を縦位に密集施文。(24)  
Ⅳe — 1単位4～5条の貝殻条痕文を間隔をあけて斜位に施文。(25)  
Ⅳf — 貝殻による刺突点文を外面に施文する。(28)

V類 ヘラ状施文具の連続刺突による爪形文土器。(31・32)

Ⅵ類 数本1単位のヘラ状施文具の束によって流水状の文様を施文。(32)

Ⅶ類 ヘラ又は棒状施文具によって半截竹管状・綾杉状の文様を施文。(33・34)

Ⅷ類 外面は縋糸文、口縁部内面は縋糸文と凹線文を施文。(35)

Ⅸ類 底部

- Ⅸa — 平底で胴部へ外傾する。(36)  
Ⅸb — 平底で胴部へ直行し、外面に浅い条痕を施文。(37・38)

分布(第42・43図)

押型文土器・貝殻文系土器ともにC-2区を中心に分布するグループとE-2・3区を中心に分布するグループに分けられ、D区の土器出土数が少ないのが特徴である。しかし、両グループに分かれるものの接合する土器もあり、時間的な差異としては把握できない。

石器(第44・45図)

石器は、石鏃・局部磨製石斧・尖頭状石器・石錐・石匙・異形石器・磨石・凹石が出土している。

石鏃は41点出土している(1~41)。基部が平底のものが1点の他は全て凹基の基部を有する。凹基鏃は括りの形状によってU字形・V字形・円弧を呈するものに大別される。また、全体形は正三角形のもの、スリムな二等辺三角形のもの、両側辺が外側に張出すものなどがある。また、両側辺に括りを有するものもある。凹基鏃のうちではU字形を呈するものと円弧を呈するものがまよって出土している。石材としては、蛇島産1点を含む黒曜石製が17点、チャート製が4点と多く、その他サヌカイト・細粒砂岩・珪質頁岩・メノウ等が素材として利用されている。

局部磨製石斧は2点出土している(45・47)。45は破損しており刃部のみである。風化した安山岩を石材として用い、断面はレンズ状を呈する。47は片面に自然面を残し、両側辺と刃部に研磨痕がみられる凝灰質砂岩製のものである。

尖頭状石器はサヌカイト製のものが1点出土している(44)。胴部のみ残存しているが、両面より調整を施しており断面はレンズ状を呈する。

石錐はチャート製のものが1点出土している(43)。自然面を残す剥片を利用して両面より調整し、先端部に僅かに括りを入れて鋭い錐の先端部を作り出す。

石匙は白色の珪質頁岩製のものが1点出土している(46)。縄文早期のものとしてはあまり類例のない形状である。表裏面とも平坦面を僅かに残して3側辺の刃部調整を施している。

異形石器は黒曜石のものが1点出土している(42)。厚めの剥片を利用し、頭部は方形を呈し3つの刃部は急角度の刃部が作り出されている。そして脚部も両側と基部からU字状の括りが施されている。

磨石は27点。凹石は3点出土している(48~50)。磨石は偏平なものが多く凹部も磨石を転用したものである。石材は、3点が石板岩製の他は砂岩製である。

#### 石器の分布(第46・47図)

石器も土器と同様にC区とB区で2つにグルーピングされ、石材もほぼ同様である。その中で、黒曜石のチップがAとBの石質の差によって分かれることが認められる。

#### 縄文晩期の遺構と遺物

##### 縄文時代晩期の土坑(第37図)

第II層(アカホヤ層)まで除去した段階で第III層に掘り込んだ状態の土坑がC2区北側に7基まとまって検出された。埋土は全てアカホヤ粒が混入した黒褐色上であった。形態の特徴としては、平面形が円形を呈するものが多く、アカホヤ層上から掘り込まれているため深さは浅い。また凹部を有する土坑も2基ある。この中で4号土坑と7号土坑の土器片が接合しており、近接して切り合いも無いことからほぼ同時期のものであると思われる。

#### 土城内出土遺物(第48図)

1号土城 粗製土器の胴部と底部が各1点出土している。1は深鉢(甕)形土器底部である。胴部にかけて張り出し、底部端部も僅かに張り出す。底部は上げ底状である。

2号土城 粗製土器の口縁部1点、胴部1点が出土している。2は僅かに肥厚する口縁部である。口縁部内面から口唇部にかけては丸みをもつが口縁部外面と口唇部は稜をなす。3も先端はないものの口縁部近くと思われる。この土器は、他の粗製土器と異なり内面はへら磨きである。4～8はいずれも胴部片で確実な部位は不明である。

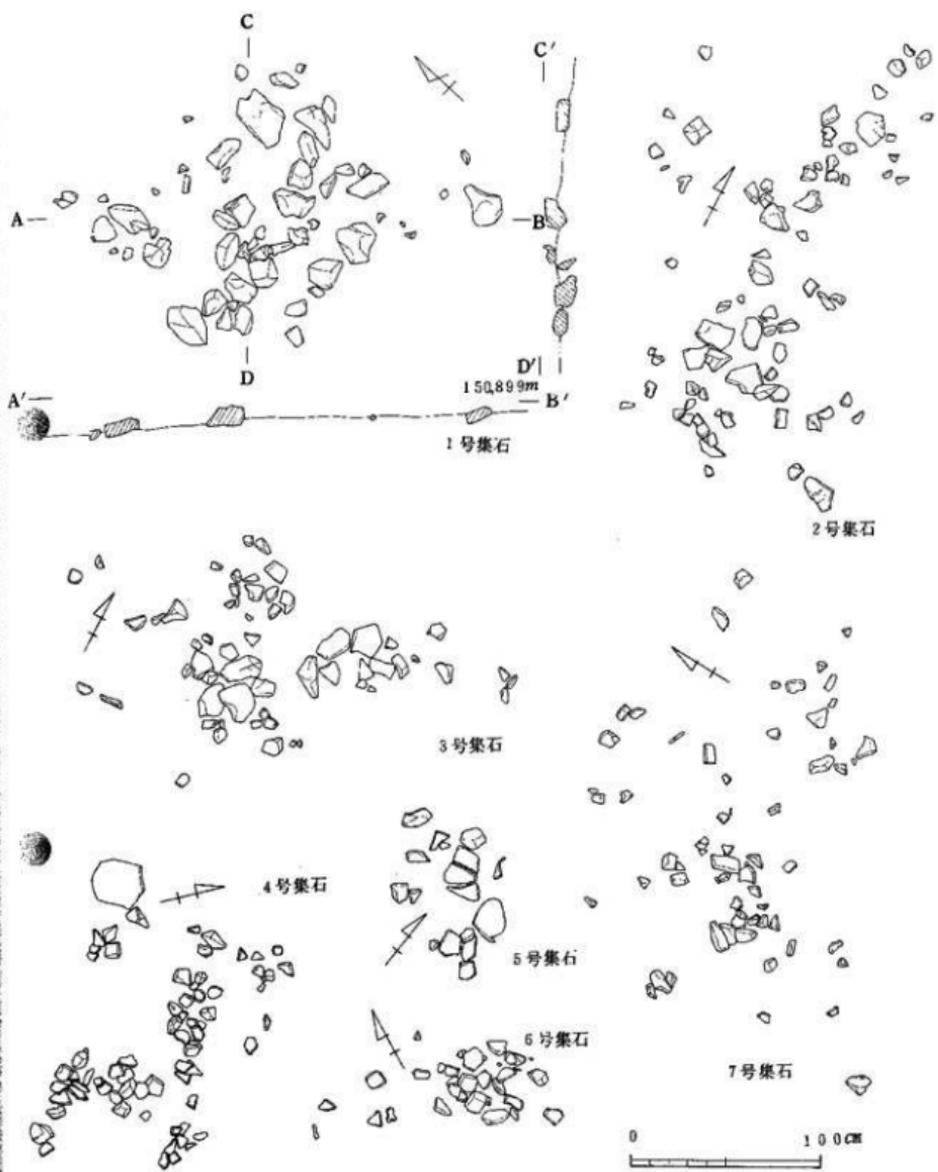
3号土城 精製磨研土器の口縁部1点、胴部1点、粗製土器の胴部6点が出土している。

4号土城 精製磨研土器の口縁部1点、粗製土器の口縁部2点・胴部5点、刻目のある張り付け突帯を有する土器の口縁部1点が出土している。10は浅鉢の口縁部であり、外反した頸部がそのままのびて口縁部となるものである。内面には段を有し、外面にも幅1mmの沈線が巡る。9は胴部から口縁部にかけて外傾し、さらに口縁部が弱冠外反する器形を呈する深鉢形土器である。11はの同一個体と思われるが、接合しない。下部は丸みを有し底部へ続くものと思われるが、底部は出土しておらず全形は不明である。14は約3cmの突帯を張り付けて肥厚させた口縁部を有する深鉢形土器である。口縁部は僅かに外反する。12は口唇部に刻目を有し口縁部外面にも刻目のある張り付け突帯を2条巡らせる深鉢形土器である。胎土・調整・器形等が他の土器と全く異なり、時期も異なるものと思われる。9・11は7号土城と土器片が接合したものである。

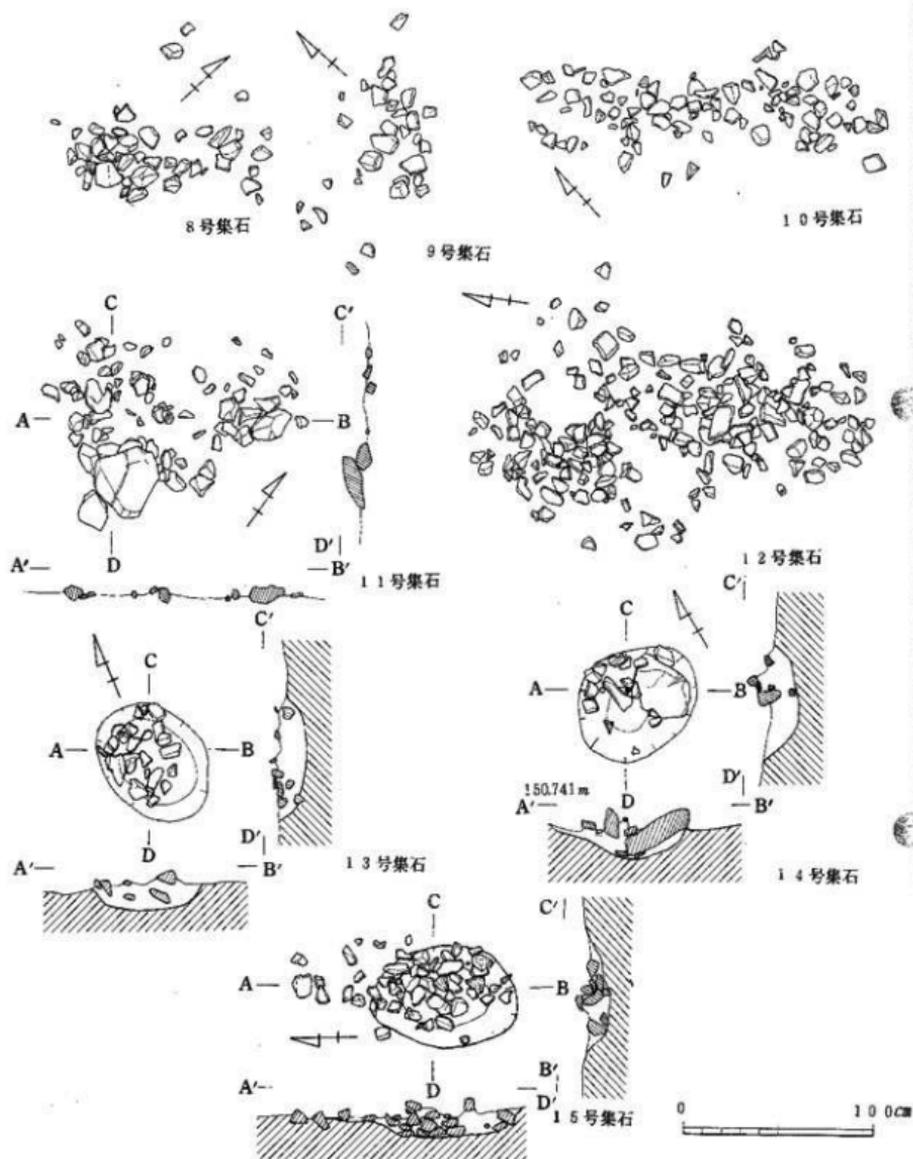
5号土城 精製磨研土器の口縁部1点、粗製土器口縁部2点、胴部3点が出土している。18は浅鉢形土器の口縁部で19は頸部である。18は口縁部が内湾し、先端上部に張り付け突帯が直立して巡るものである。内面の突帯接合部には沈線を有する。17はひれ状突起を有する鉢形土器の口縁部である。19は頸部で、胴部より内湾し頸部で強い屈曲を示して外反する。肩部の張り付けは小さく胴部外面に直径1mmの沈線が巡る。15は口縁部が僅かに外反する深鉢形土器の口縁部で外面に張り付け突帯を有する。16は深鉢形土器の胴部で丸みがなく、直線的な形態を有する。

6号土城 粗製土器の口縁部が1点出土している。20は浅鉢形土器の口縁部で頸部より緩やかに外反する形態を有する。内面には段を有し、外面には鋭いV字状の沈線が巡るが両者とも先端の粘土接合部に施す。

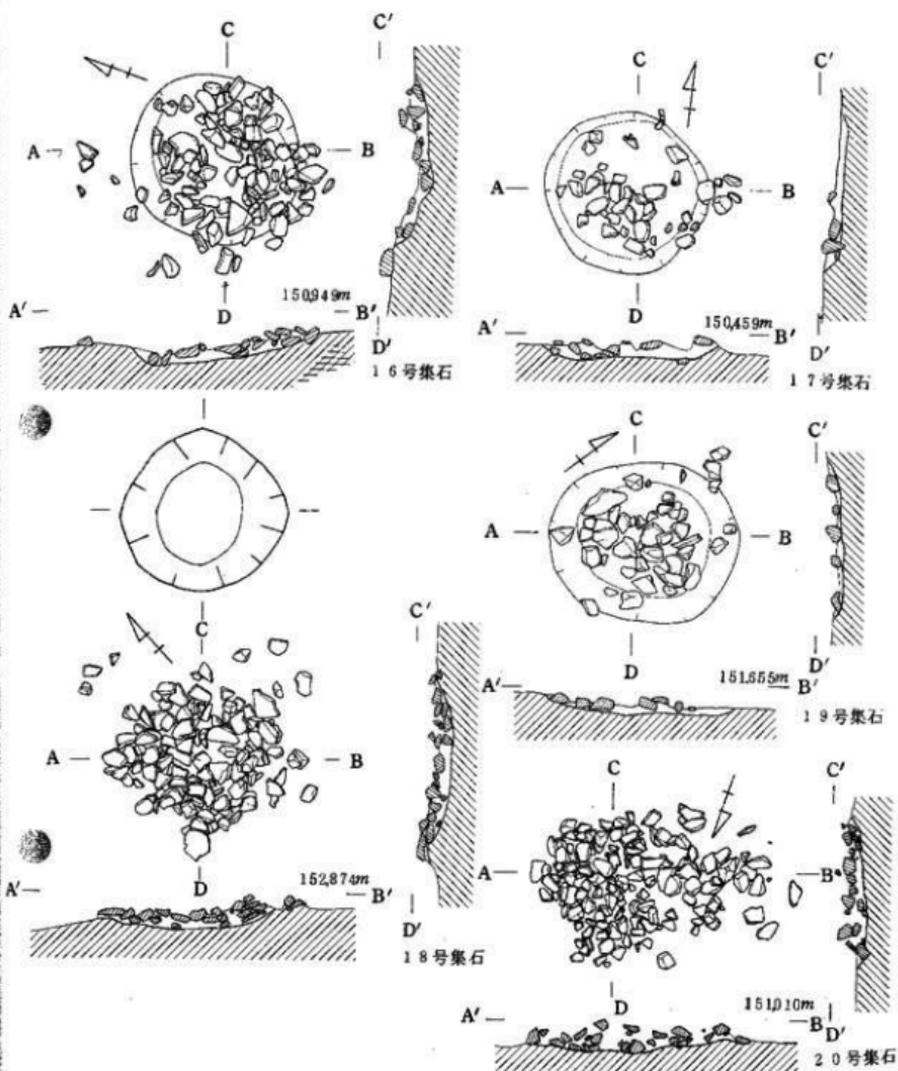
7号土城 粗製土器口縁部2点、胴部2点が出土している。



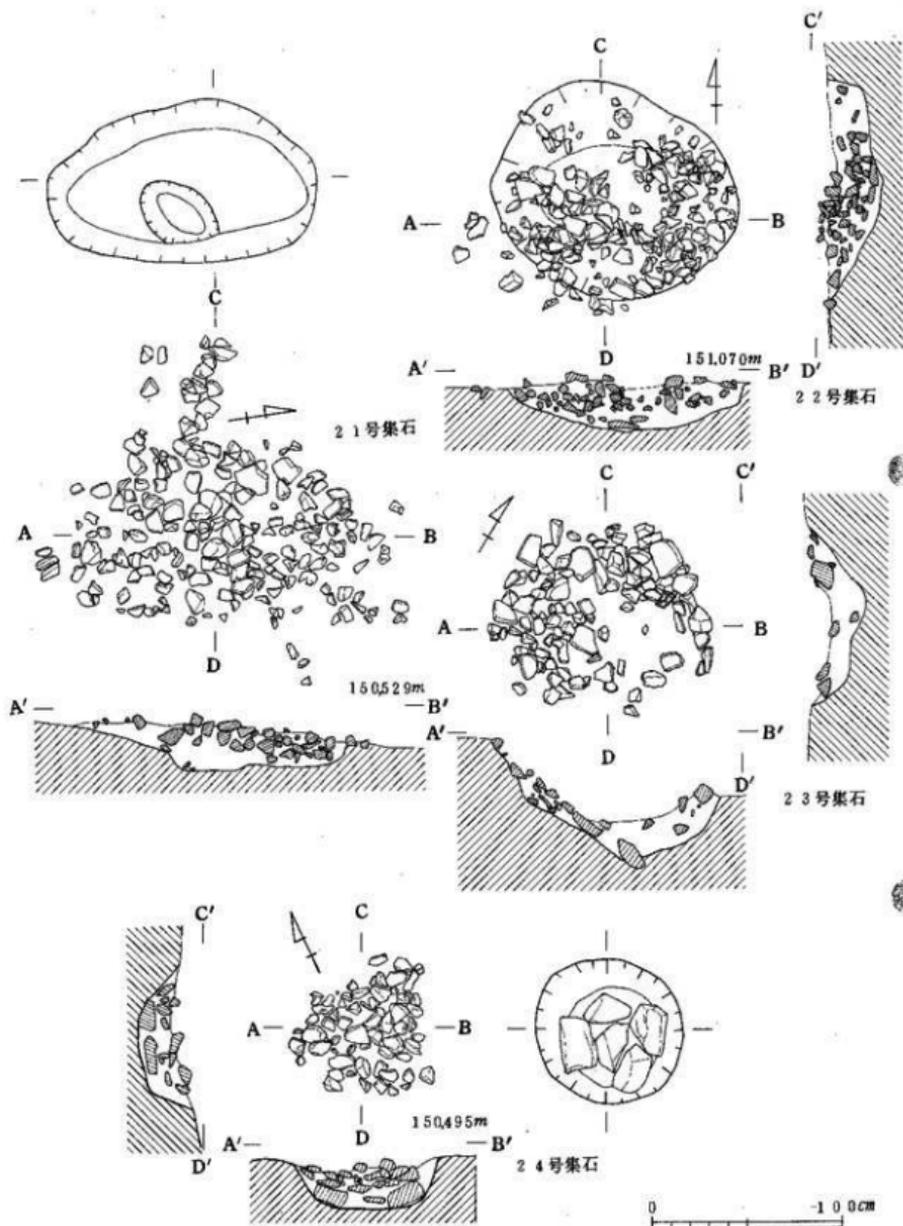
第 3 1 图 集石遺構実測図 (1)



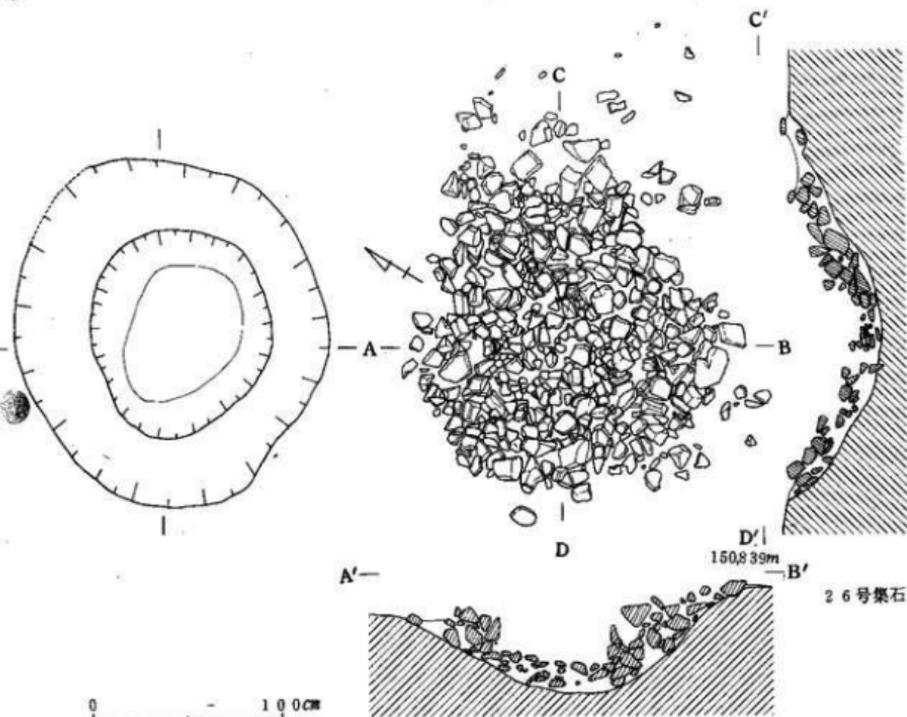
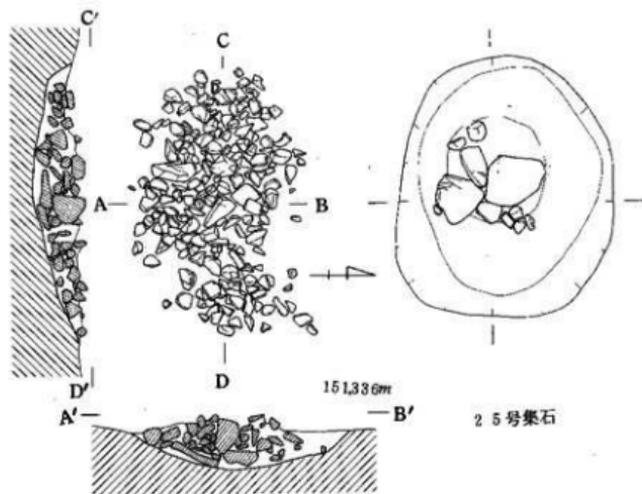
第32圖 集石遺構実測圖(2)



第 33 图 集石构造示意图 (3)

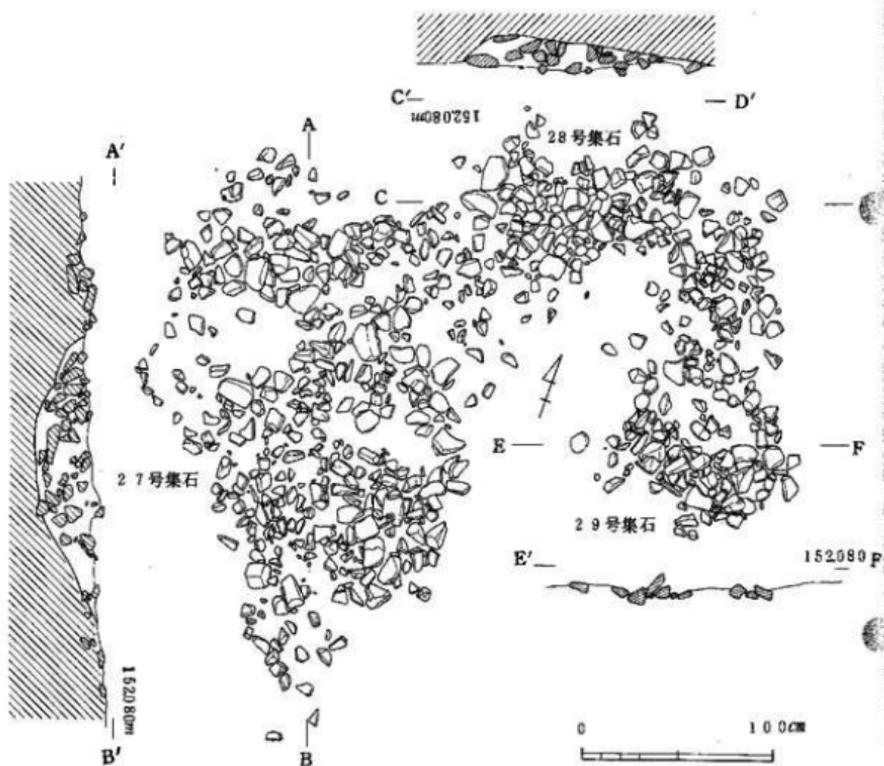


第 3 4 图 集石遺構実測図(4)

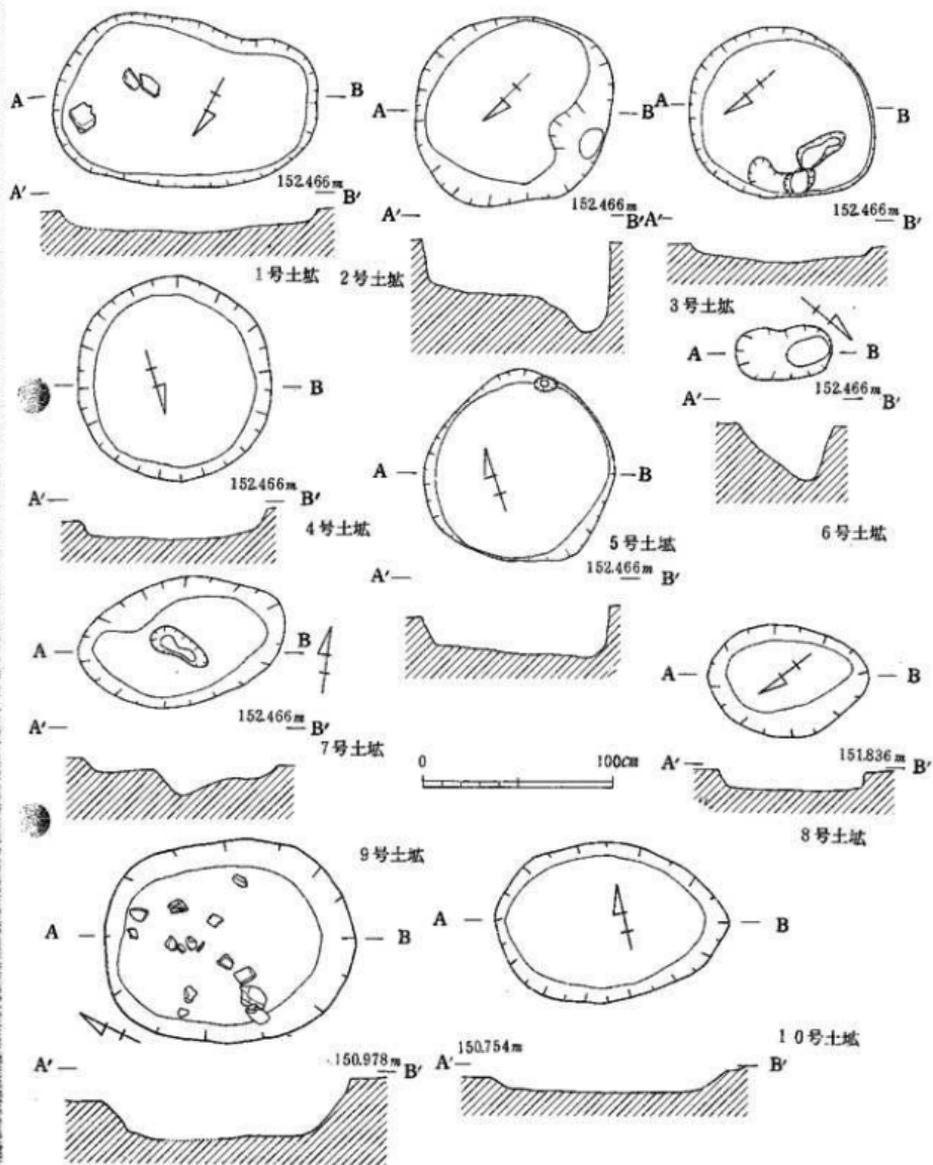


0 100cm

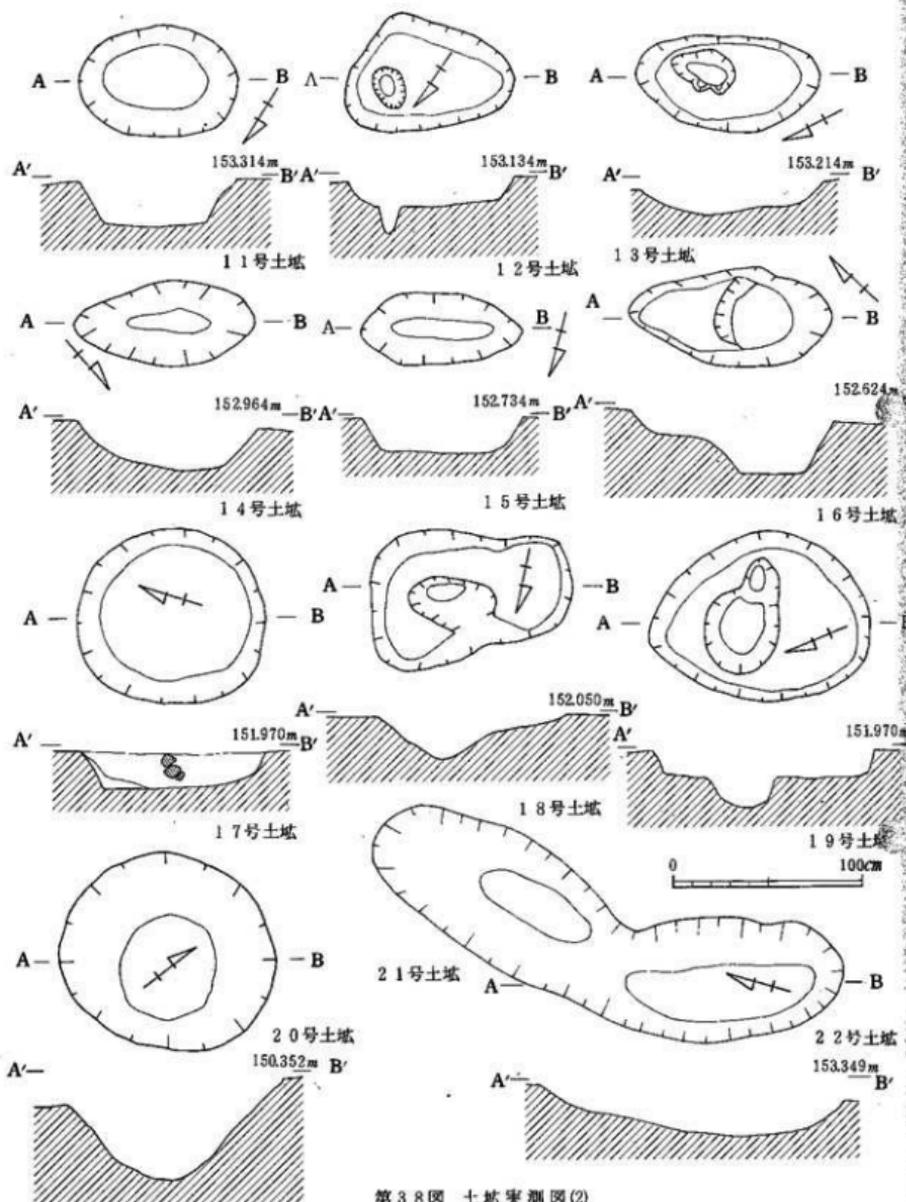
第35图 集石遺構実測图(5)



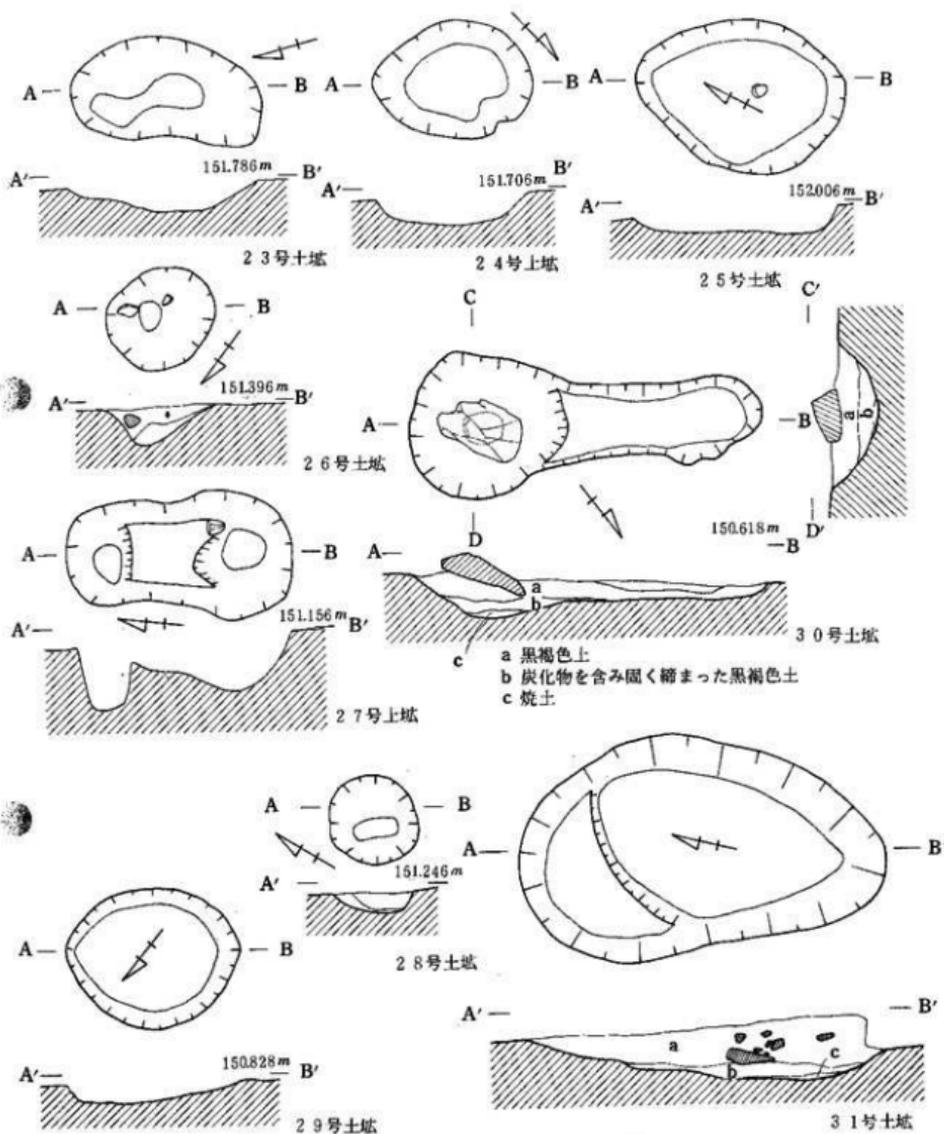
第36图 集石遺構実測図(6)



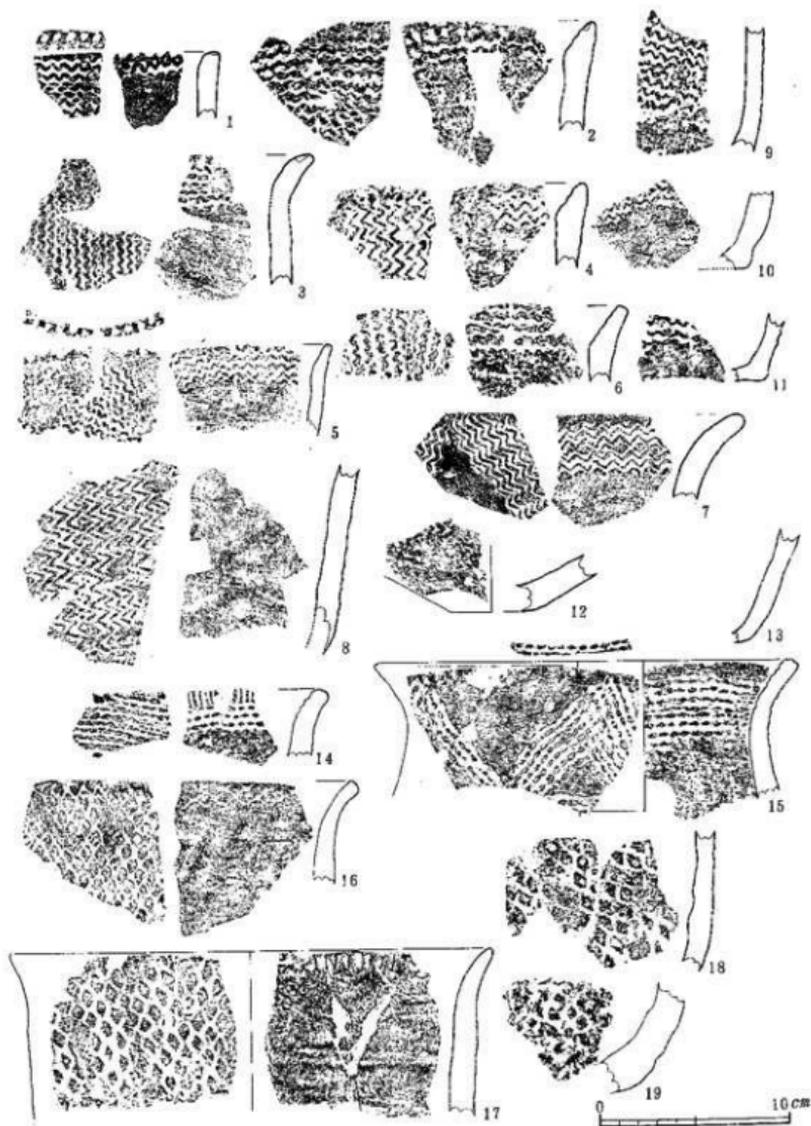
第37图 土坑实测图 (1)



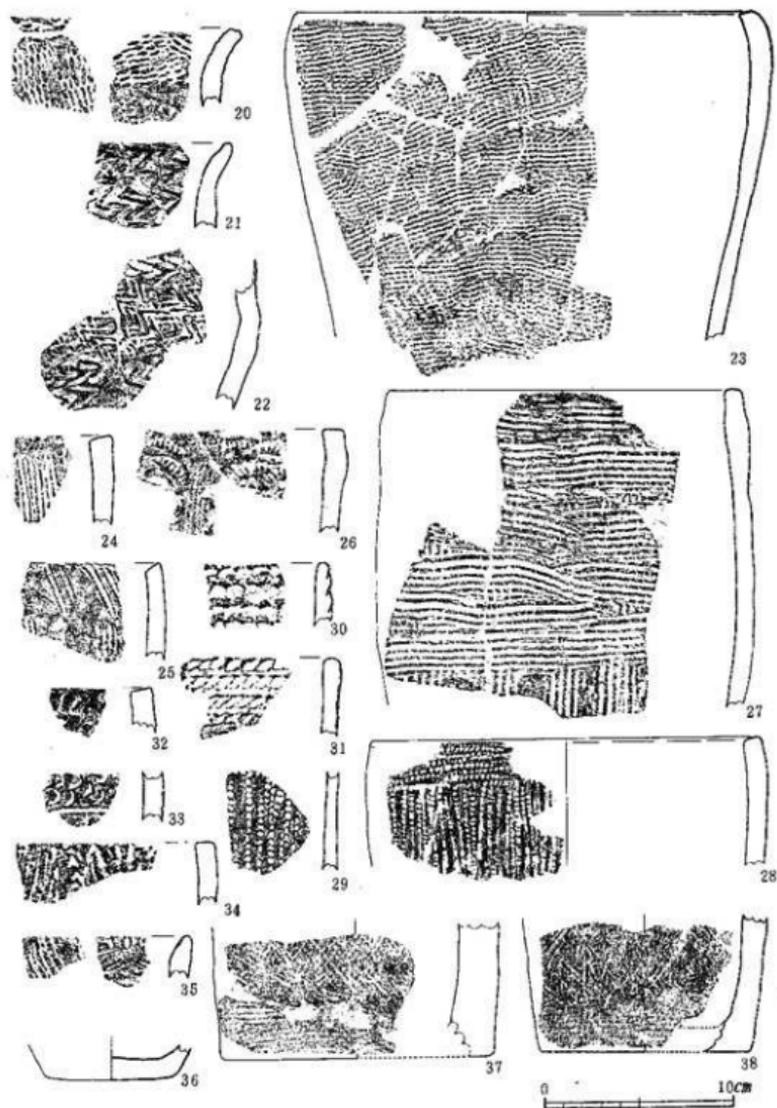
第38图 土城实测图(2)



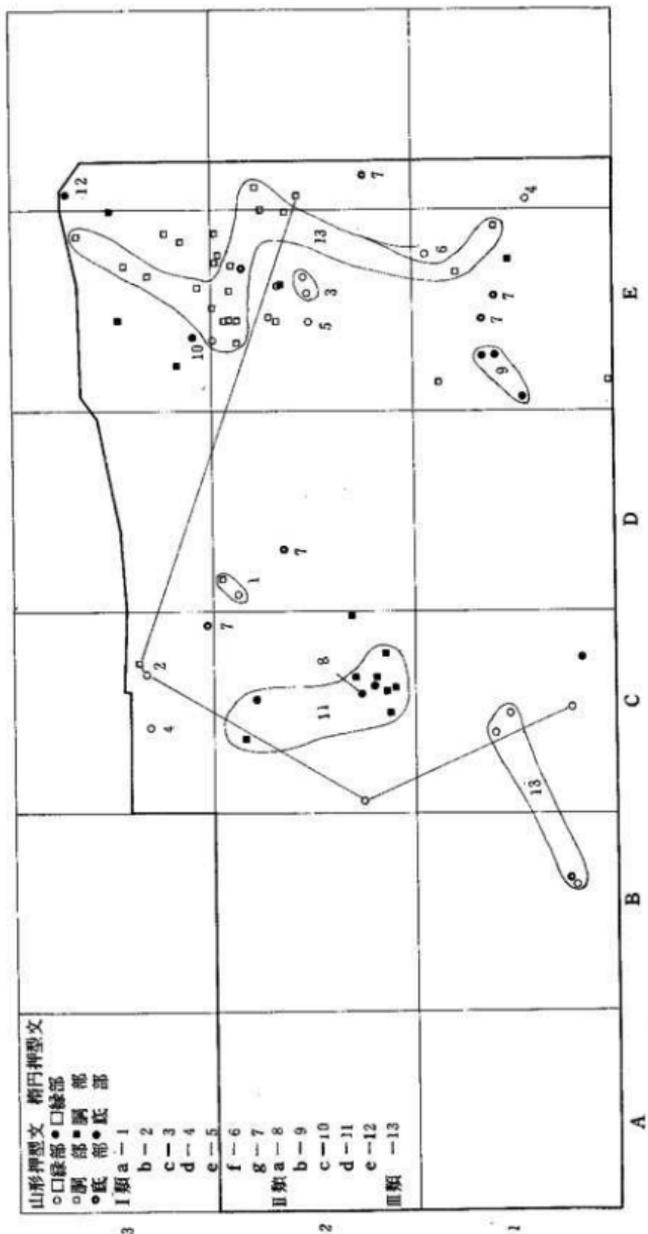
第39圖 土城実測図(3)



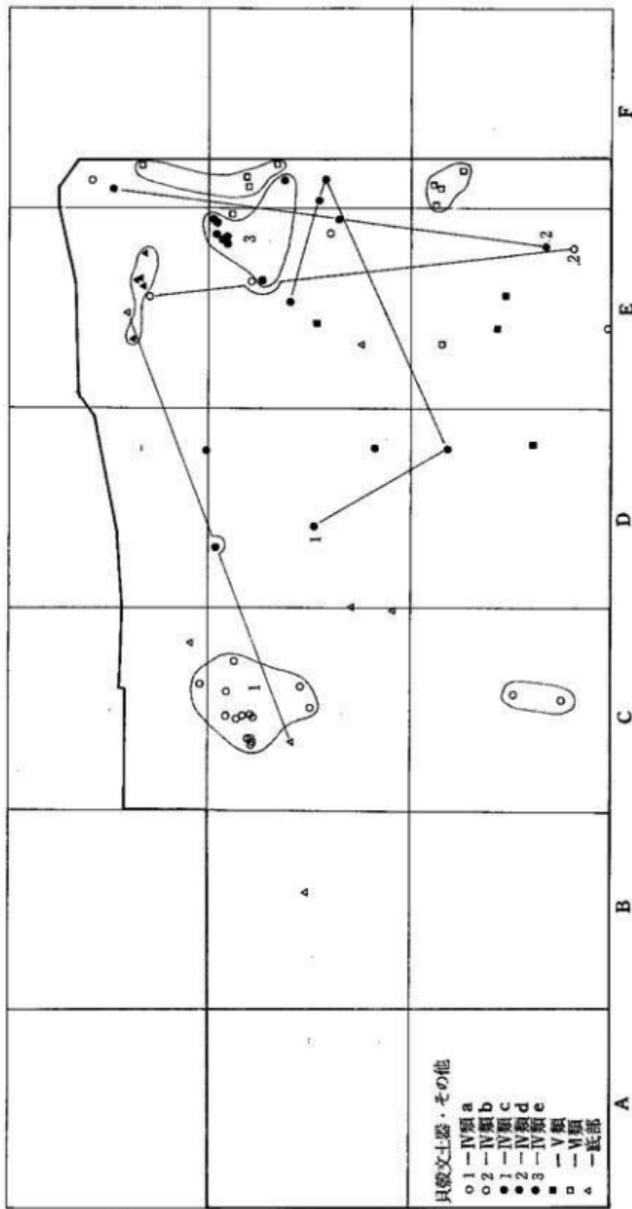
第40图 出土土器类图(1)



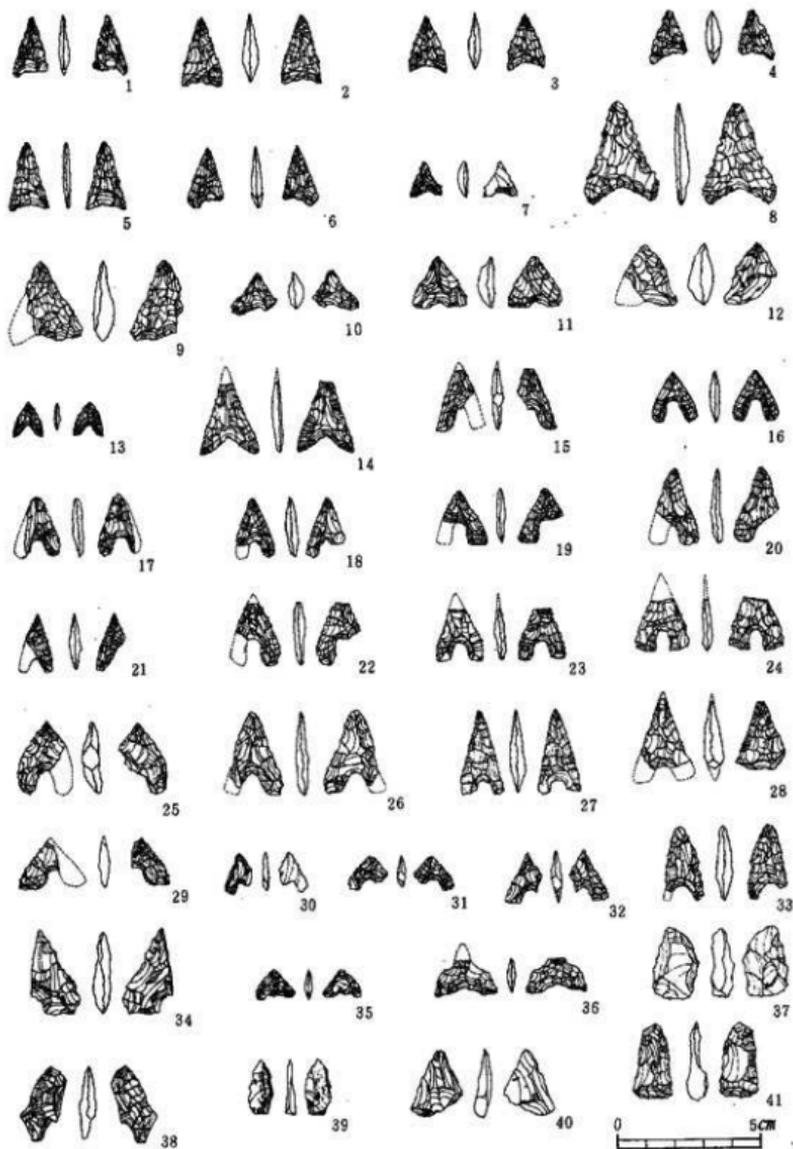
第 4 1 圖 出土土器実測図(2)



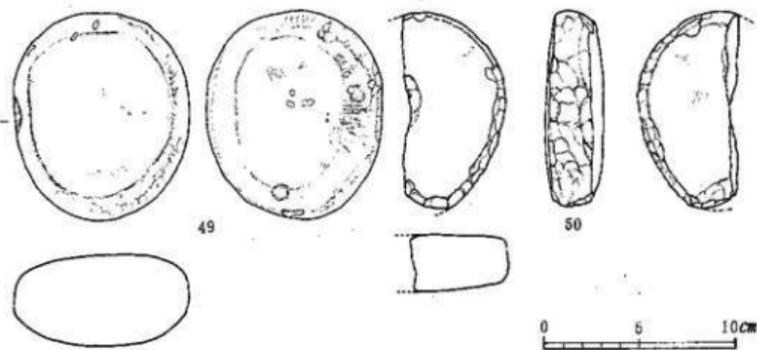
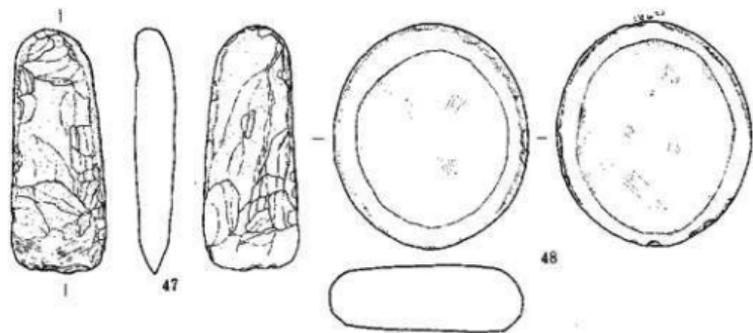
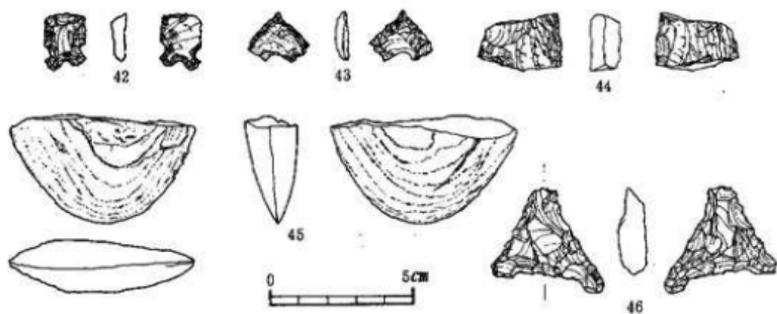
第42圖 出土土器分布圖(1)



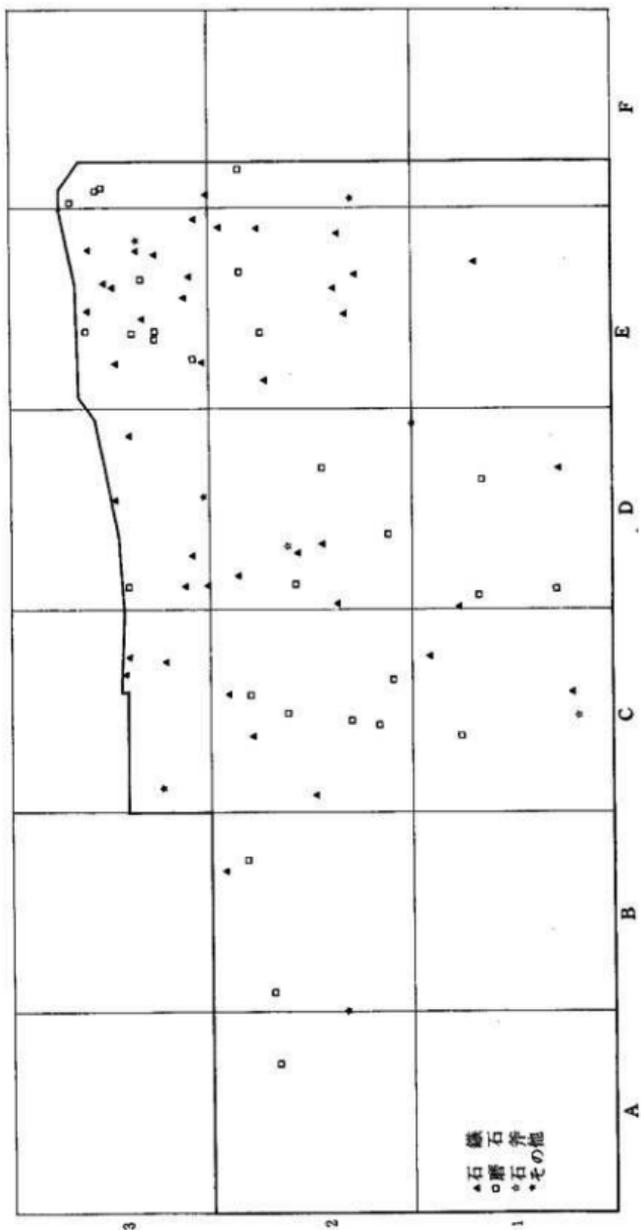
第43圖 出土器分布圖(2)



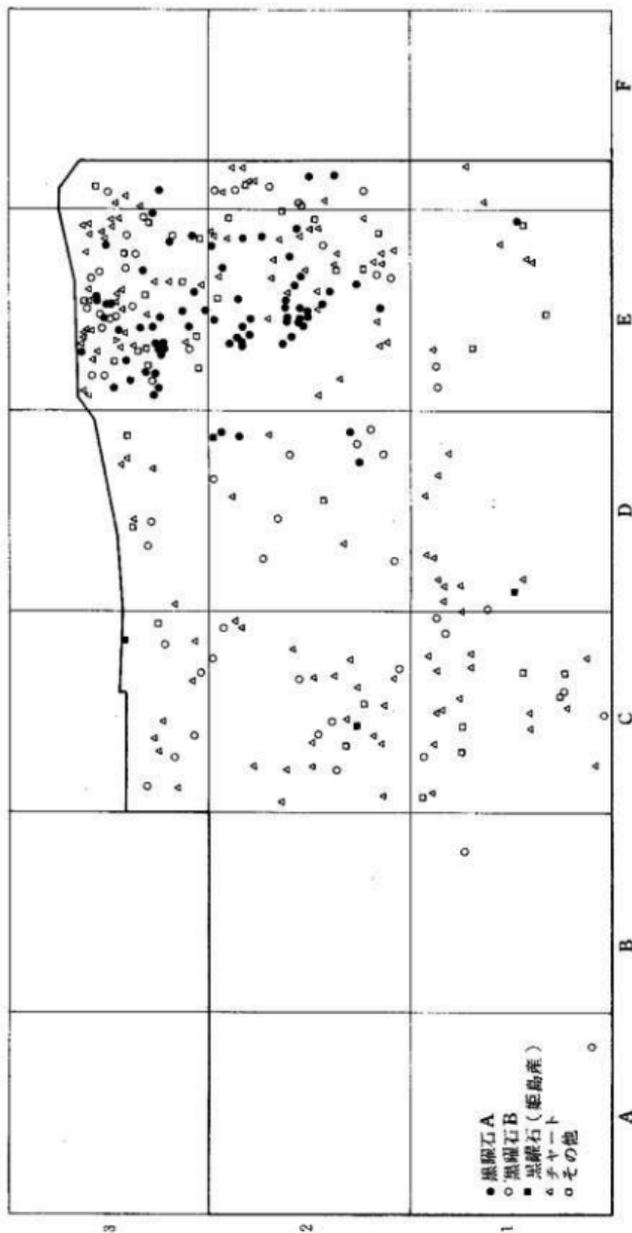
第 4 4 圖 石器実測図(1)



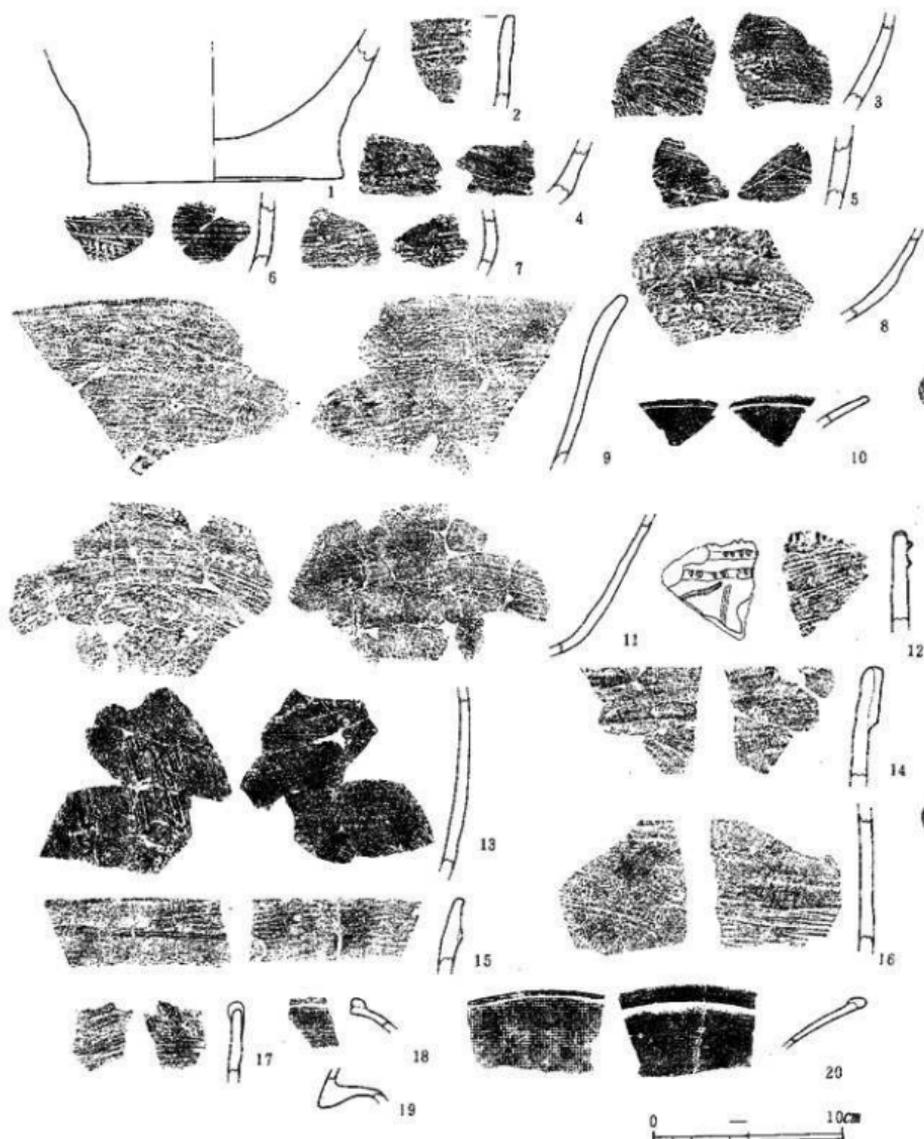
第 4 5 图 出土石器实测图(2)



第46図 出土石器分布図



第47図 石材別チャップ分布図



第 48 图 土坑内出土土器实测图

## 第6章 札ノ元遺跡

### 第1節 調査の概要

本遺跡の発掘調査前の地形は、60～80m程度の幅の平坦面を有する舌状の低丘陵であり、南から北へ緩やかに傾斜していた。試掘調査により遺跡の大部分がアカホヤ層中まで削平を受け攪乱していることが判明していたが、本地区が桑やサツマイモ等の畑作地で主として使用されていたためと思われる。そこで、本調査では試掘調査によって良好な遺物や遺構が検出されたアカホヤ層下を中心に調査することにし、調査区全面をアカホヤ層まで重機を使用して剥いだ。また地形測量もアカホヤ層除去後の面で行なった。

アカホヤ層除去後の地形は、調査区全体が南から北へ緩やかに傾斜し、東側は平坦面を有するものの中央部から西側へ向かって傾斜していた。また、西側では南から北へ凹地が走り、当初1つの丘陵性台地の様相を呈していた本丘陵は、アカホヤ層下では2つの小丘陵であったことが確認された。そこで、地形に応じて10m×10mのグリッドを設定し、南から北へA・B……F区、西から東へ1・2……7区と呼称することにした。調査面積は約3,300㎡で、昭和59年7月26日から11月30日まで調査を行なった。また、調査期間中に、県文化課水友良氏の御指導を得て芳ヶ迫第1遺跡の集石遺構の取り上げを行なった。

調査によって、縄文時代早期の集石遺構・土壇・住居址等が検出され、遺物も多量に出土した。

### 第2節 層位

本遺跡の基本層序は、次のとおりである。(第49図)

第I層が耕作土混入の黒色土層、以下第II層一下部に数cm程度の軽石層を有する黄褐色火山灰層(アカホヤ層)、第III層一小白斑を含む暗黄褐色土層、第IV層一黒褐色土層、第V層一褐色土層、第VI層一暗褐色土層、第VII層一黄褐色土層、第VIII層一角礫を含むにぶい黄褐色土層、第IX層一第2オレンジと呼ばれ始良Tn火山灰層に相当すると思われる黄褐色土層、第X層一黒褐色土層となっている。

縄文時代の遺物と集石遺構は第III層と第IV層中より検出され、土壇のほとんど及び住居址は第V層上面を遺構確認面として第V層以下に掘り込む状態で検出された。実際の掘り込み面は第V層より10～20cm程度上の第IV層中であることが上層断面で確認されたが、埋土が全て黒褐色土であるため、第IV層を掘り下げる段階では、土壇の掘り込み面での検出は困難であった。また、無遺物層である第V層・第VI層下の第VII層中から石核・剥片等を伴って旧石器時代の集石遺構が検出された。

### 第3節 遺構と遺物

#### 1. 旧石器時代

旧石器時代の調査は、縄文時代の全面調査を終了した後A-4・5・6区を行なった。その結果、A-5・6区の第Ⅷ層中より剥片が出土し始め、A-6区東隅で第Ⅷ層下部より石核・剥片を伴って集石遺構1基が検出された。

##### 遺構(第50図)

検出された1基の集石遺構は、径10~15cm前後の中粒砂岩の焼けた角礫10数個で構成されていた。規模は40×40cm程度の小さなもので掘り込みは見られなかった。また、礫は破砕礫がほとんどで火熱によって赤褐色を呈するものもあるが、床面に炭化物等は見られなかった。

##### 遺物(第51図)

遺物は、集石遺構を中心にして径3m程度の範囲でA-6区からA-7区にかけて出土した。出土遺物は、凝灰質泥岩製の石核1点、使用痕のある剥片2点、剥片94点、流紋岩製の石核1点、ナイフ形石器1点、剥片27点であった。

1は、原礫面が残存する凝灰質泥岩製の石核である。大型の母岩より石核となる岩片を取り出し、さらに両端に残存する原礫面を除去して平坦面を作り出しそこから縦長の剥片を取り出す。2・3はその剥片であり、使用痕が観察されるものである。4は、流紋岩製のナイフ形石器であるが、縦長剥片に基部調整を施し丸みのある基部を作り出している。

#### 2. 縄文時代

縄文時代の遺構として集石遺構・土壇・住居址が検出されたが、全てアカホヤ層下のものである。

##### 集石遺構(第52~66図)

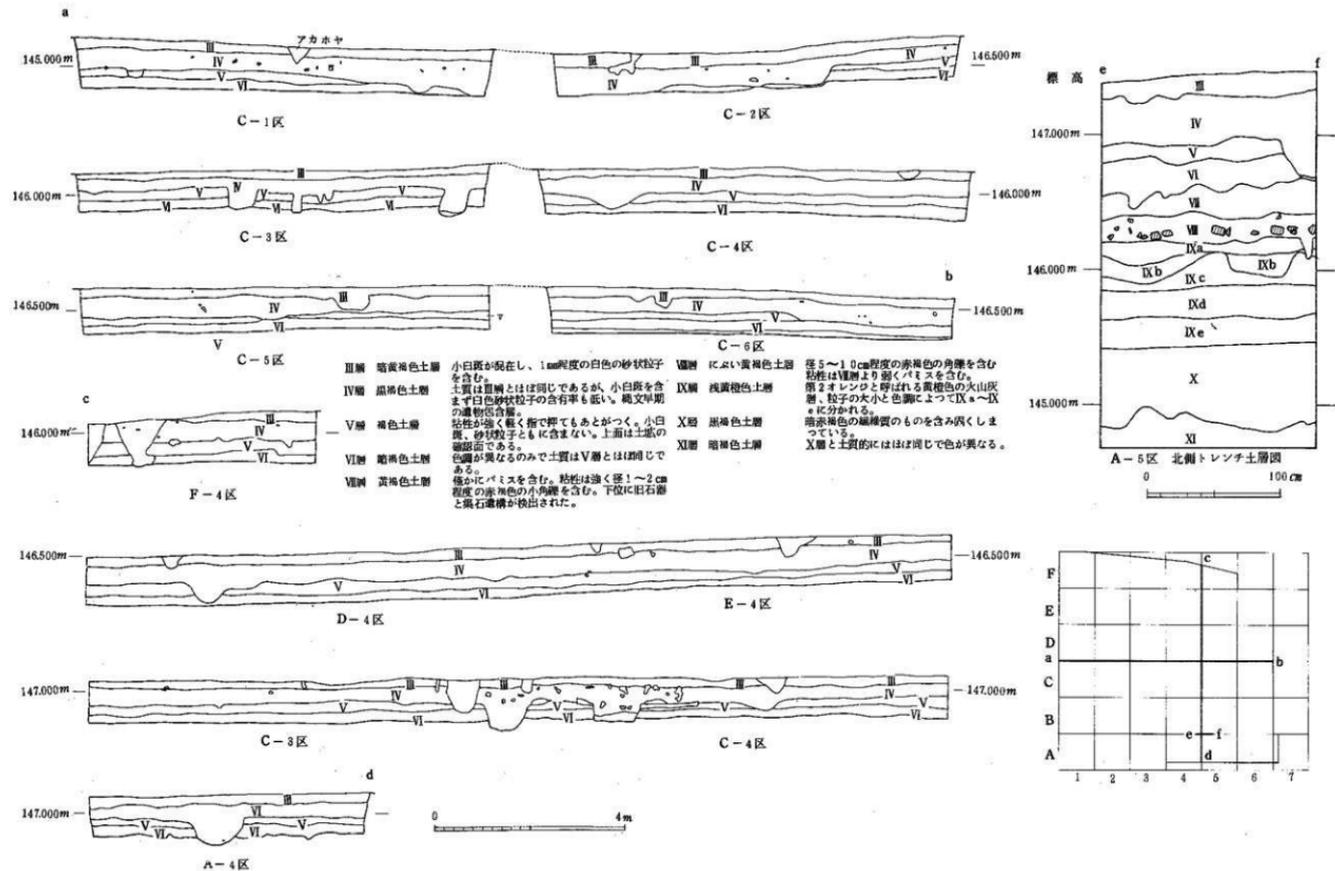
集石遺構は84基検出されたが、次のように大別される。

##### I型 土壇を伴わない平面的なタイプ

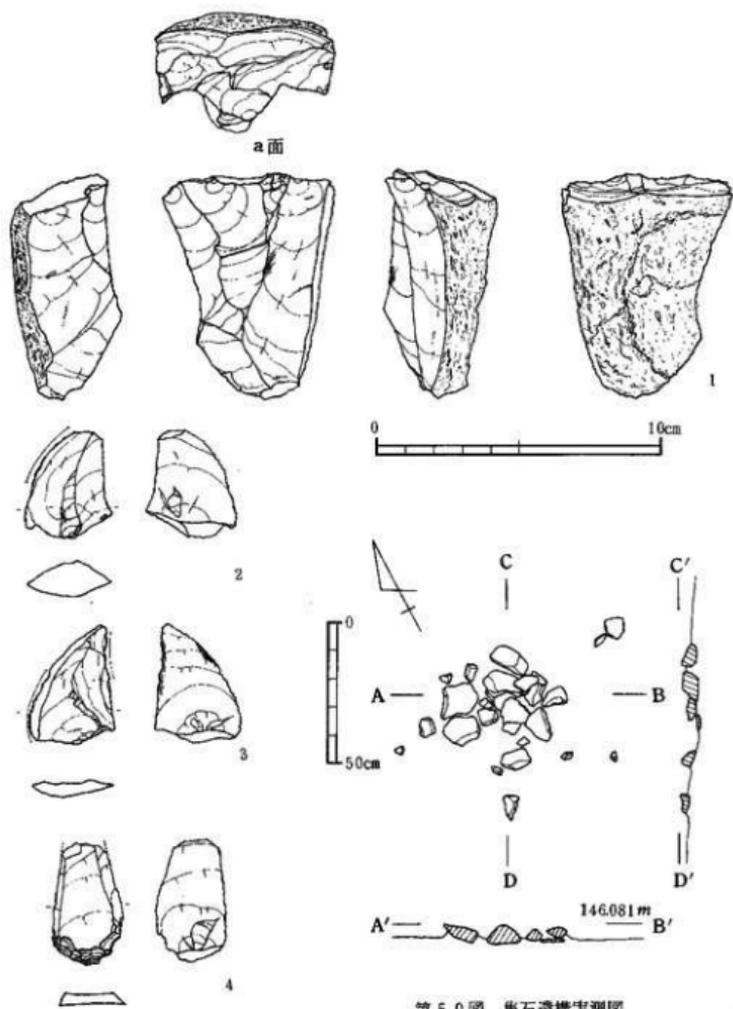
##### II型 土壇を伴うタイプ

- a 土壇を伴うが配石を有しないもの。
- b 土壇を伴い、配石を有するもの。
- c 構成礫が小型で密度の高いもの。
- d 構成礫が大型であるが土壇が浅く小規模のもの。

である。その他II類の集石遺構を数基含んだ規模の大きい焼石群も2ヶ所で検出された。構成する礫は、砂岩等の円礫・角礫であり、ほとんどが熱を受けて赤変したり脆くなったりしている。土壇



第49層土層図



第 51 圖 出土石器實測圖

第 50 圖 集石遺構實測圖

中の埋土には炭化物が検出されるものが多いが、焼土は検出されない。出土層位は、アカホヤ層直下の第Ⅲ層下部から第Ⅳ層中部に集中している。第Ⅲ層上部ではⅠ類、Ⅱa類が多いが、出土遺物が集中する第Ⅲ層下部から第Ⅳ層中部ではⅡ-a・b・c類が混在して検出され、第Ⅳ層下部ではⅡd類が多い。全体的な分布では、発掘区東側の台地上に集中して検出される。また、類別ではⅡ-b型がC・D-4・5区に集中しており、特に2号住居跡周辺部に多い。さらに発掘区西側の1・2・3区ではⅡ-b型はほとんど検出されず、3号住居跡に密接した○号のみである。

#### 土坑 (第67~83図)

土坑は104基検出されたが、次のように大別される。

##### I型 断面がスプーン状を呈する長円形のタイプ

- a 焼土を伴うが礫は検出されないもの。
- b 焼土を伴い、大型礫が検出されるもの。
- c 焼土を伴い、小型礫を伴うもの。
- d 焼土を伴わないもの。

##### II型 連穴土坑

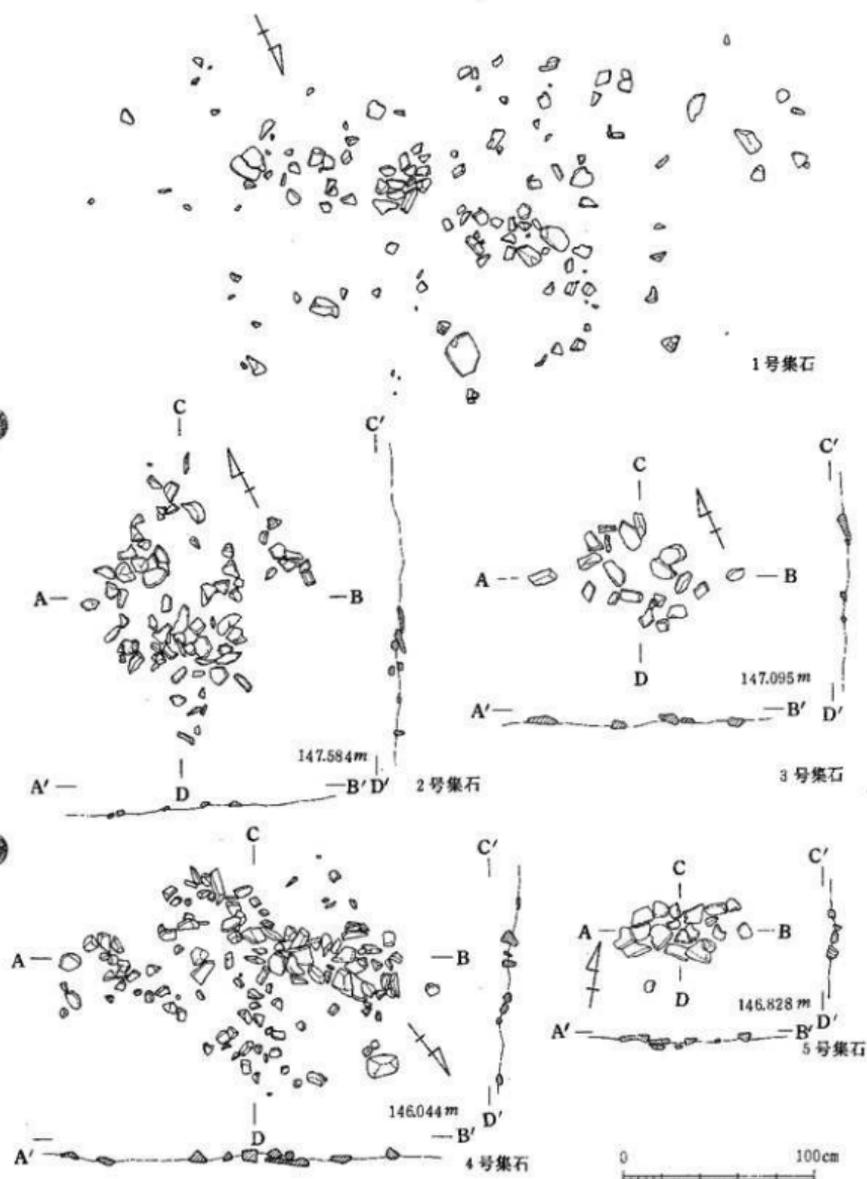
- a 焼土を伴うもの。
- b 焼土を伴わないもの。

##### III型 円形を呈する土坑

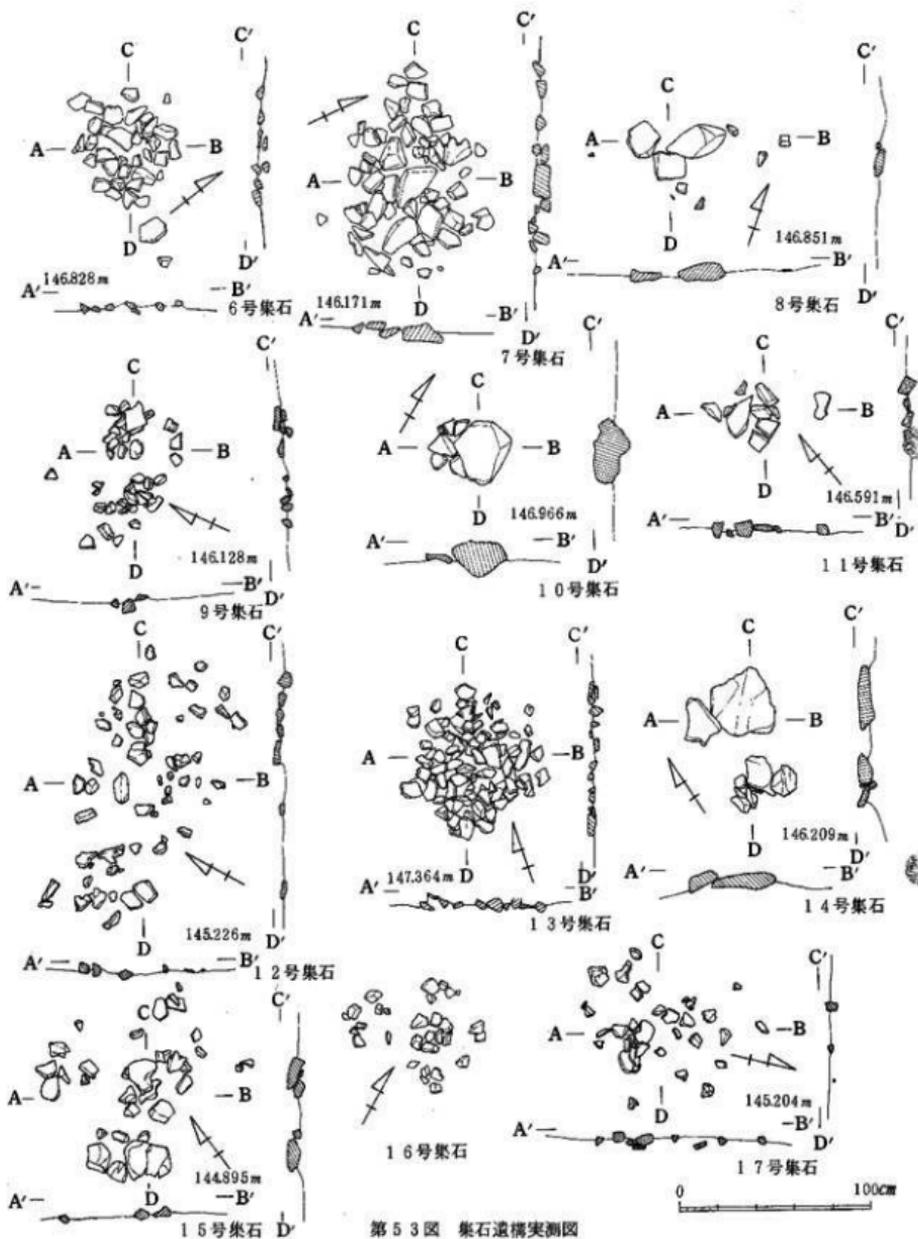
- a 掘り込みが浅く規模が大きいもの。
- b 掘り込みが深く規模が大きいもの。

##### IV型 その他の土坑

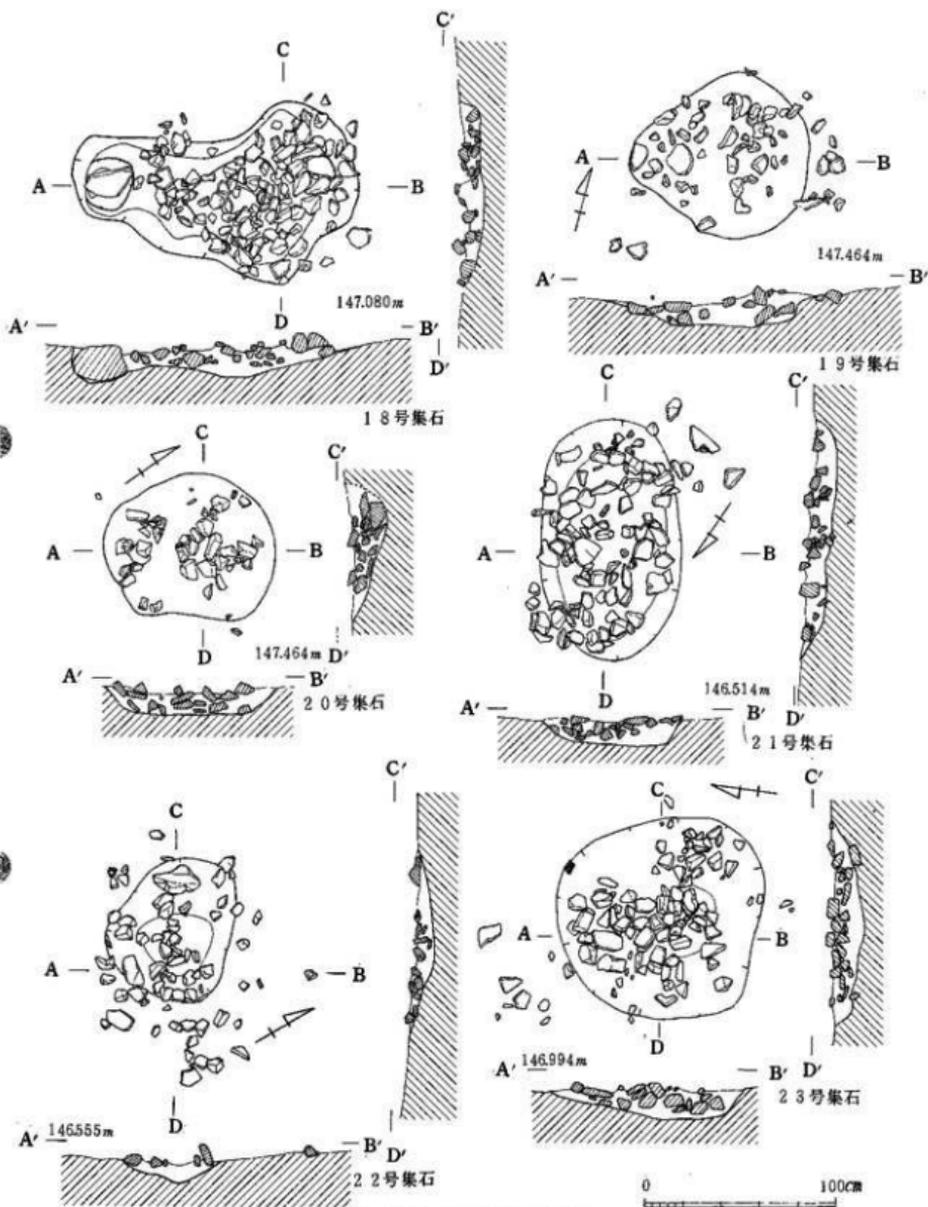
である。土坑は、集石遺構や遺物が集中して検出される第Ⅳ層中では検出されず、遺構確認面である第Ⅴ層上面で検出された。この中でI型・II型土坑は県内での検出例がなく特異なものである。I型土坑の形態上の特徴としては、長軸120~150cm、短軸40~60cm程度の長円形のもので、断面がスプーン上を呈し円形状の凹部を有することがあげられる。深さは確認面の第Ⅴ層上面から20~70cmと幅があるが実際はさらに10~20cm程度深いものである。基本的な埋土は、スプーン状の凹部に2~10cmの厚さで焼土が堆積し、その上部に炭化物や焼土を含み固く締まった黒褐色土が5~15cmの厚みを持って堆積している。また、このI型土坑の中には、凹部の固く締まった黒褐色土上に大型の円礫や角礫が検出されたものが12基あり、13号土坑のように礫が平面的な広がりをもって検出されたものもある。さらにこのI型土坑が数基連続しているものも存在する。II型土坑は、いわゆる連穴土坑と呼ばれ、県内では初見のものである。連穴土坑は46号



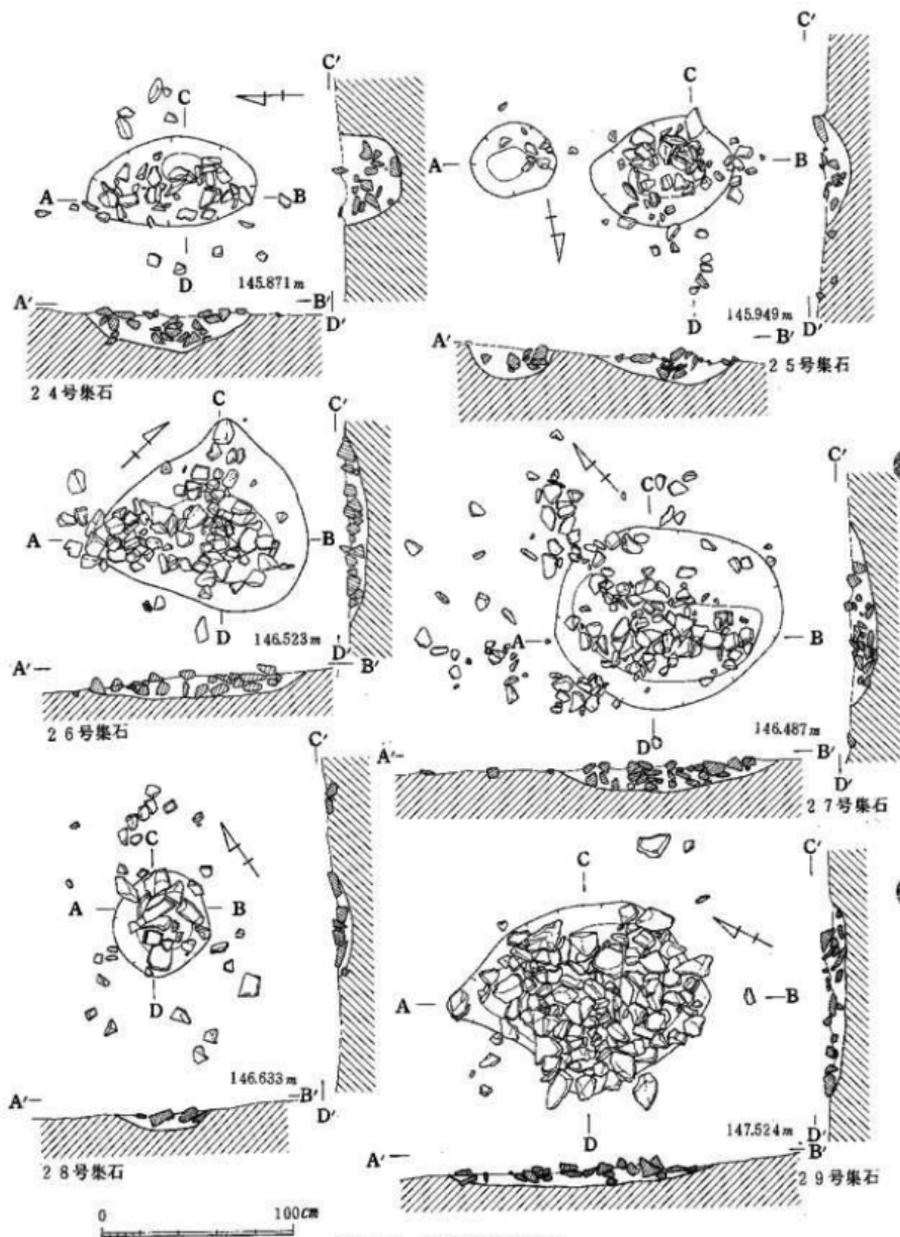
第52图 集石构造详图(1)



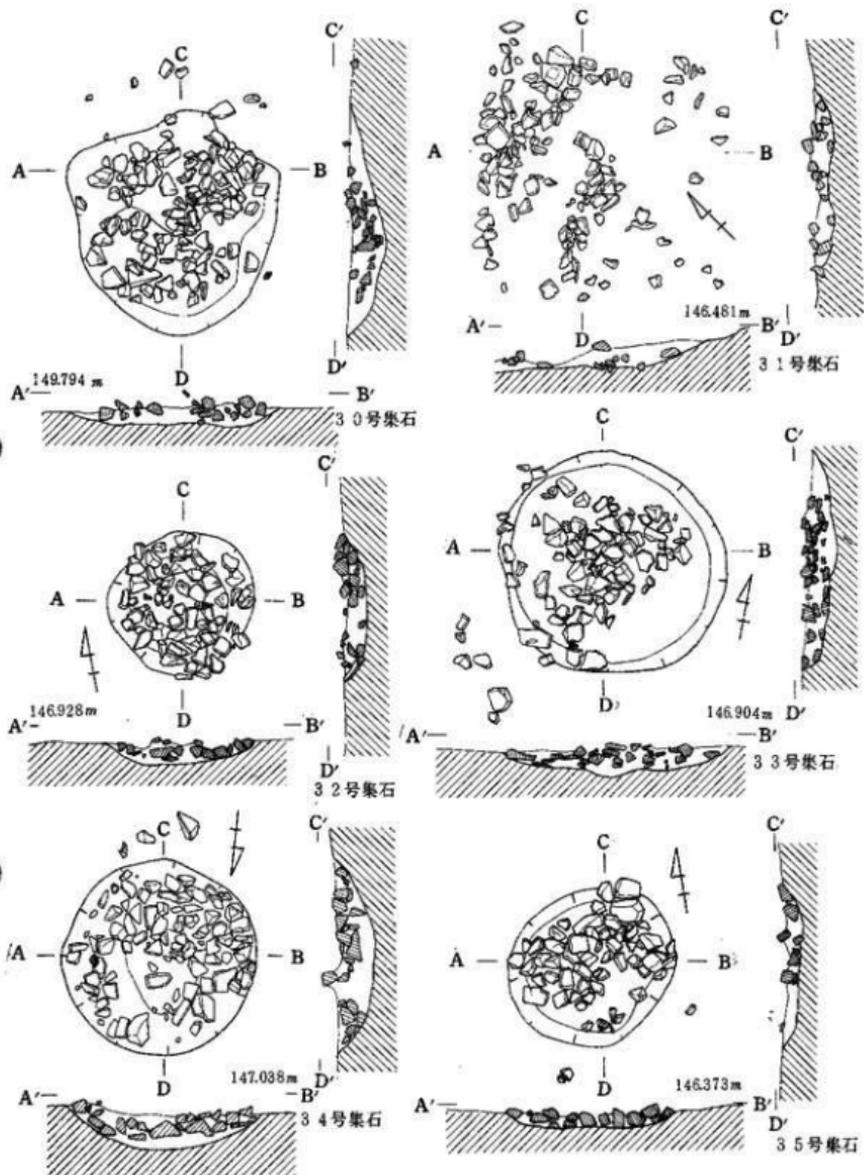
第 53 图 集石遺構実測図



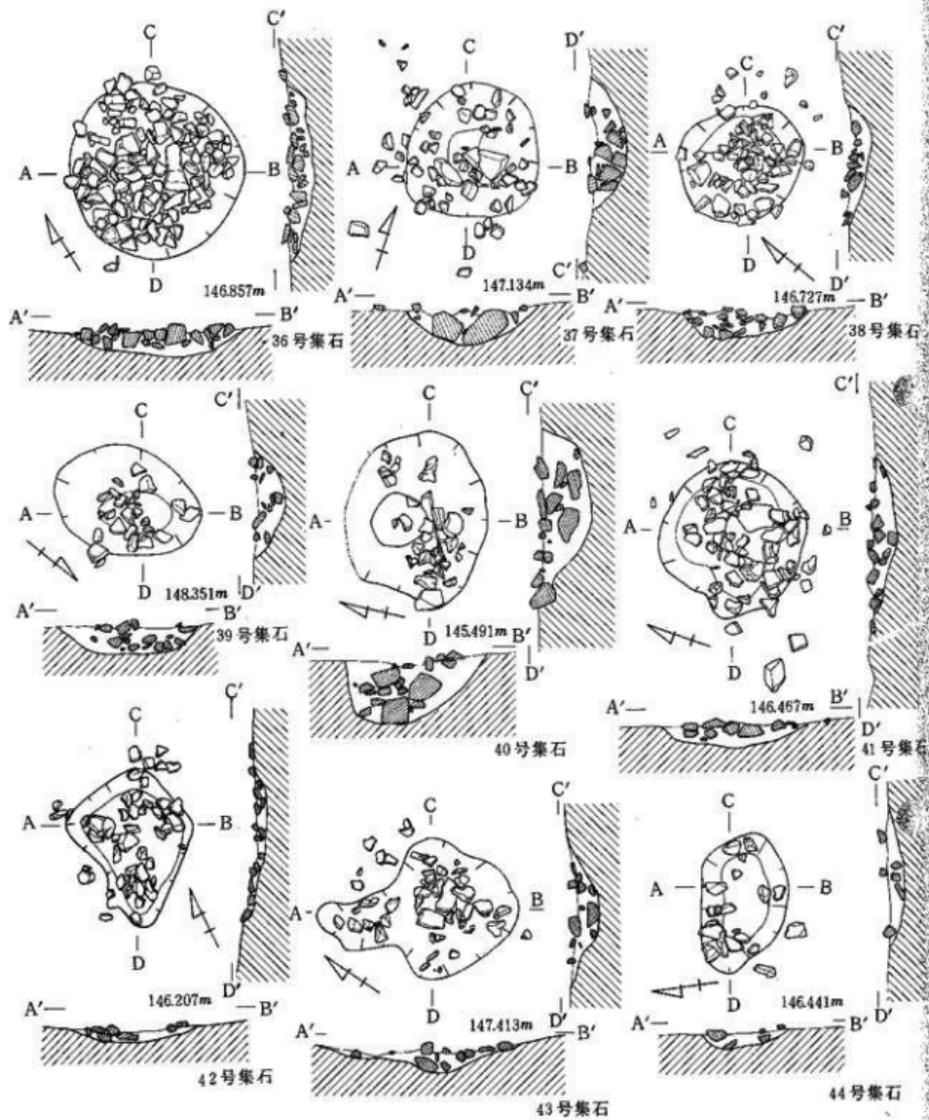
第54图 集石遺構実測圖(3)



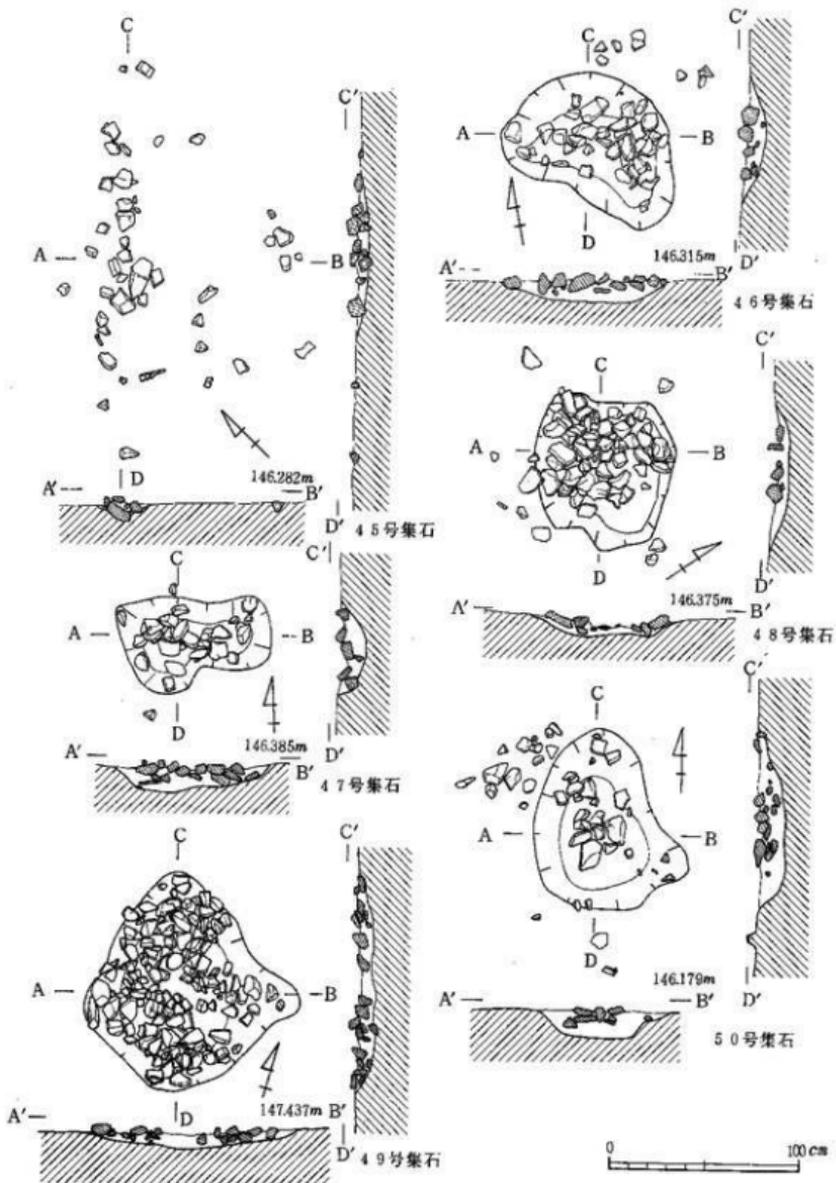
第 55 图 集石遺構実測圖(4)



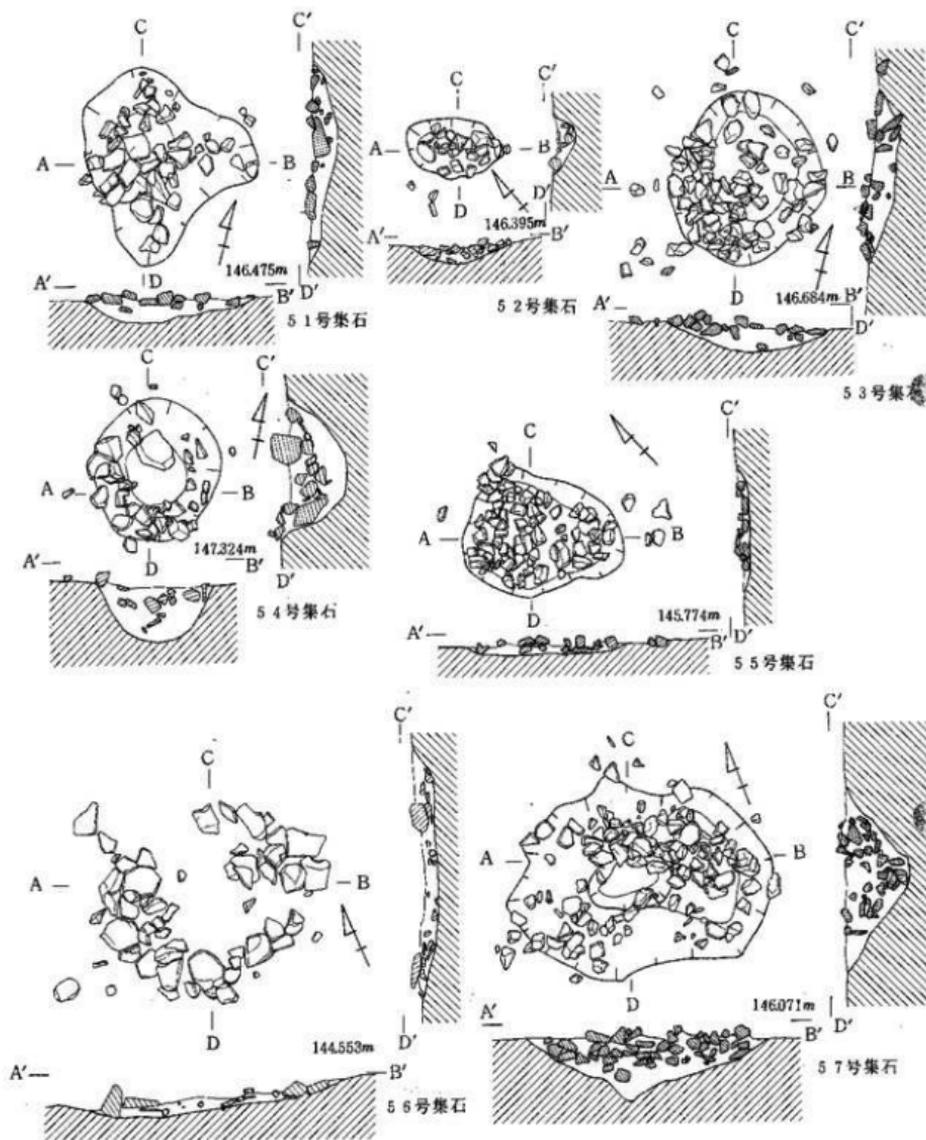
第 56 图 集石遺構実測図(5)



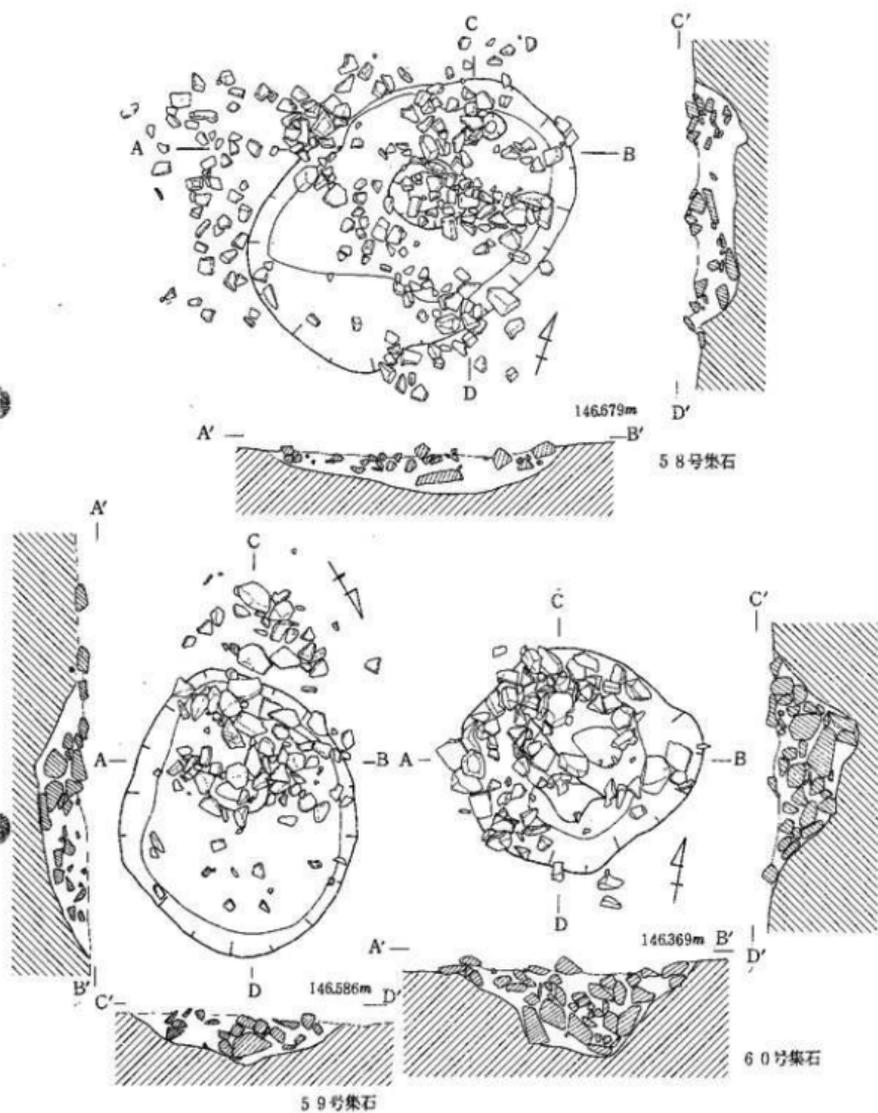
第57图 集石遗址平面图(6)



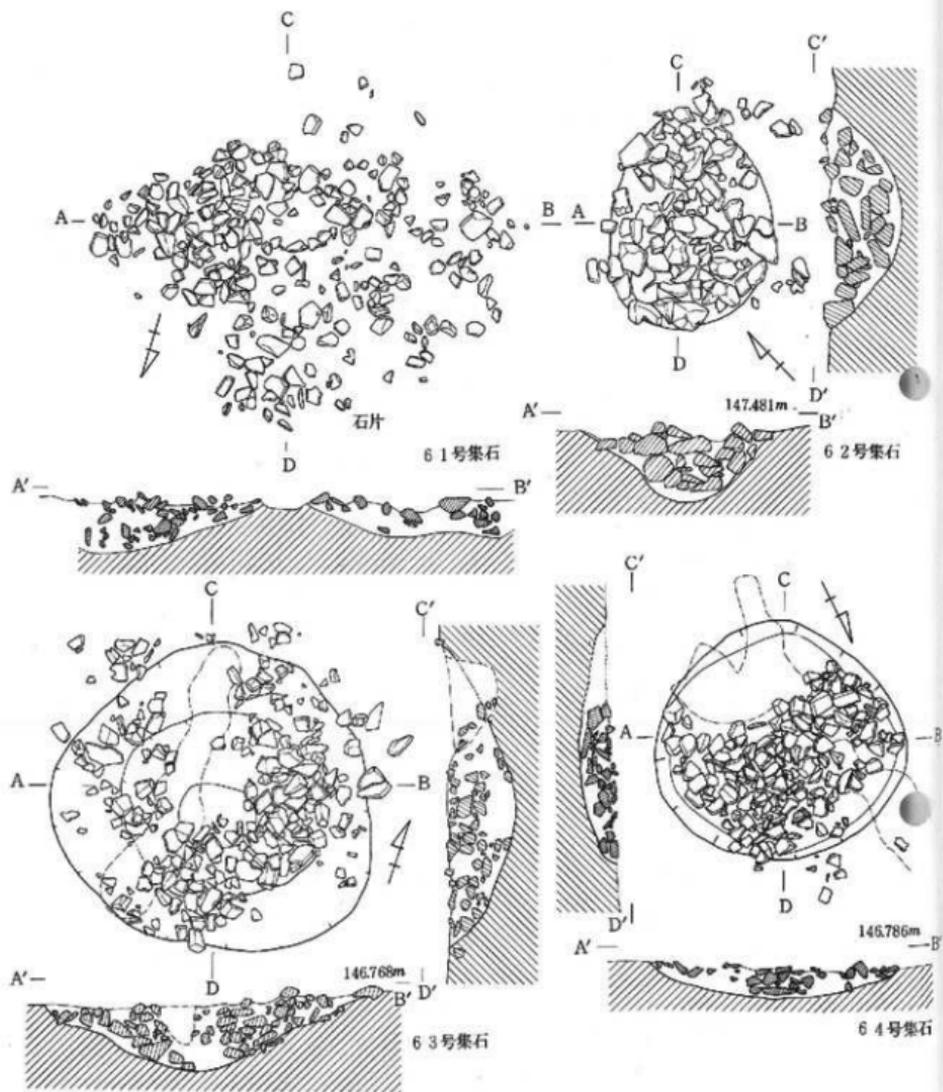
第58图 集石遺構突湖岡(7)



第59图 柴石遗址平面图 (8)

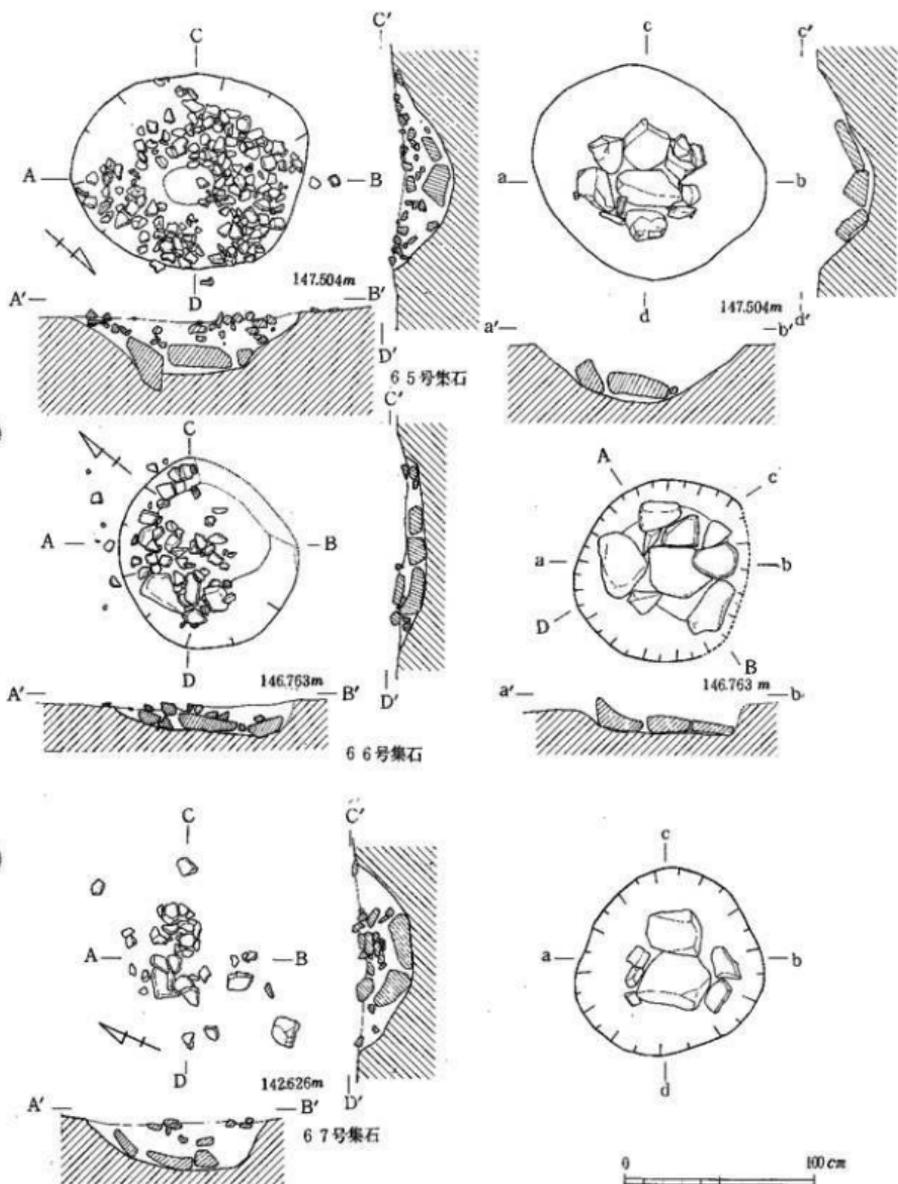


第60图 集石遺構実測図(9)

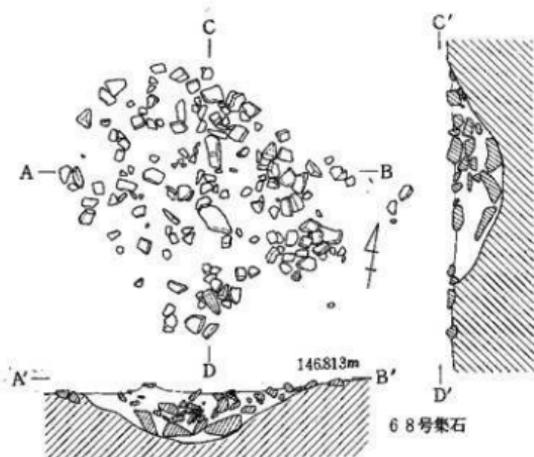


第61图 集石遺構実測图 (10)

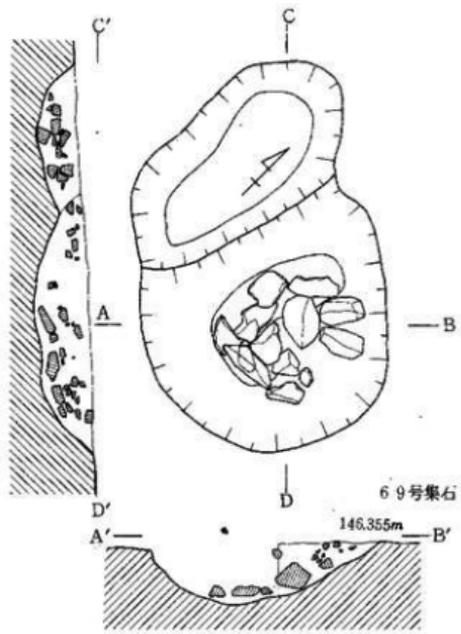
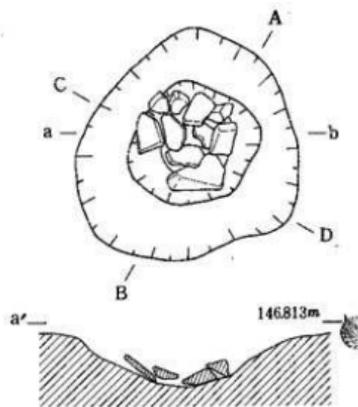
0 100cm



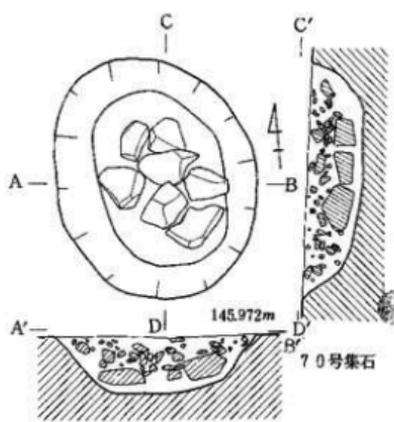
第62圖 集石遺構実測圖 (11)



68号集石



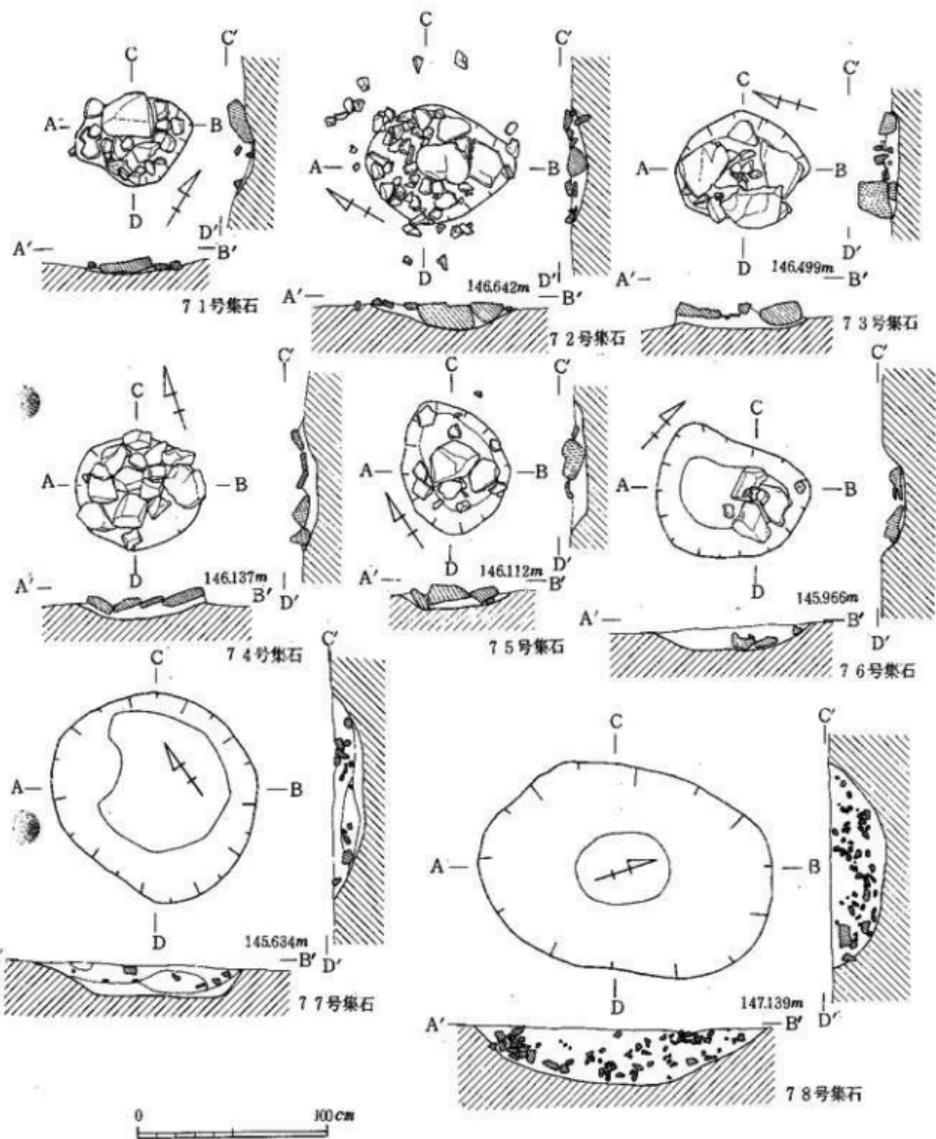
69号集石



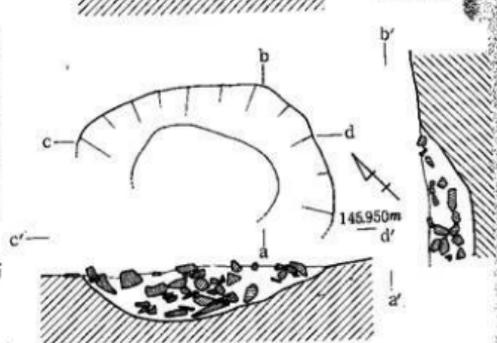
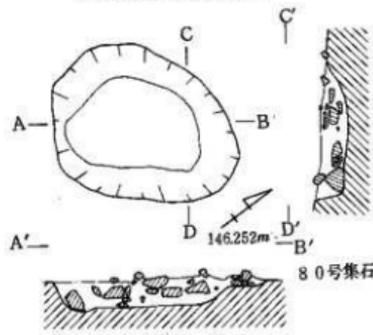
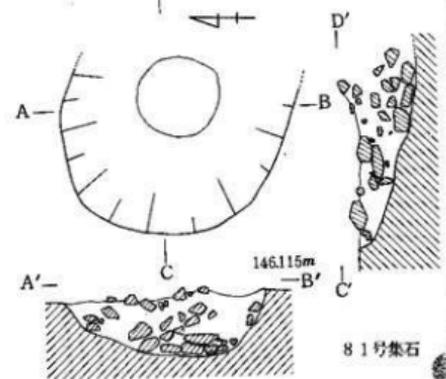
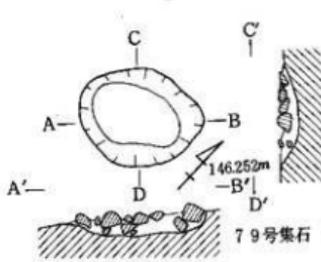
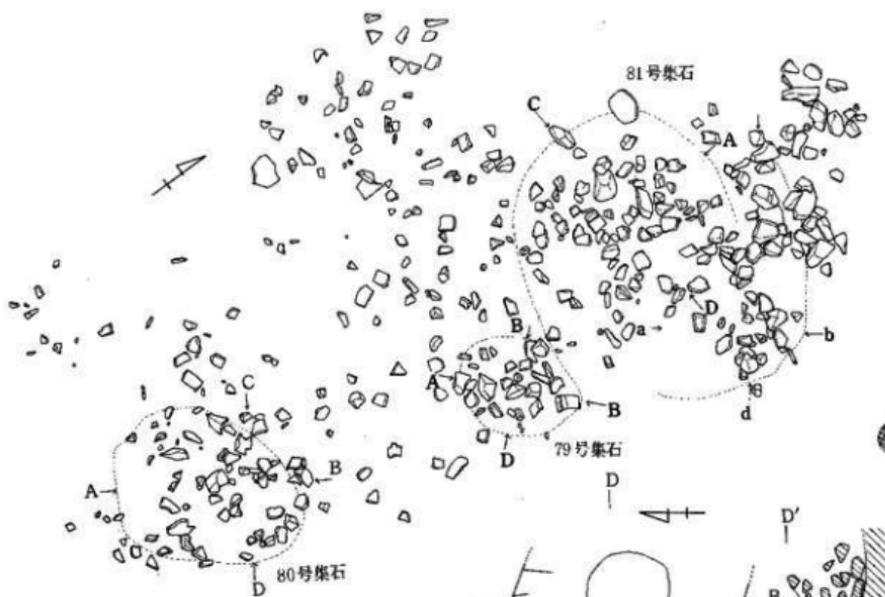
70号集石



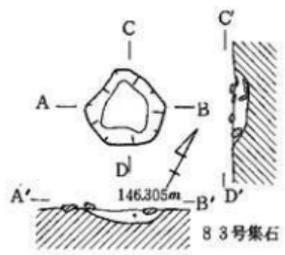
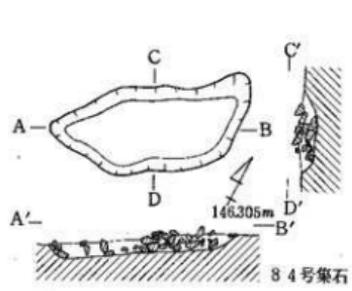
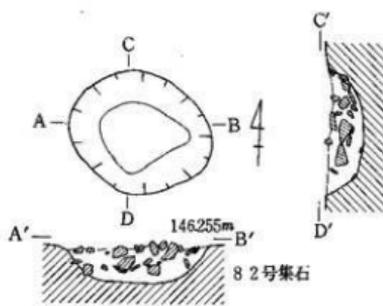
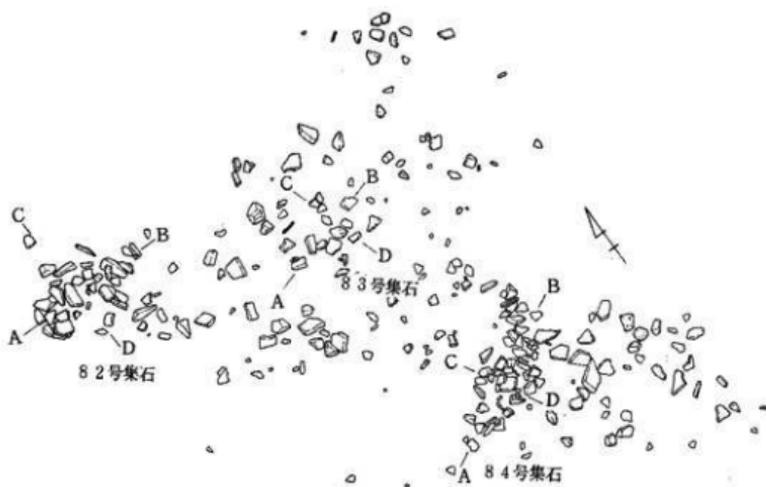
第63图 集石遺構実測図 (12)



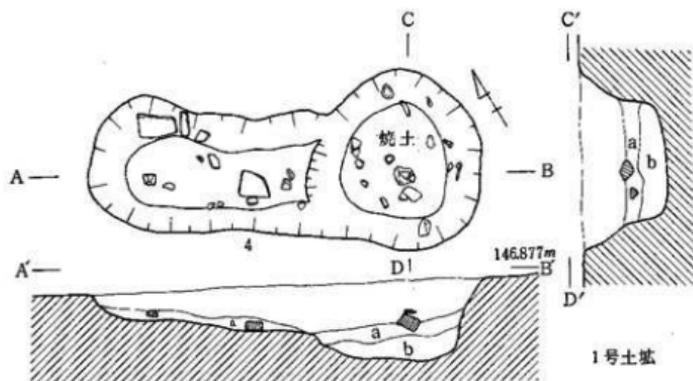
第64图 集石遗构实测图 (13)



第65图 集石遺構実測図(14)

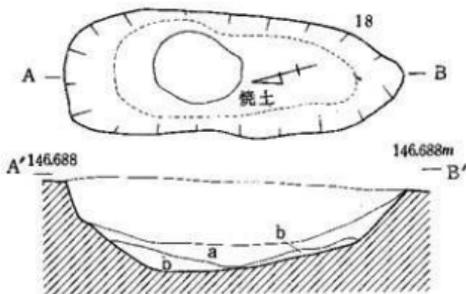


第66圖 集石遺構実測圖 (15)

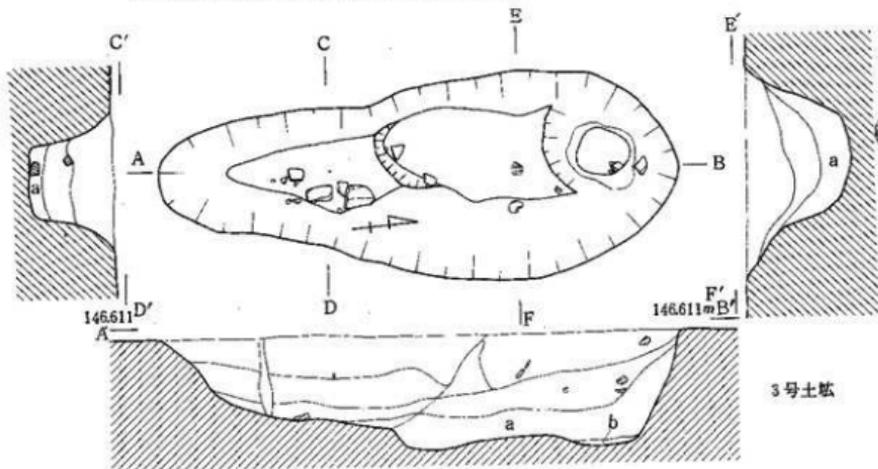


1号土坑

a 坑土粒・炭化物を含む黒褐色土  
b 瘠土层

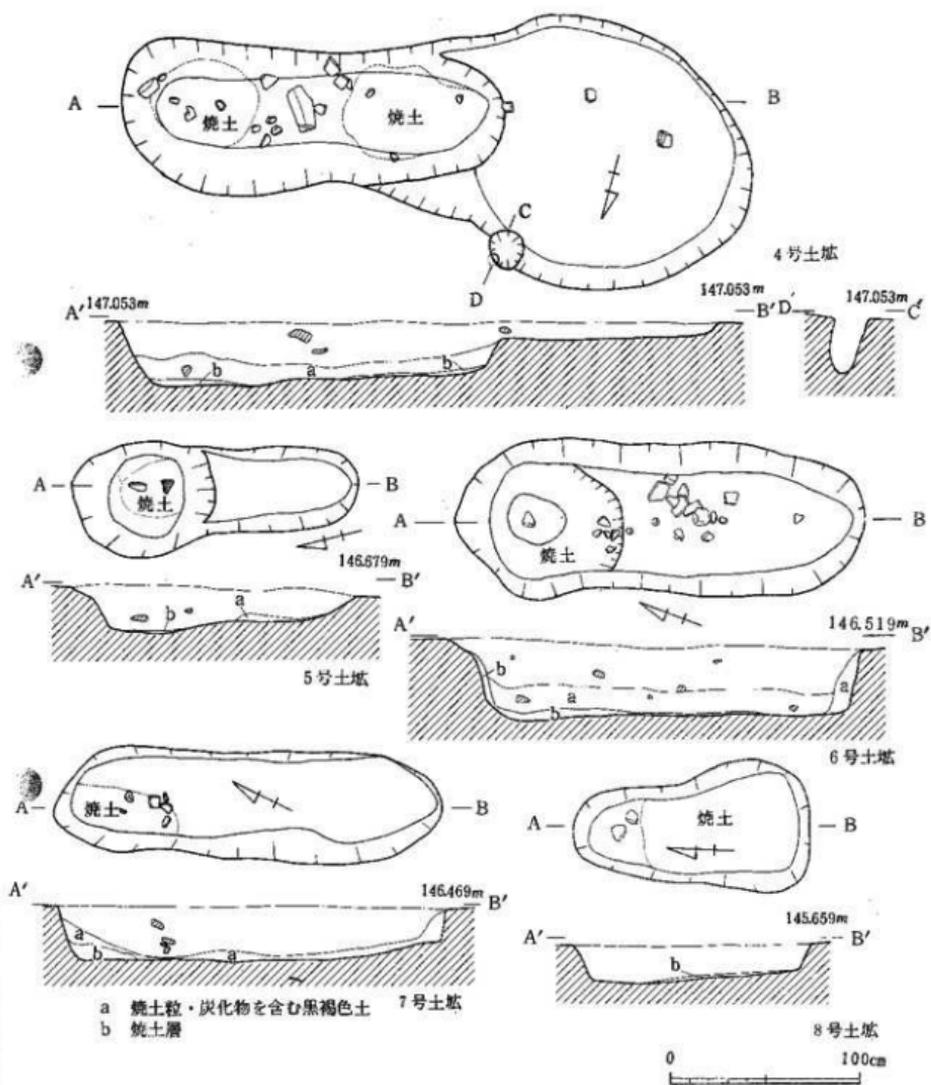


2号土坑

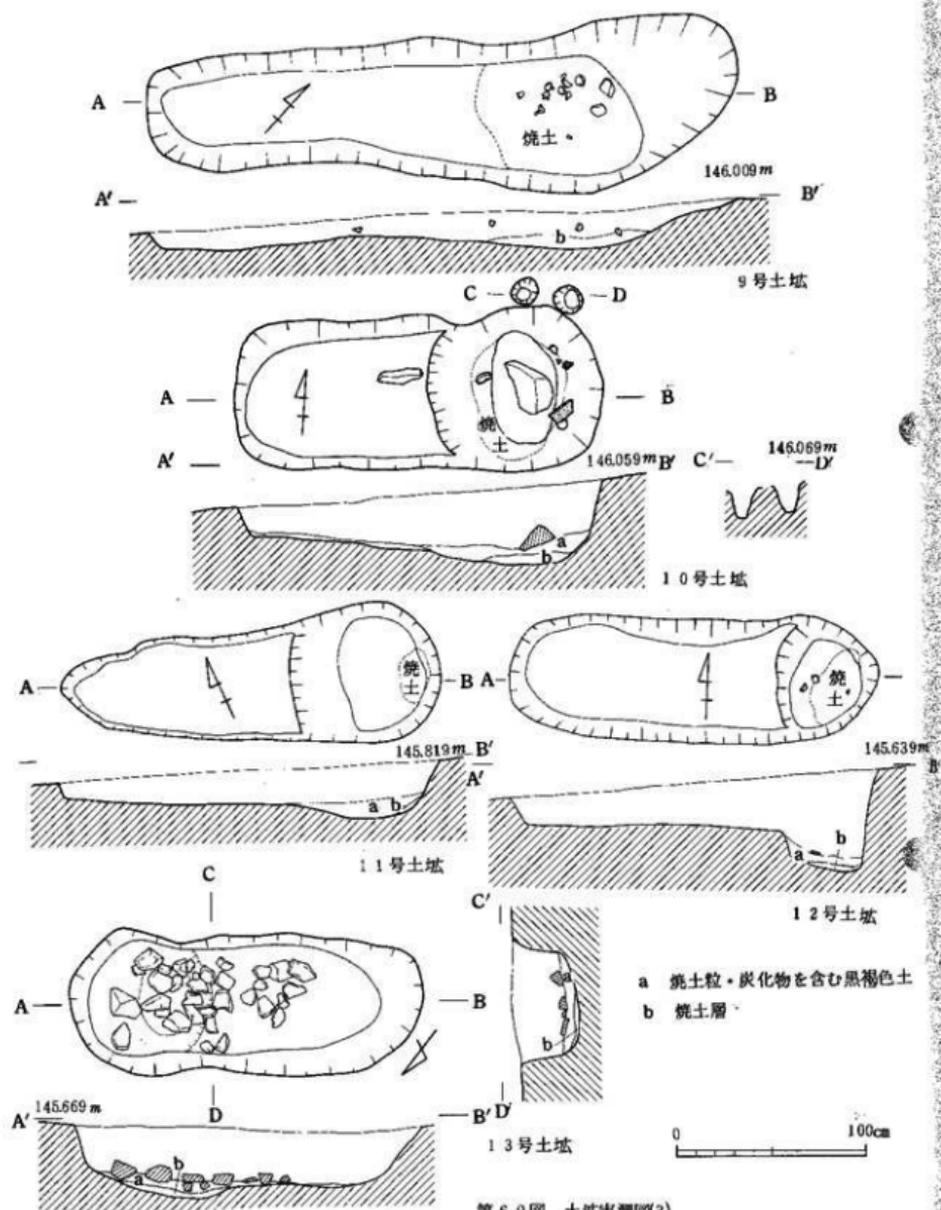


3号土坑

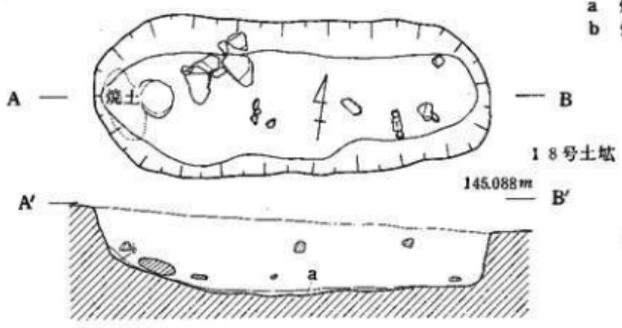
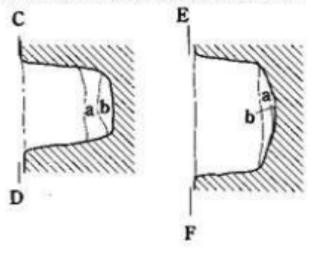
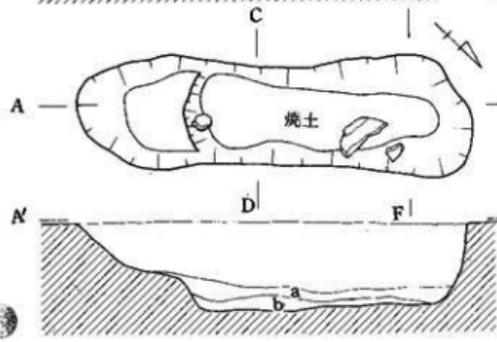
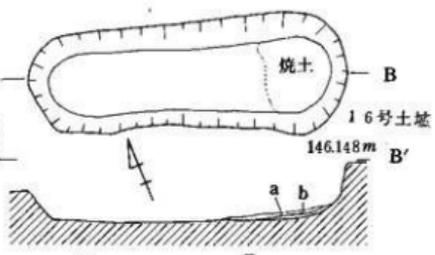
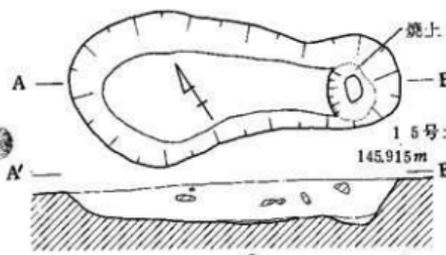
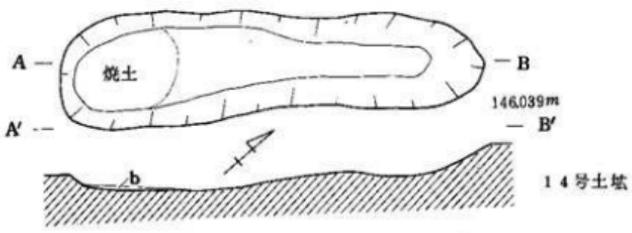
第 67 图 土坑发掘图(1)



第68图 土塚実測图(2)



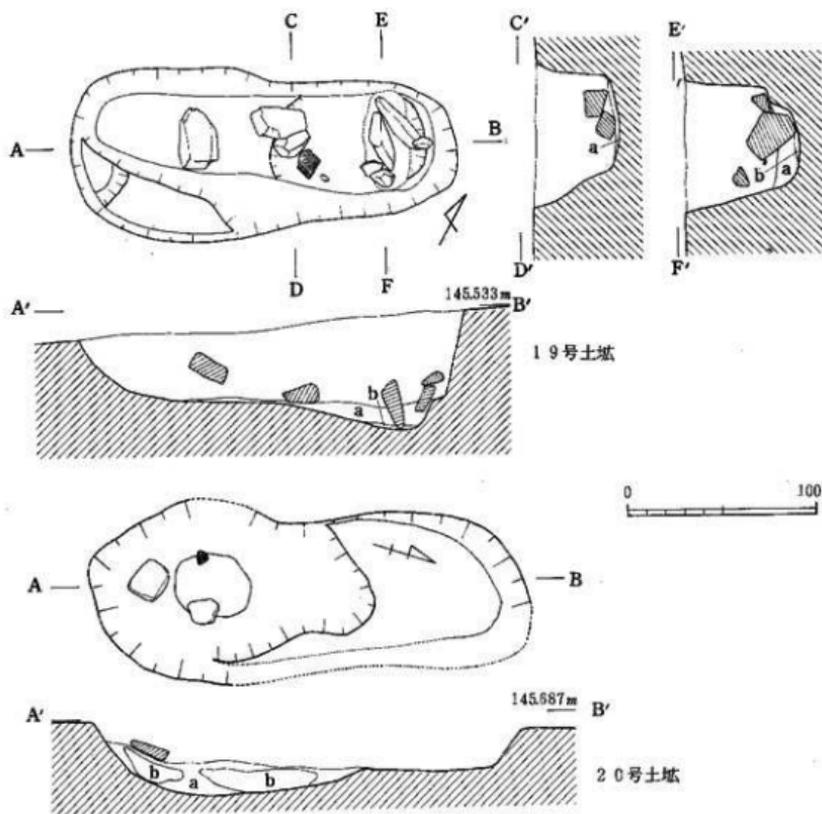
第69图 土坑实测图(3)



a 烧土粒・炭化物を含む黑褐色土  
b 烧土屑

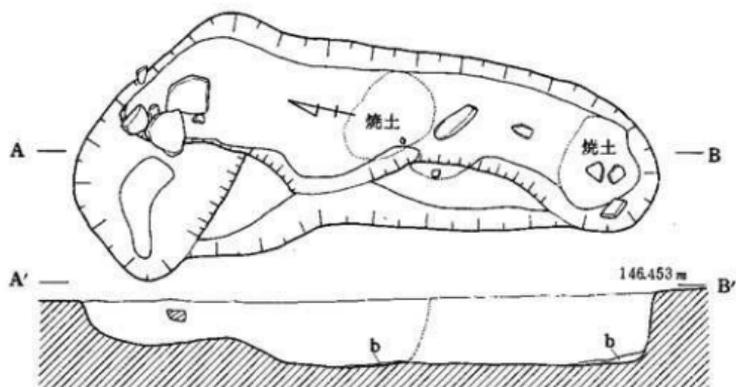


第70图 土坑实测图(4)



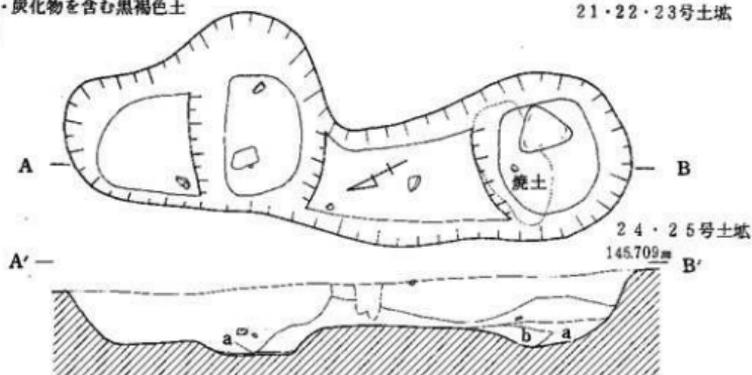
a 焼土粒・炭化物を含む黒褐色土  
 b 焼土層

第71图 土城突測図(5)

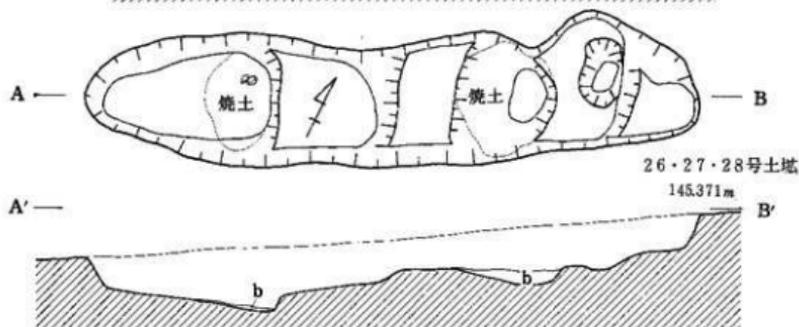


a 烧土粒・炭化物を含む黒褐色土  
b 烧土层

21・22・23号土坑



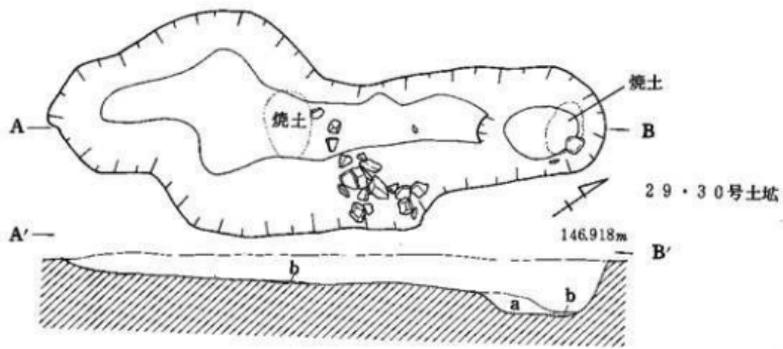
24・25号土坑



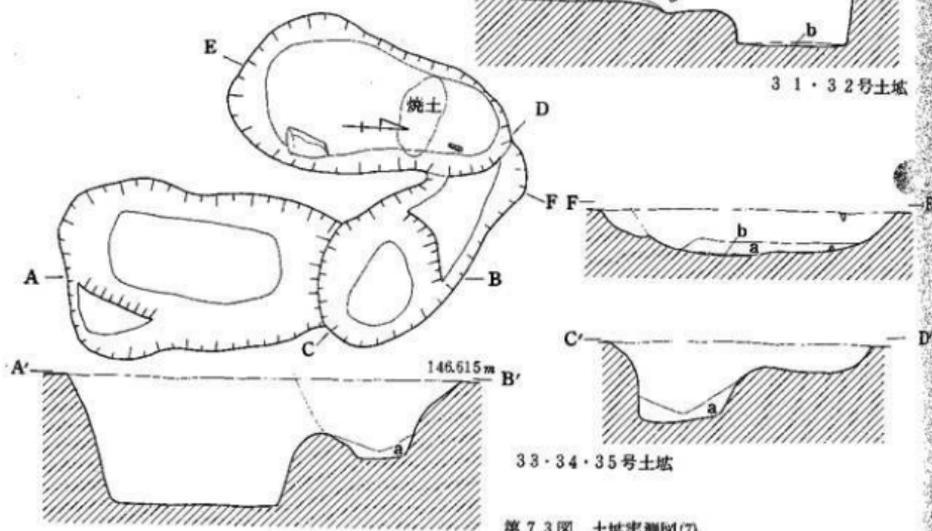
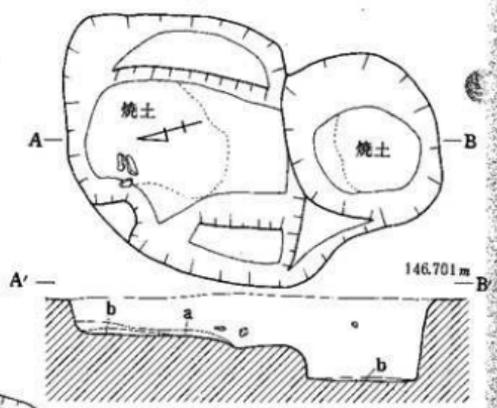
26・27・28号土坑

第72图 土坑发掘图(6)

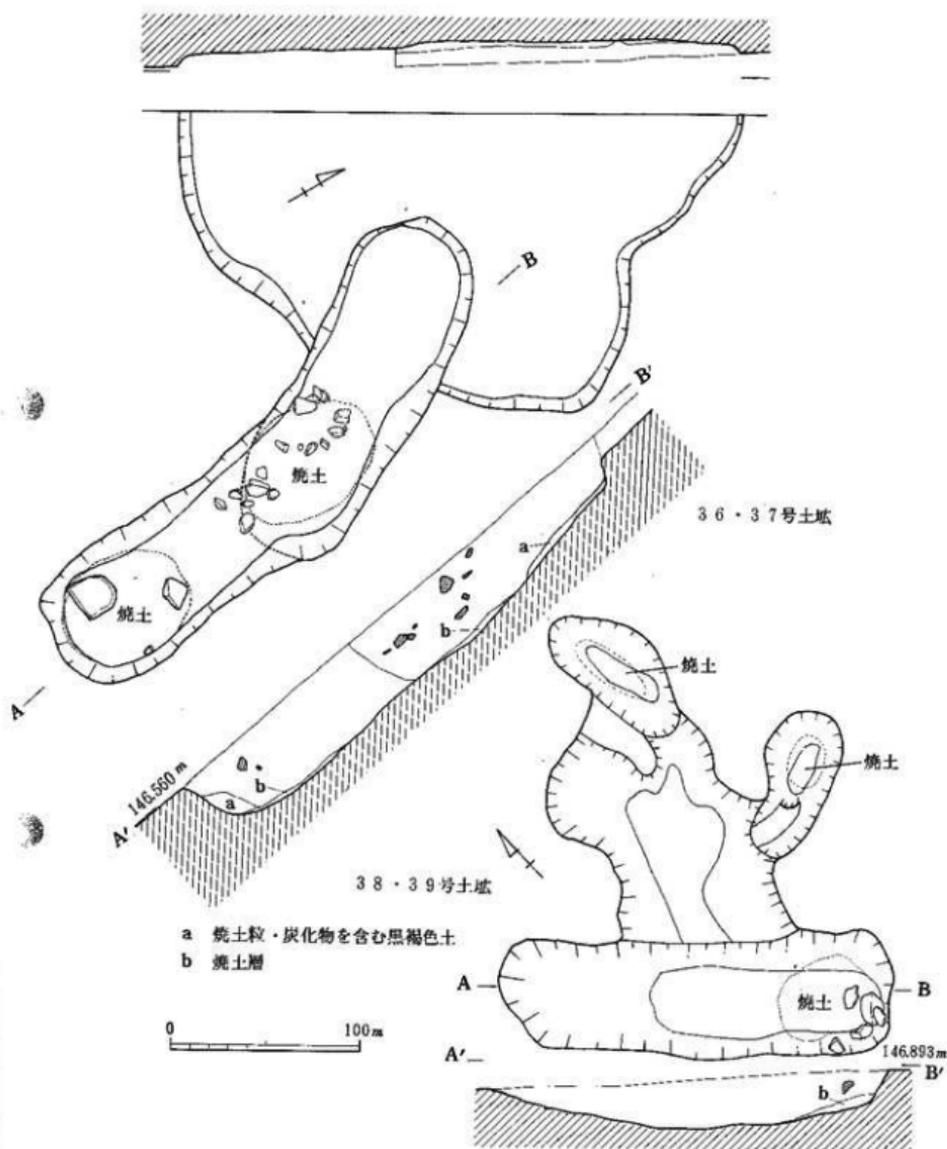
0 100cm



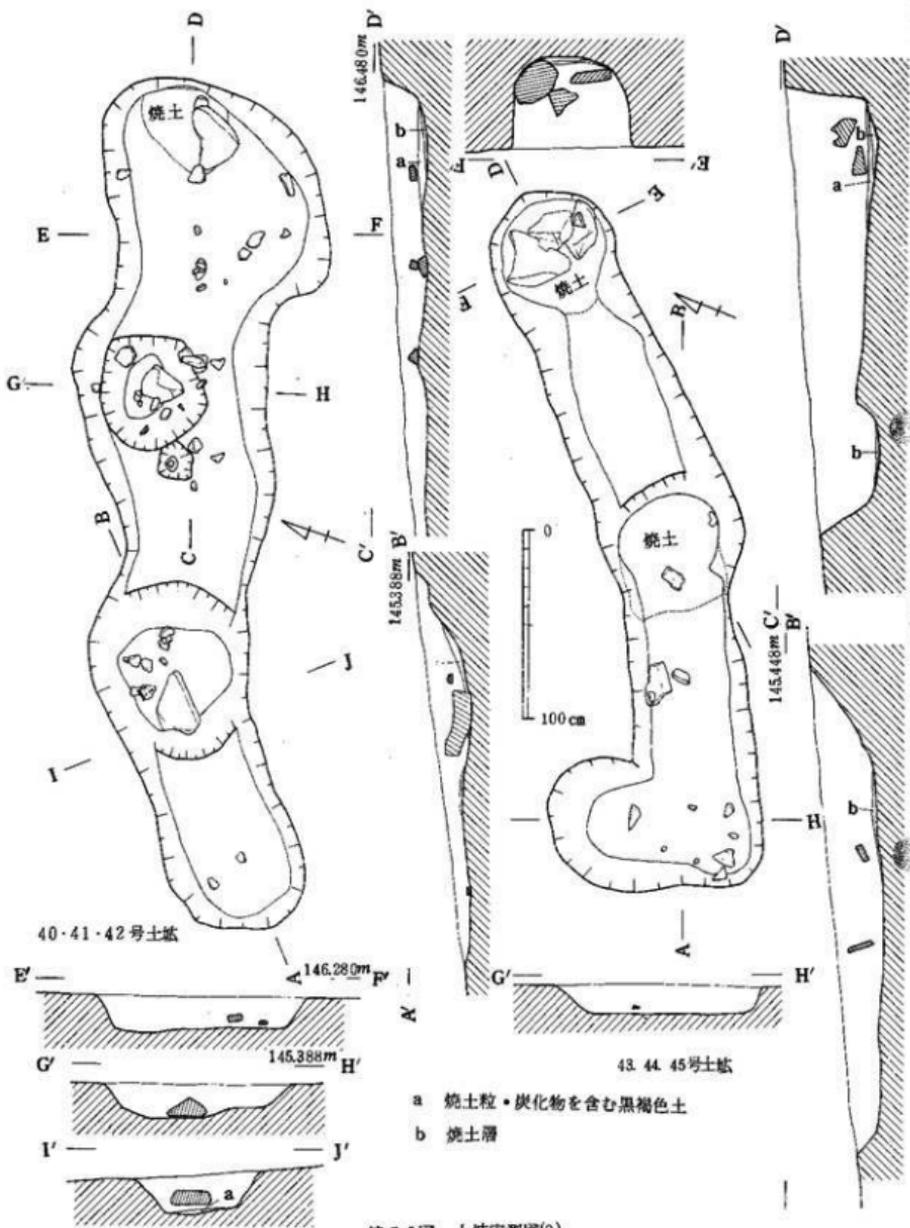
a 烧土粒·炭化物を含む黑褐色土  
 b 烧土层



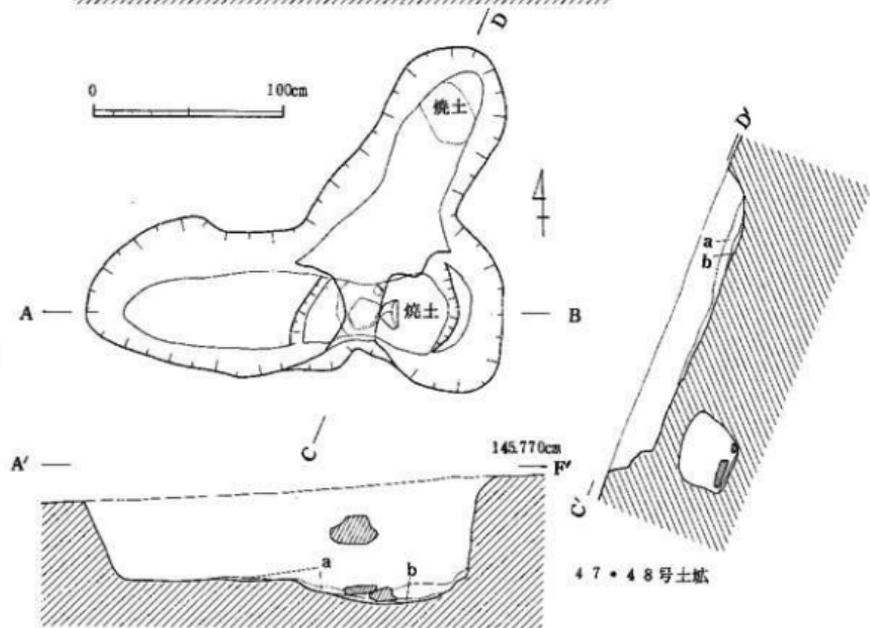
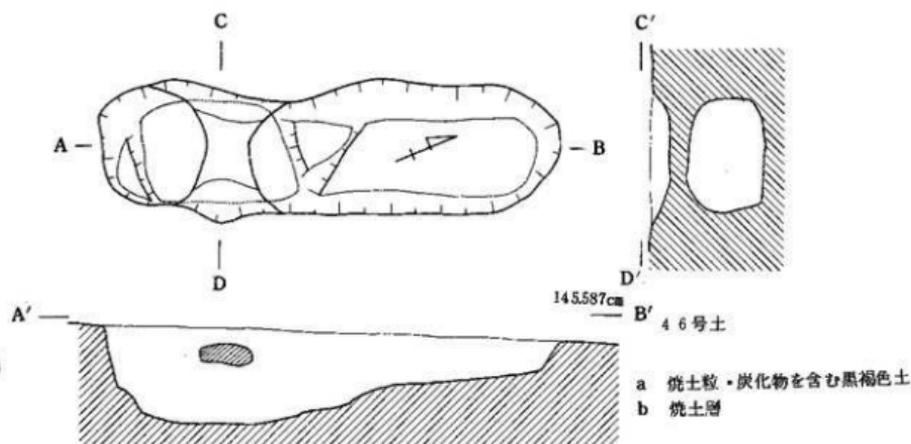
第73图 土城实例图(7)



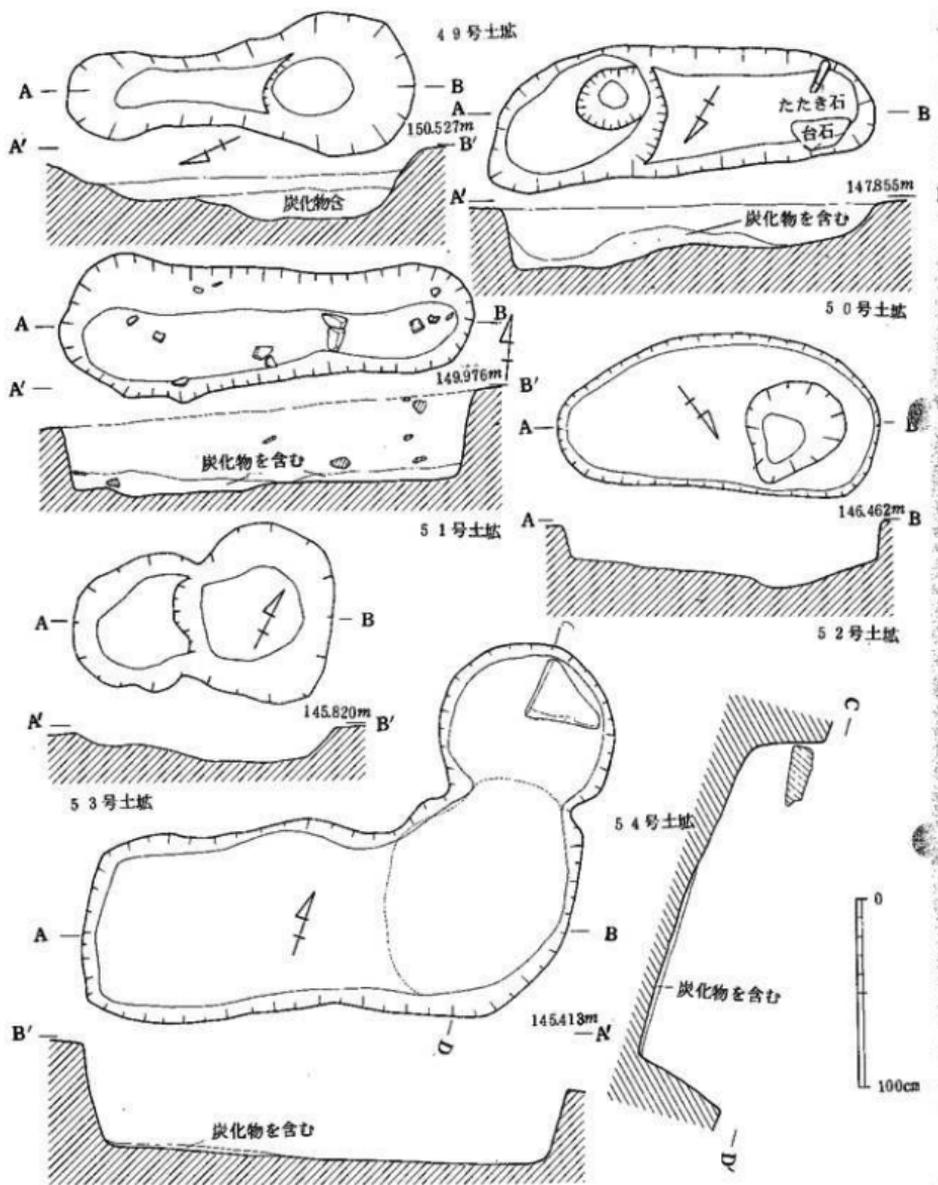
第74图 土坑实测图(8)



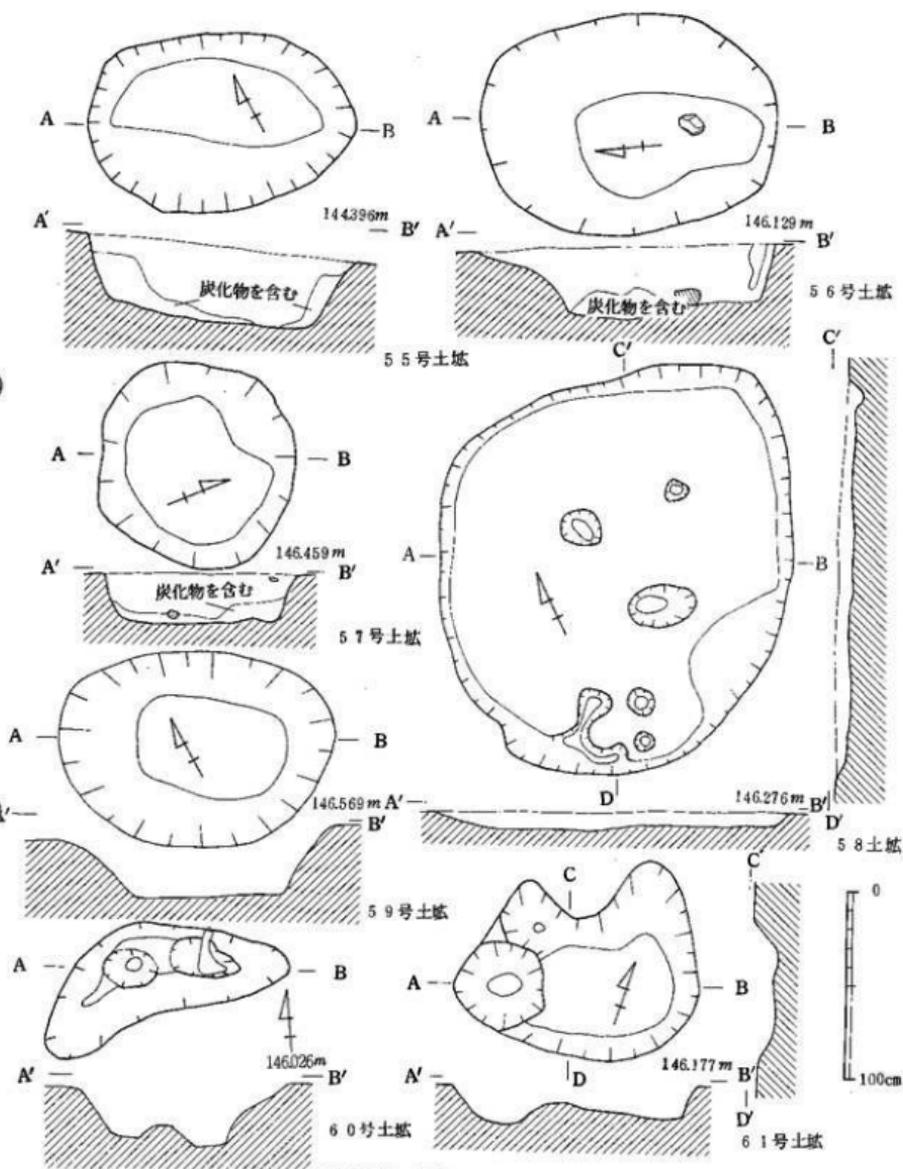
第75图 土坑实测图(9)



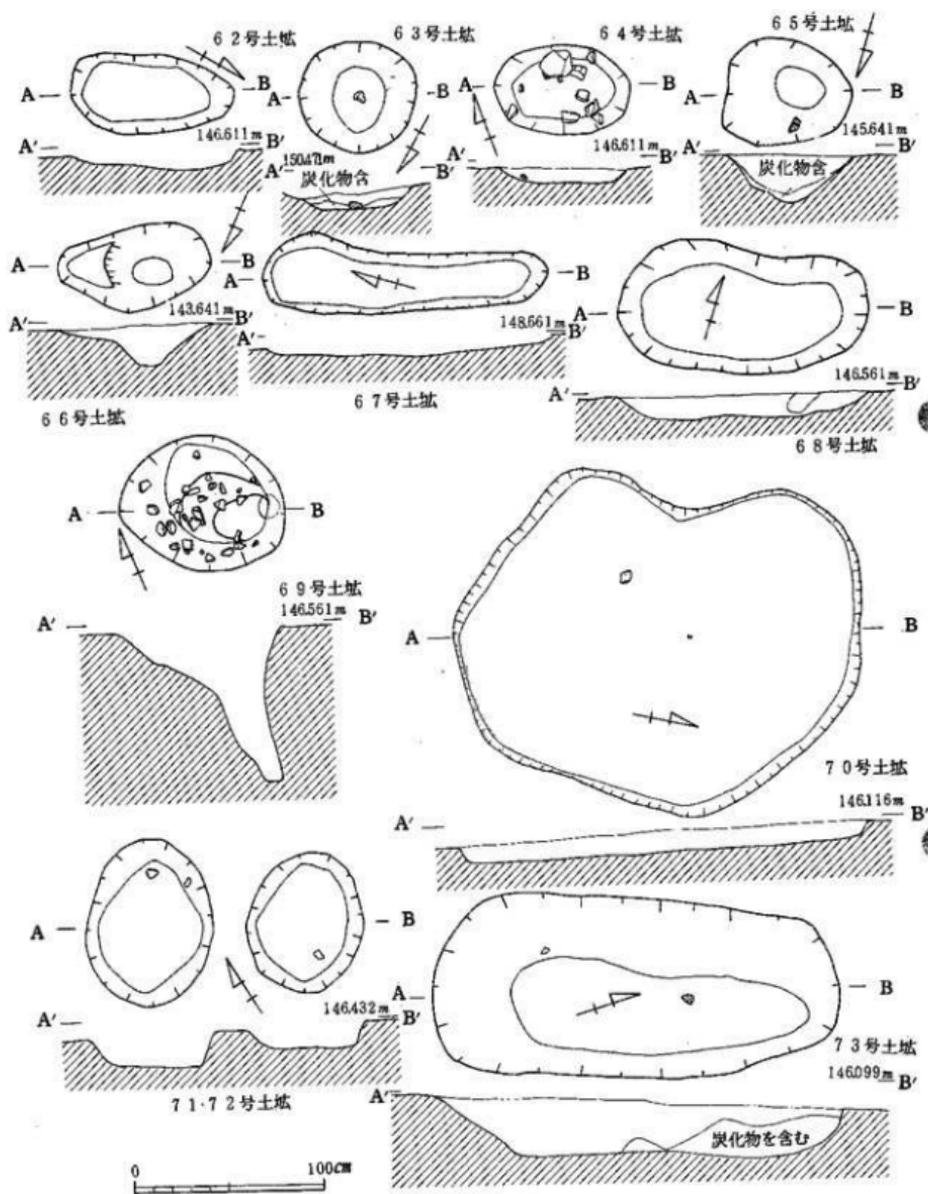
第76圖 土坑実測圖(10)



第77圖 土坑実測圖(11)

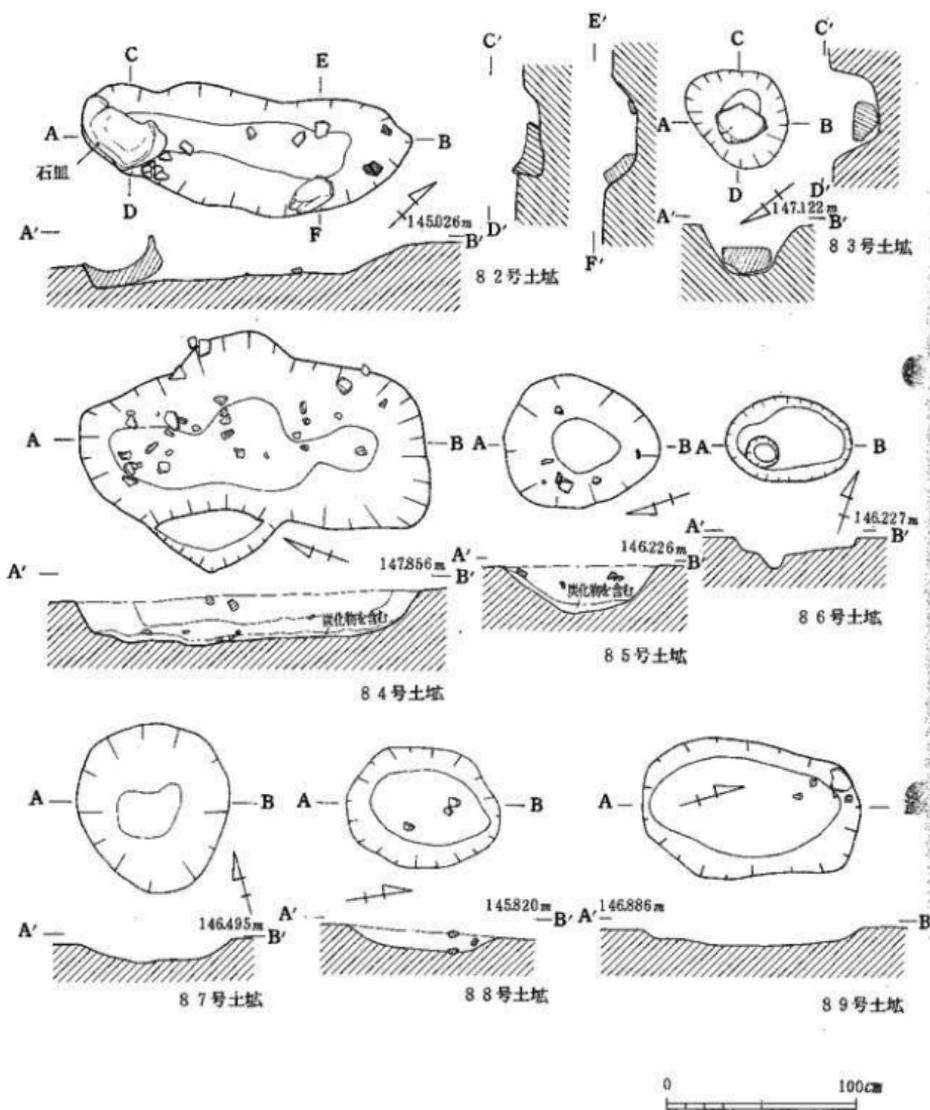


第78图 土坑实测图(12)

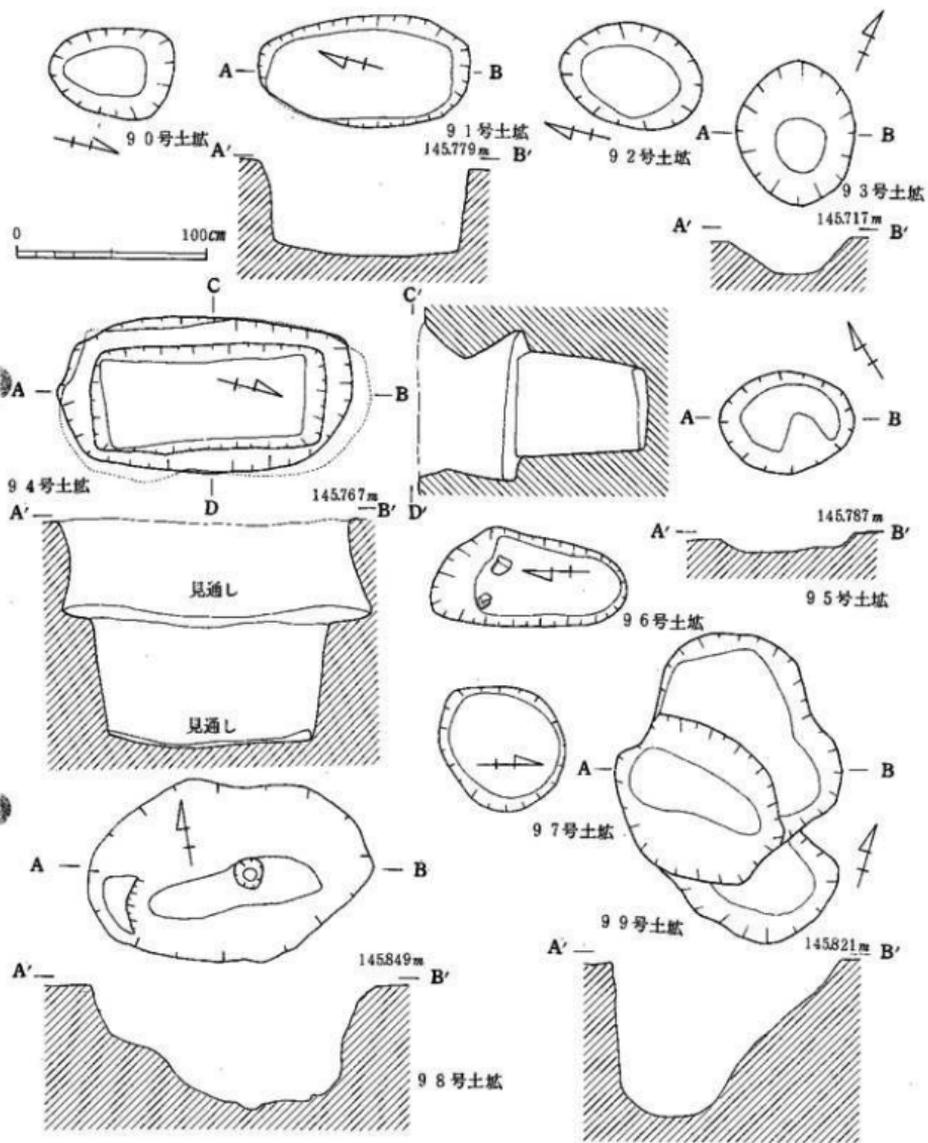


第79图 土坑实测图(3)

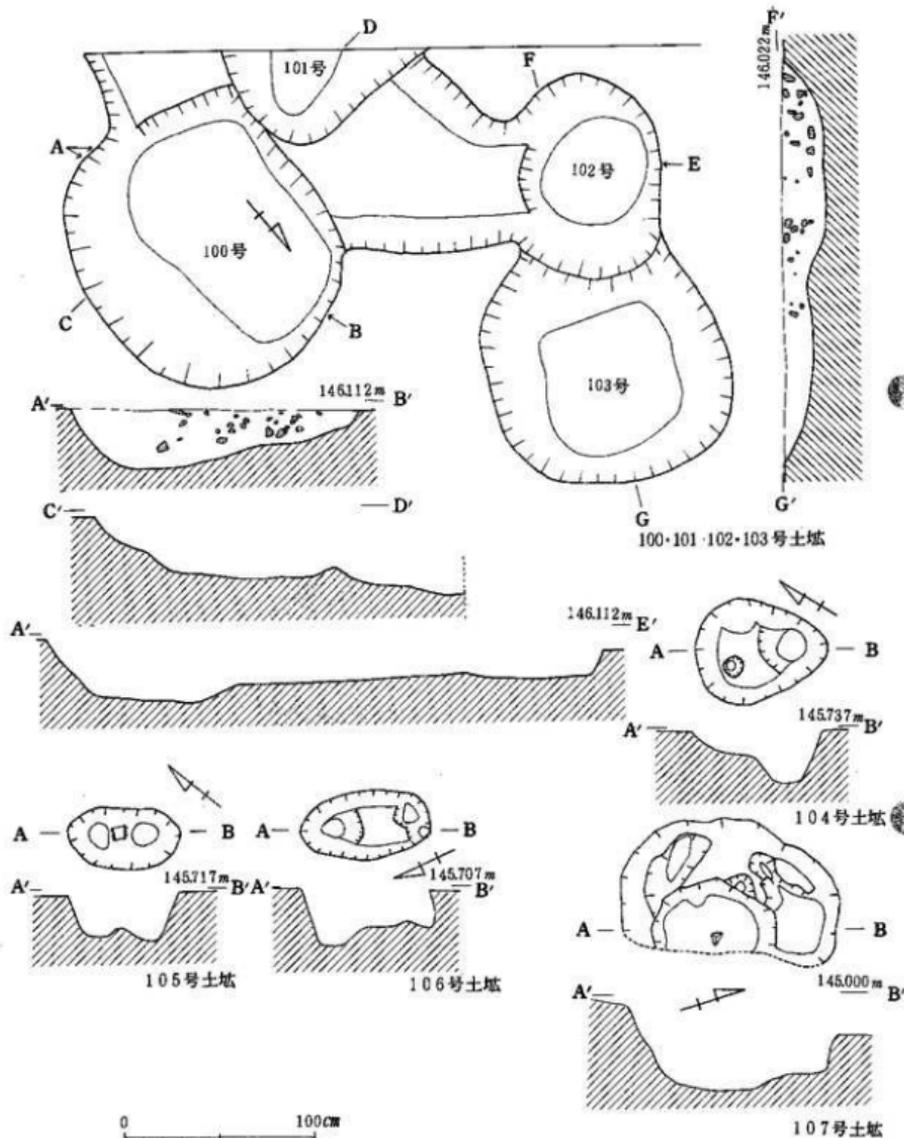




第 8 1 图 土城实测图 09



第82圖 土城実測図(9)



第83图 土坑实测图07

と47号の2基であり、47号はI型土坑と切り合っている。この切合い状況からみるとII型土坑よりI型土坑のほうが新しくなっている。従って本遺跡の遺構に伴う土器群は鹿児島県加来山遺跡のそれより新しいものと考えられる。

分布としては、I型土坑はC・D・E・F-2・3・4区の緩斜面に分布域があり、等高線にほぼ直交する状態で検出された。さらにその他の発掘区周辺部のI型土坑も、東側の平坦な台地上に凹部を向ける状態で検出されている。またII型土坑の46号のみは、西側の小丘陵へ凹部を向けており、西側の小丘陵上にまた1つの遺構群があることが推定される。その他、土坑の分布の特徴としては、B・C-5・6区に土坑の集中地域がほぼ円形状に存在していることがあげられる。

#### 住居跡(第84・85図)

1号住居跡 長軸2.9m、短軸1.85mの隅丸形状を呈し、長軸線はほぼ南北方向である。深さは15cm前後ではほぼ一定し、床面も平坦である。垣土は第IV層の黒褐色土であるが、僅かに炭化物を含む。住居跡内には6基、住居跡外に2基のピットが検出された。1号住居跡内で出土した遺物は、同一個体と思われるⅧ-C'類の角筒の破片が4点出土した。

2号住居跡 2.5m×2.4mの隅丸形状を呈する。中心部が26cmと最も深く、壁面に近づくにつれて緩やかに浅くなり、壁際では20cm前後の深さとなる。ピットは29基検出されたが、29号ピットも含めてほぼ五角形の住穴構造が想定される。住居跡内で出土した土器はⅤ-6類の破片が3点出土している。

#### 遺物

##### 土器(第86~96図)

縄文時代の包含層である第IV層中では多型式の土器が混在して出土したので、包含層中での層位的な前後関係の把握は困難であった。そのため、出土した土器を文様・器形等からI~Ⅷ類に大別し、平面的なまとまりを示す土器型式については平面分布図を作成した。

##### I類 押型文土器

I a-口縁部が外反し、山形口縁を呈する。外面は横位の山形文、内面は凹線文と横位の山形押型文を施文する。(1~3)

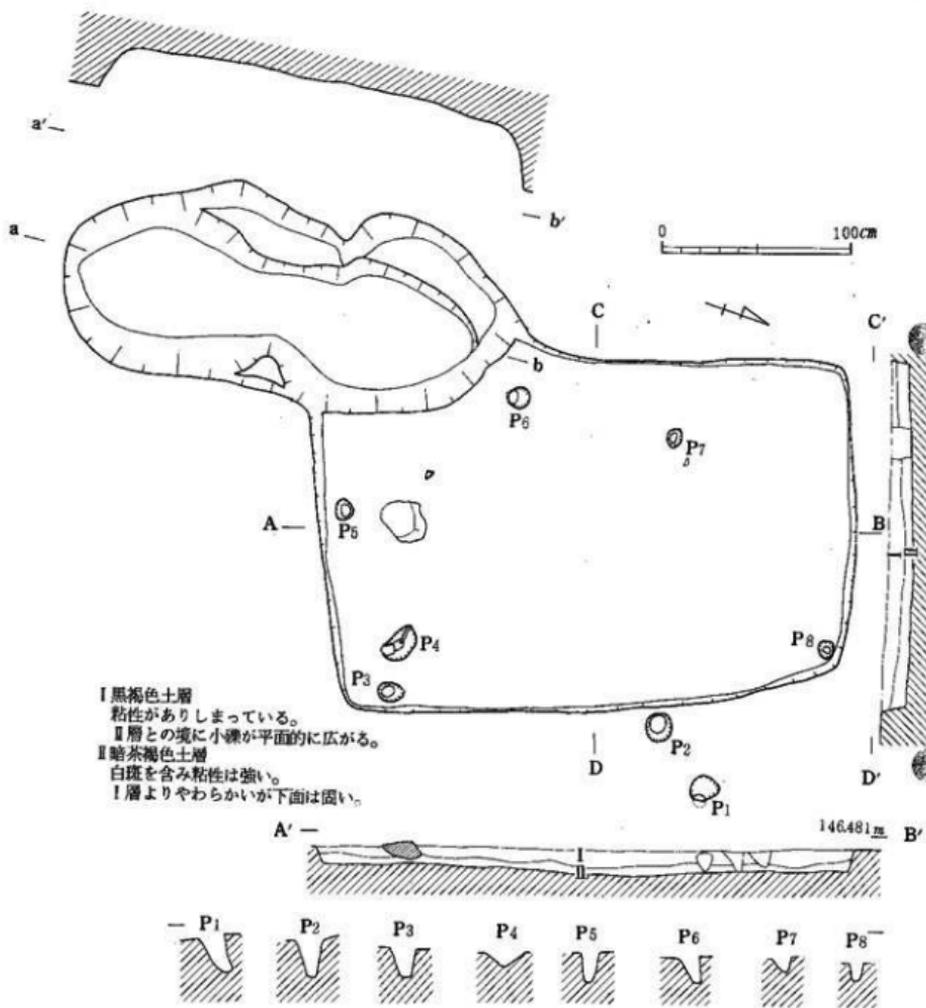
I b-口縁部が外傾し口唇部が平坦。外面は横位の山形文で内面は凹線文と横位の山形文。(4)

I c-口縁部が肥厚し、口唇部は内傾する。外面に山形文を縦位に施文。(5)

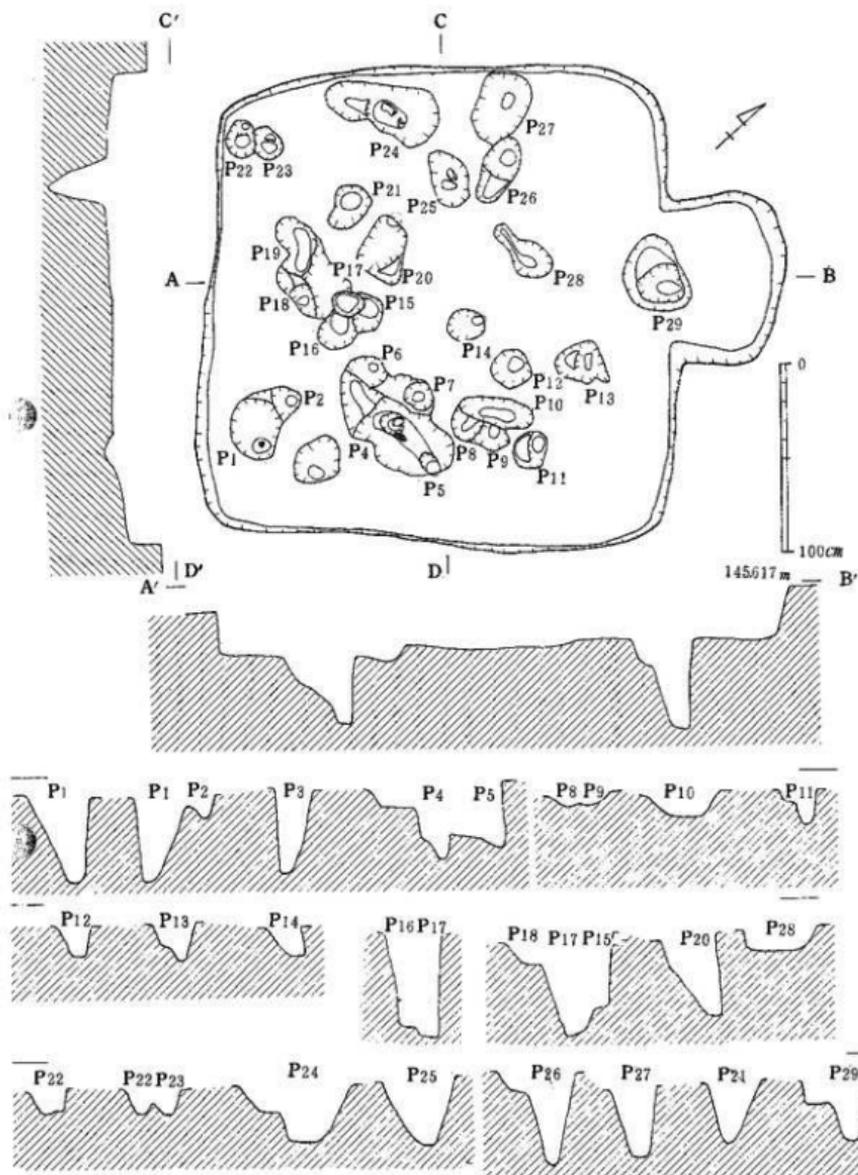
##### Ⅱ類 手向山式土器(口縁部が外反し、胴部に屈曲部を有する)

Ⅱ a-外面は横位に凹線文、内面と口唇部は山形押型文を施文。(7・8)

Ⅱ b-外面は縦位の間延びた押型文と屈曲部上位の凹線文を施文。口縁部内面と口唇部にも山



第84図 1号住居跡実測図



第 8 5 图 2 号住居跡実測図

形押型文を施文。(9・10)

II c-外面は微隆起線(みみずばれ)文、口唇部は山形押型文を施文。屈曲部に刻目を有する貼付け突帯。(11・12)

III類 貝殻条痕文を有する円筒平底で、条痕が浅く角筒が伴わない。

III a-口縁部にヘラによる刺突文。(13・18)

III a'-口縁部にヘラによる沈線文。(16)

III b-口縁部に貝殻による波状文またはその類似文。(14・20・22)

III b'-口縁部に貝殻頂部の押圧文。(21)

III c-口縁部に貝殻腹縁による引き掻き文。(15)

III d-口縁部に貝殻腹縁による連続押圧文。(17・28)

III e-口縁部に貝殻腹縁による押し引き文。(19)

III f-貝殻条痕文のみで口縁部文様なし。(23・29)

IV類 貝殻条痕文を有し、口縁部から口唇部にかけて施文、円筒平底を呈する。

IV a-施文が羽状を呈する。

IV b-押圧文を交互に施文。(34)

IV b'-IV b類の角筒。(26)

V類 貝殻条痕文が荒く、内面もケズリ調整で角筒を伴う。

V a-口縁部の押圧施文が1段のみ。(31)

V b-口縁部の文様が羽状または類似文。(30・33)

V c-ヘラと貝殻による2段の押し引き文。(35)

V c'-V c類の角筒。(24・25)

V d-口縁部に押し引き文、胴部に沈線文を有する角筒。(27)

VI類 貝殻腹縁の連続押圧文と条痕文を有し、クサビを有しない。

VI a-貝殻条痕文の地文の上に口縁部は横位に、胴部は縦位に間隔をあけて施文。(37・38)

VI b-VI a類の角筒で胴部は菱形類似文。(67)

VII類 口縁部にのみ貝殻腹縁連続押圧文を施文し、胴部は貝殻条痕文のみでクサビ形貼り付け突帯を有する円筒平底。(39~47)

VIII類 クサビ形貼り付け突帯を有し、胴部にも貝殻腹縁連続押圧文をもつ。

VIII a-地文となる貝殻条痕文が縦位。(49・57・59)

VIII a'-VIII a類の角筒。(66)

Ⅷb-貝殻腹縁連続押印文が縦位。(48・52・58)

Ⅷb'-Ⅷb類の角筒。(61)

Ⅷc-貝殻腹縁連続押印文がY字状を呈する。(50・51・56)

Ⅷc'-Ⅷc類の角筒(62・64・65・68)

Ⅷd-クサビ形貼り付け突帯が丸みを帯びた特異な形態。(55)

Ⅷe-貝殻腹縁の押印文ではなく、引き抜きによって長方形の文様を施文。(54)

Ⅸ類 クサビ形貼り付け突帯が密接し、地文は横位の貝殻腹縁押し引き文。(58)

X類 燃糸文を施文する壺形土器。(72)

XI類 円筒平底で外面にヘラ描きの綾杉文を施文する。

XIa-ヘラ状施文具によって口縁部は横位に、胴部は縦位に間隔あけて施文。(73)

XIb-ヘラ状施文具によって外面全面に密集して横位に施文。(76・77)

XII類 口縁部が内湾する円筒平底で貝殻によって施文。

XIIa-1単位3cm程度の貝殻腹縁刺突文を間隔をあけて横位に施文。(74・75)

XIIb-1単位4～5条の短い貝殻条痕文を斜位に不定方向に施文。(78)

XIII類 平格式土器(口縁部が肥厚した山形口縁を有する円筒平底)

XIIIa-頸部に貼り付け刻目突帯、胴部に縄文を施文。(79・89)

XIIIb-頸部に貼り付け刻目突帯、胴部に沈線・刺突文による幾可学文様を施文。(80・81)

XIIIc-頸部は無文。肥厚部に幾可学的凹線文。(82)

XIV類 底部

a-平底で胴部へ外傾する。

b-平底で胴部へ直行する。

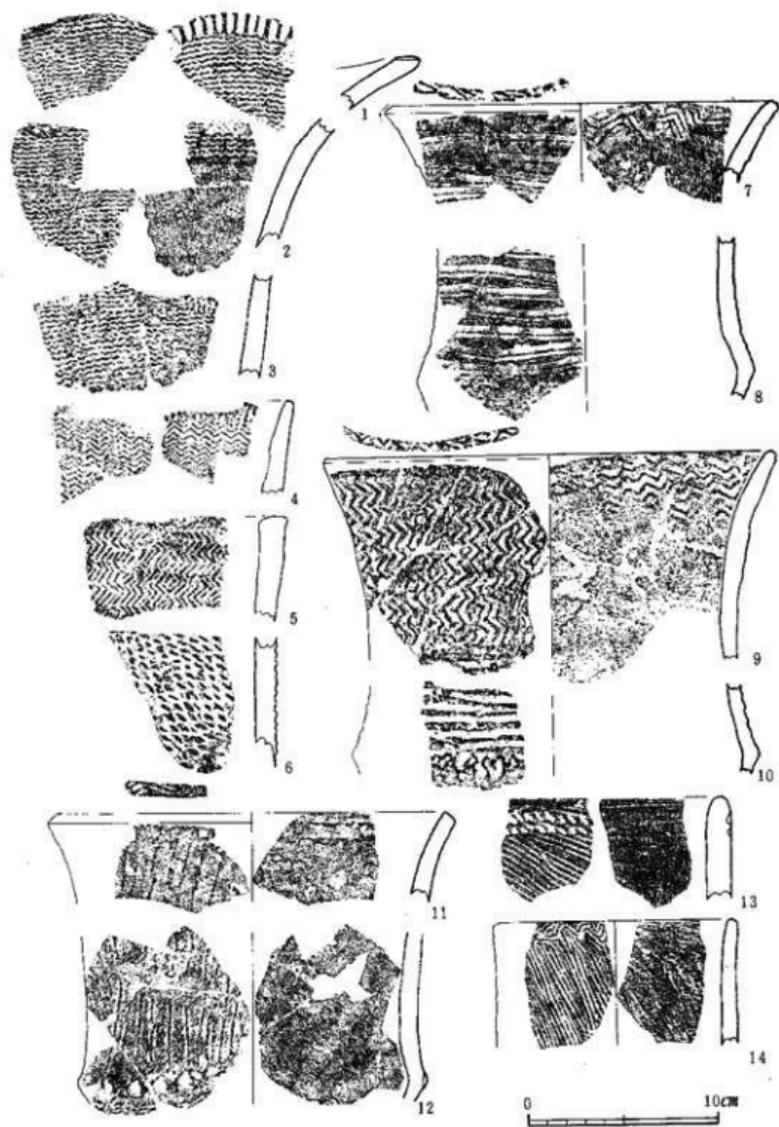
c-あげ底状の平底で胴部へ外傾する。

d-底面に葉脈痕を有する。

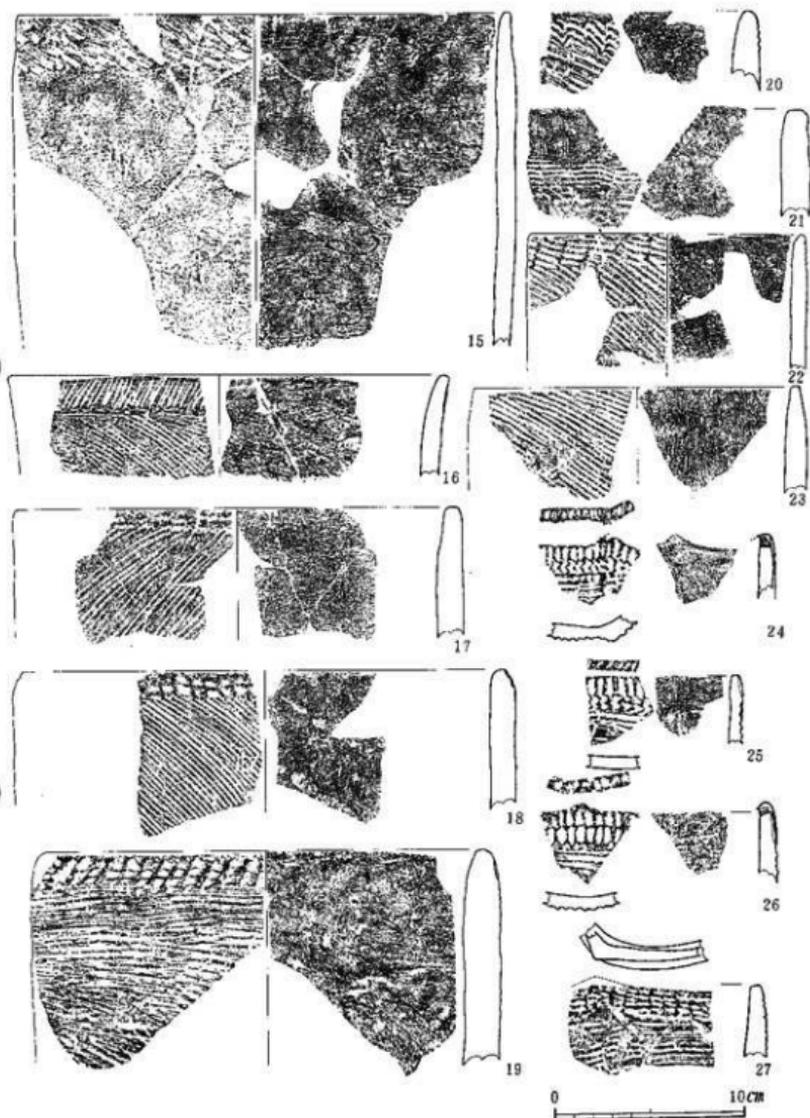
e-底面に網代状の格子目庄痕文を有する。

土器の分布(第97～99図)

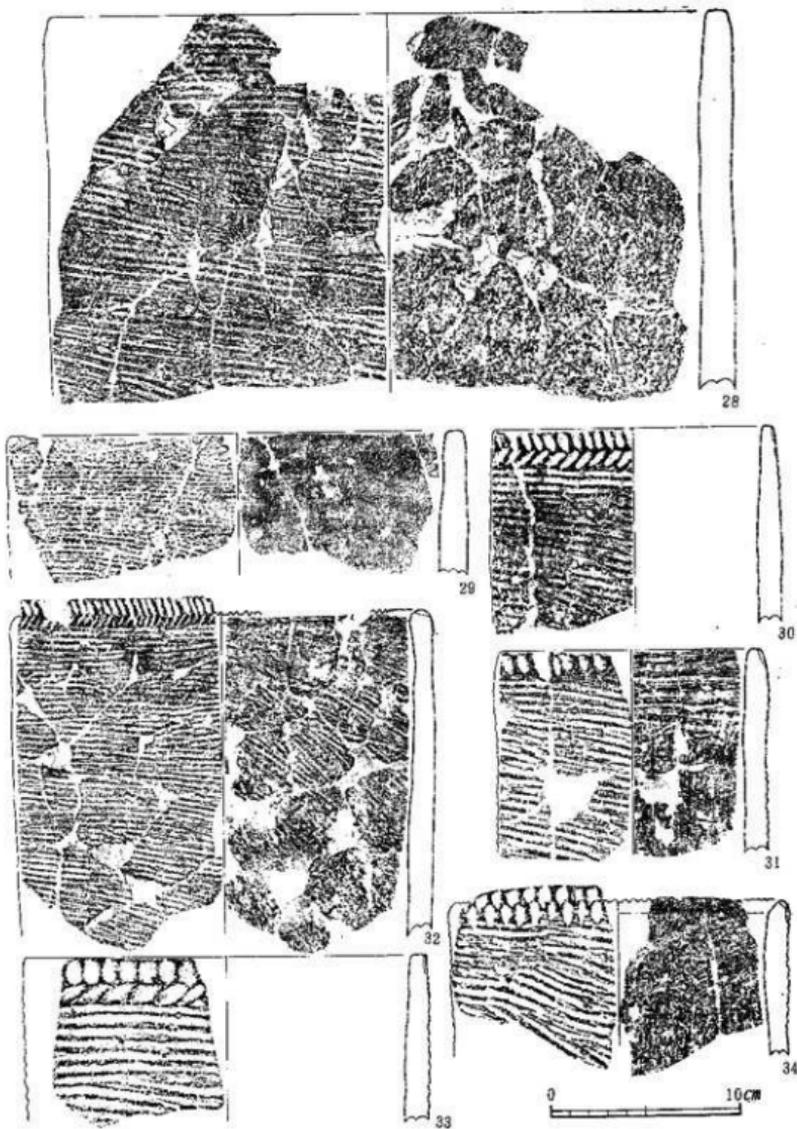
本遺跡では多型式の上器が多量に出土したが、ある程度まとまりを持って分布する土器を平面分布図として示した。まとまりを持つものとしてはI類の押型文土器、II類の手向山式土器、X類の燃糸文土器、XI・XII類の円筒土器、第XIII類の平格式土器である。その他に分布図に取上げなかったが、IV・V類の角筒がA・B-4・5区に集中して出土し、XIVe類がC・D-1・2区にまとまった分布をする。その他の貝殻条痕文やクサビ形貼り付け突帯を有する土器は型式別の明確な分



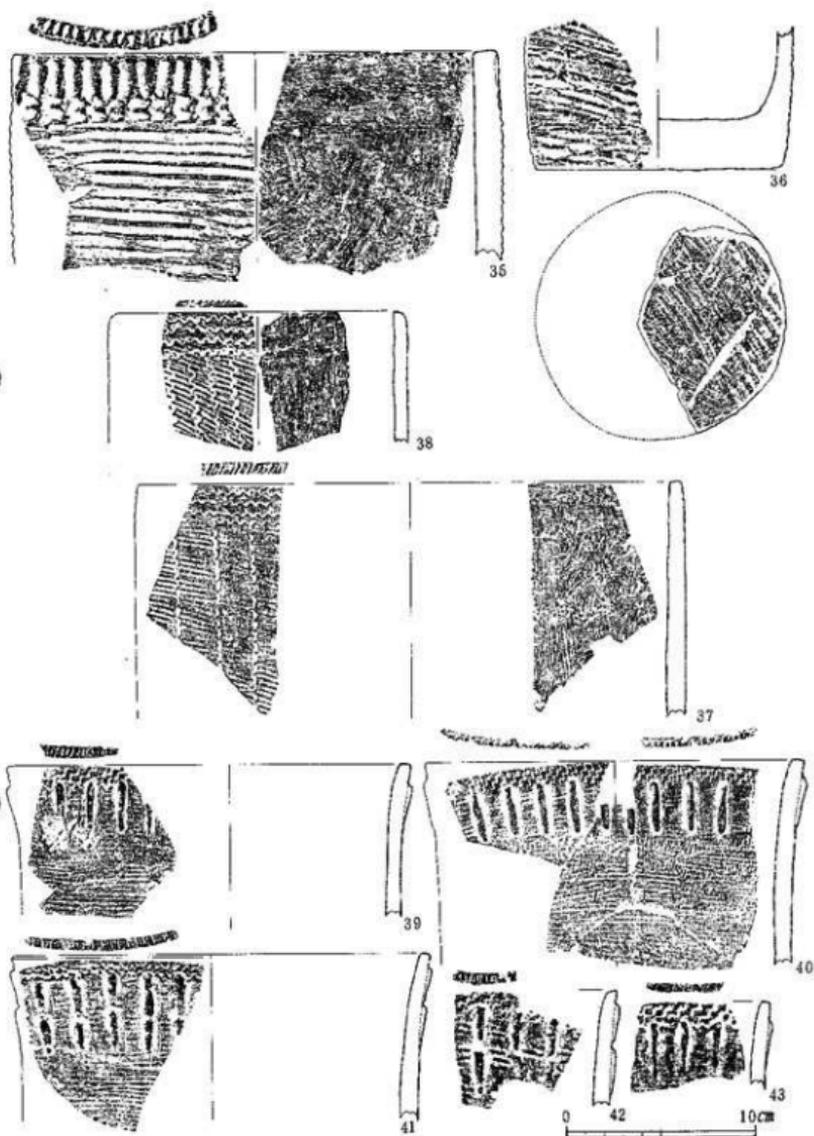
第 8 6 图 出土土器尖器图(1)



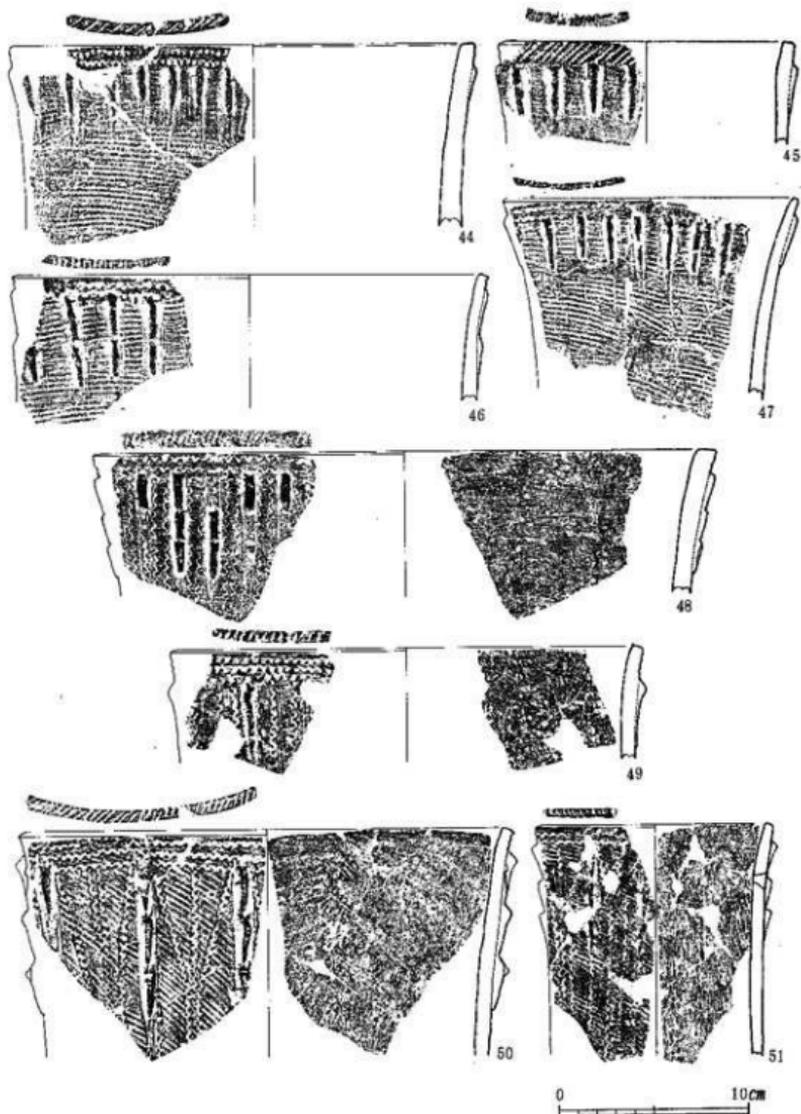
第 8 7 图 出土土器实测图(2)



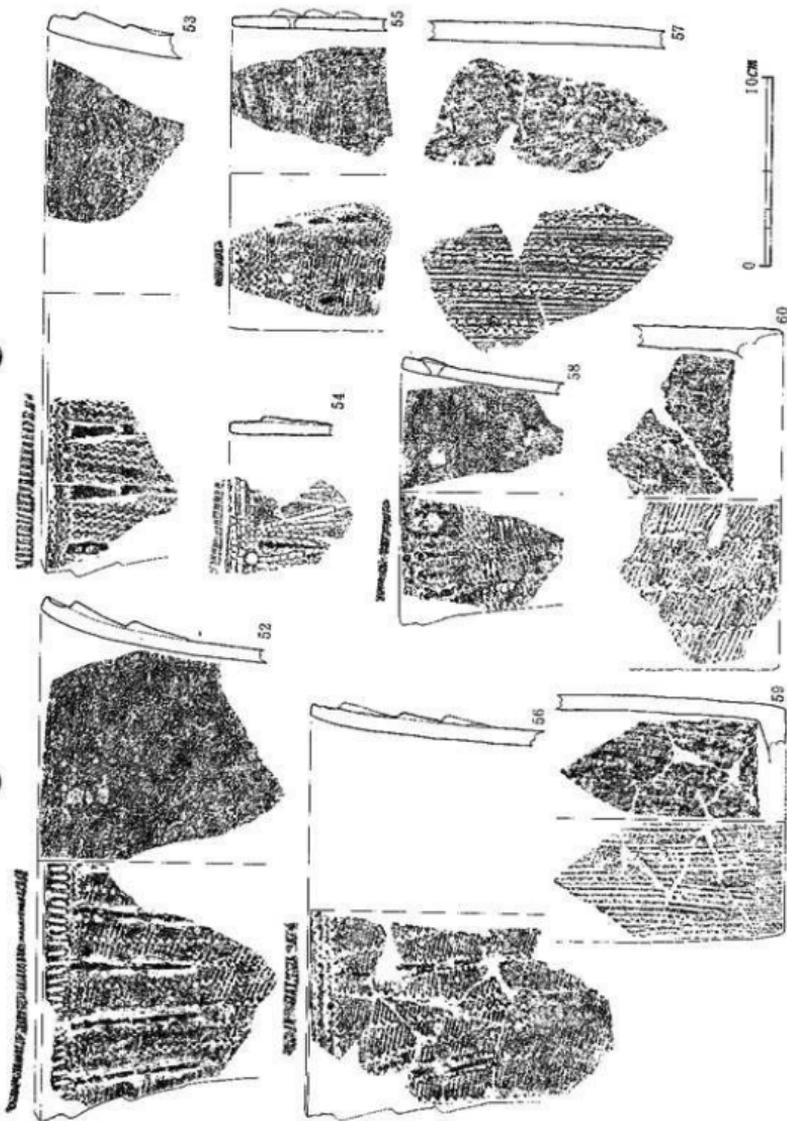
第 8 8 图 出土土器实测图(3)



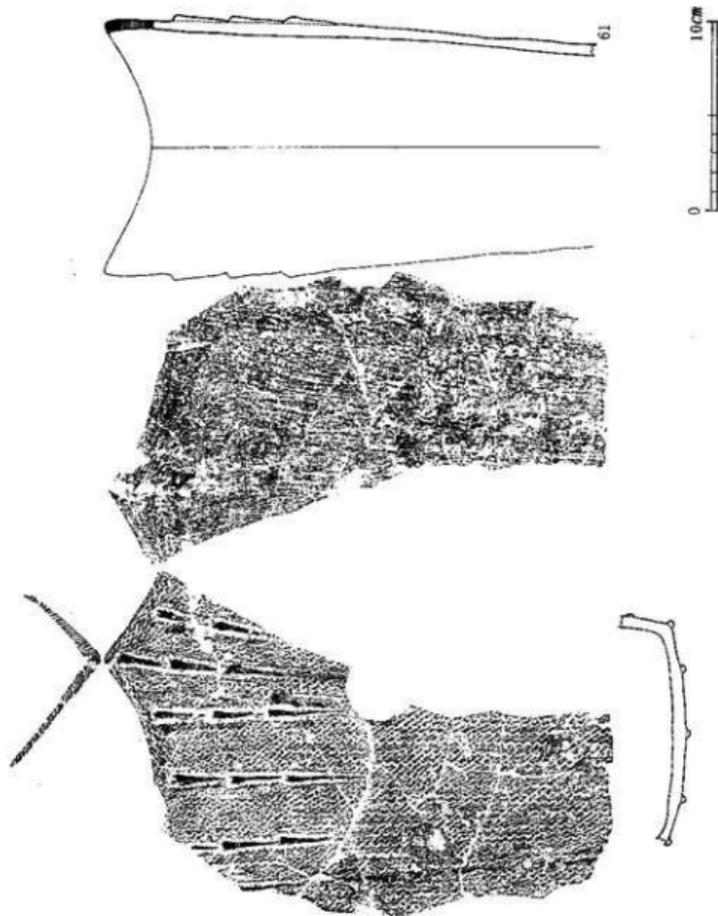
第 89 图 出土土器实测图 (4)



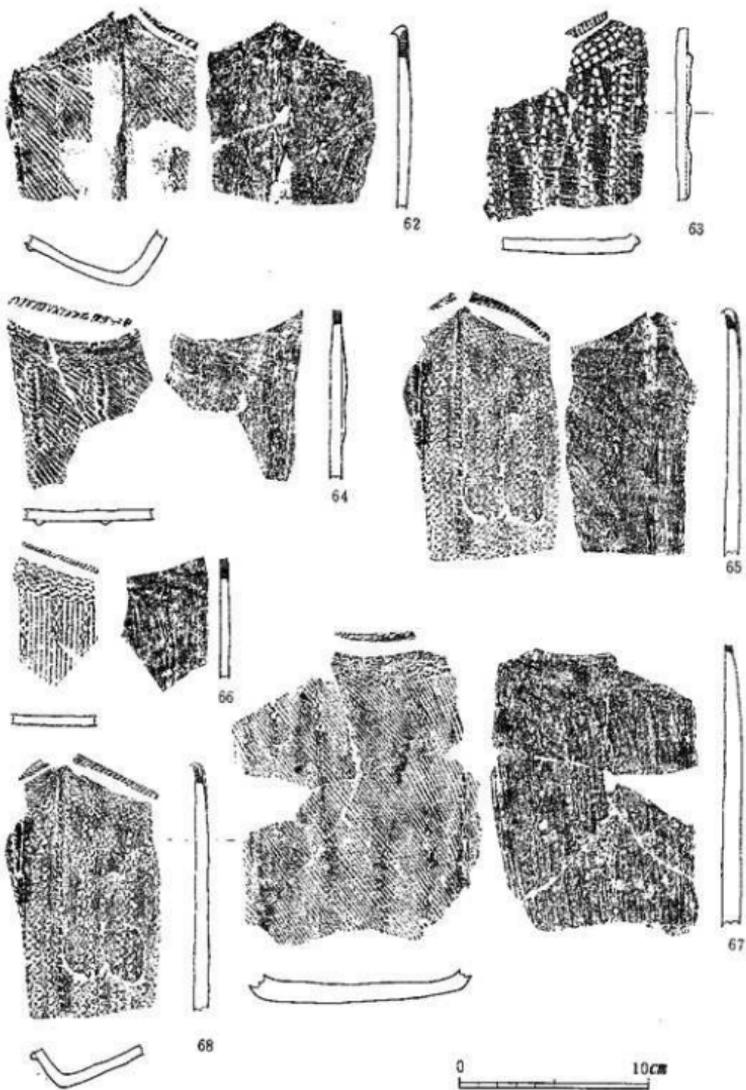
第90图 出土器实图(5)



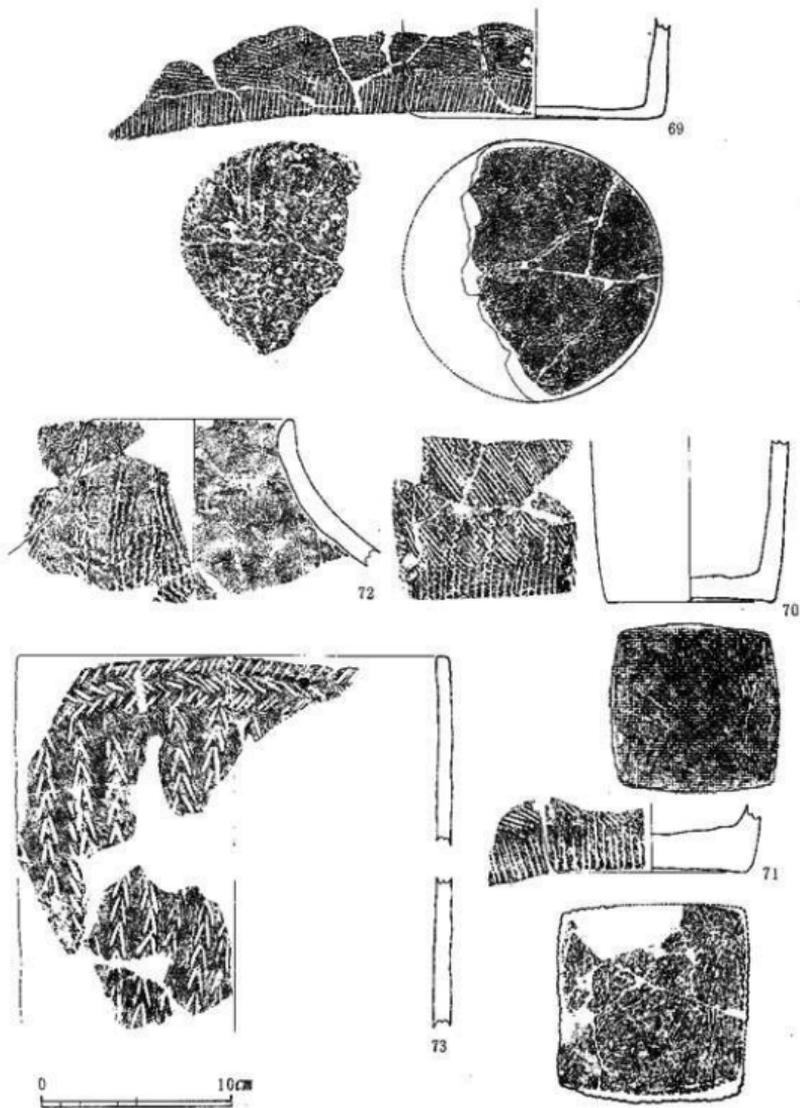
第 9 1 圖 出土器片圖 (C)



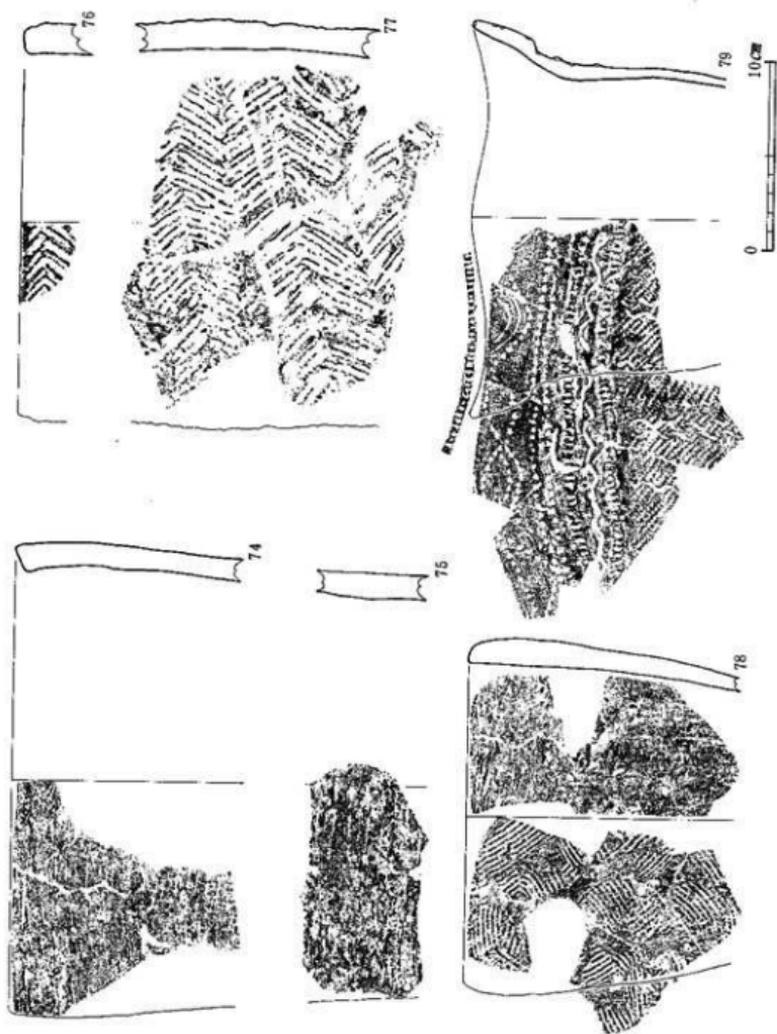
第92圖 出土器夾測區(7)



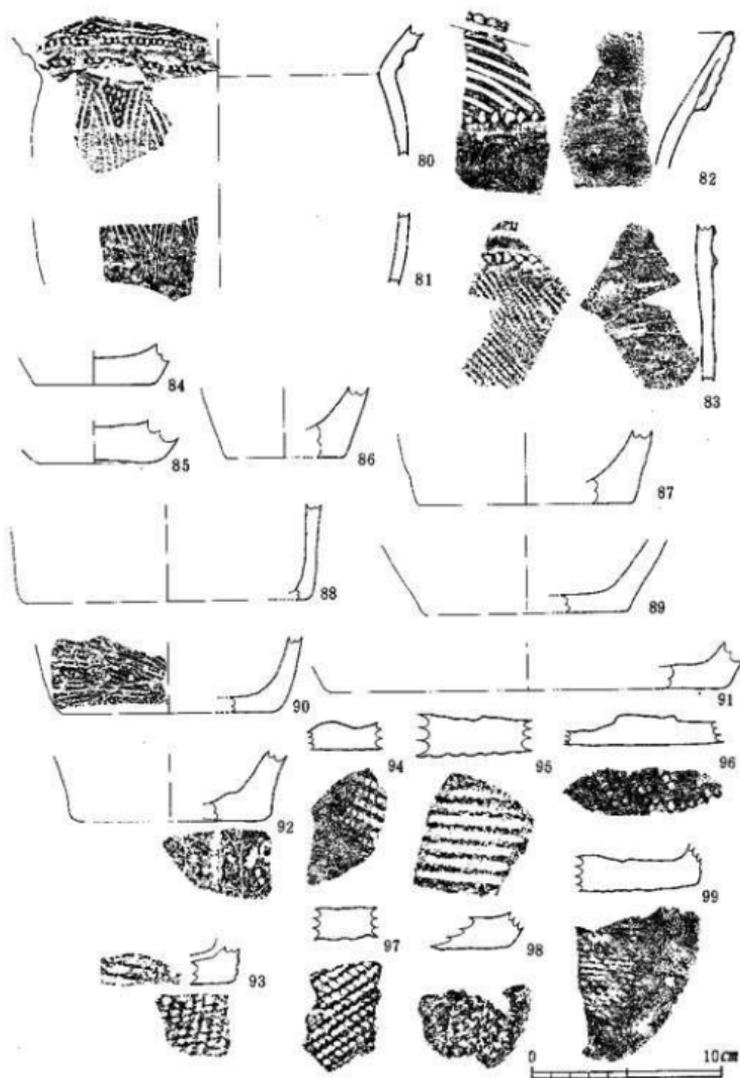
第 9 3 圖 出土土器実測圖(8)



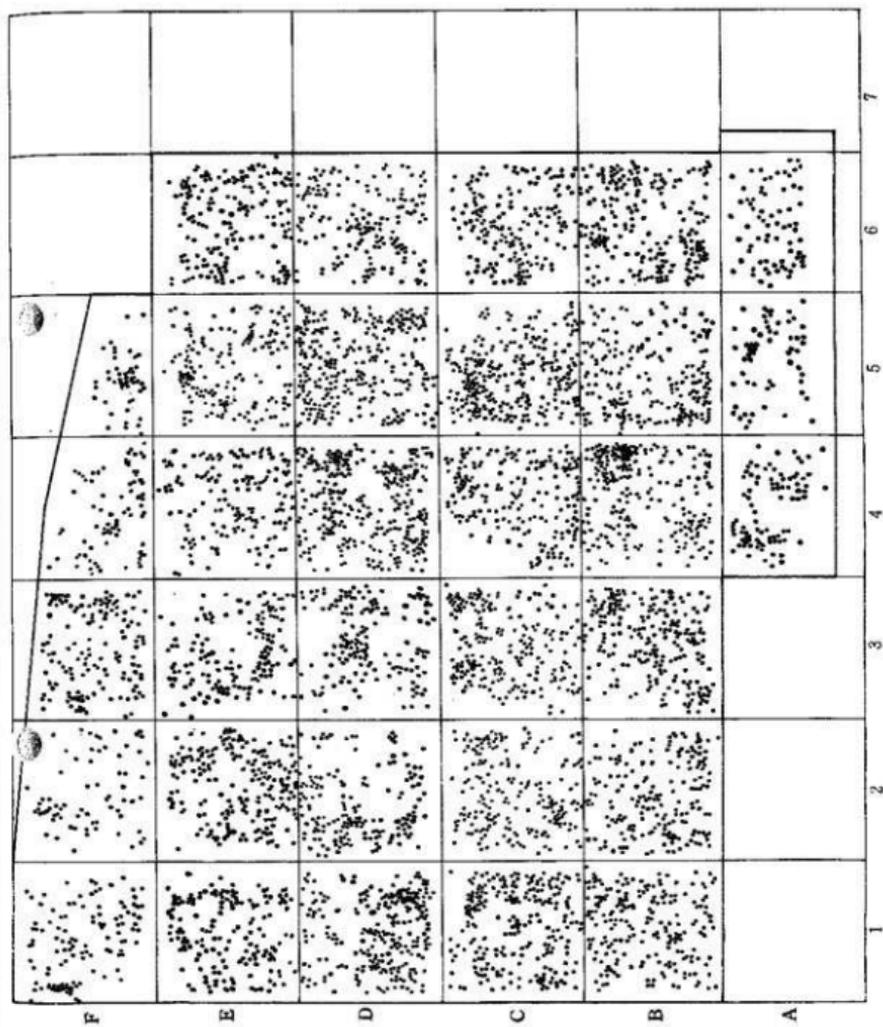
第94区 出土土器実測図(9)



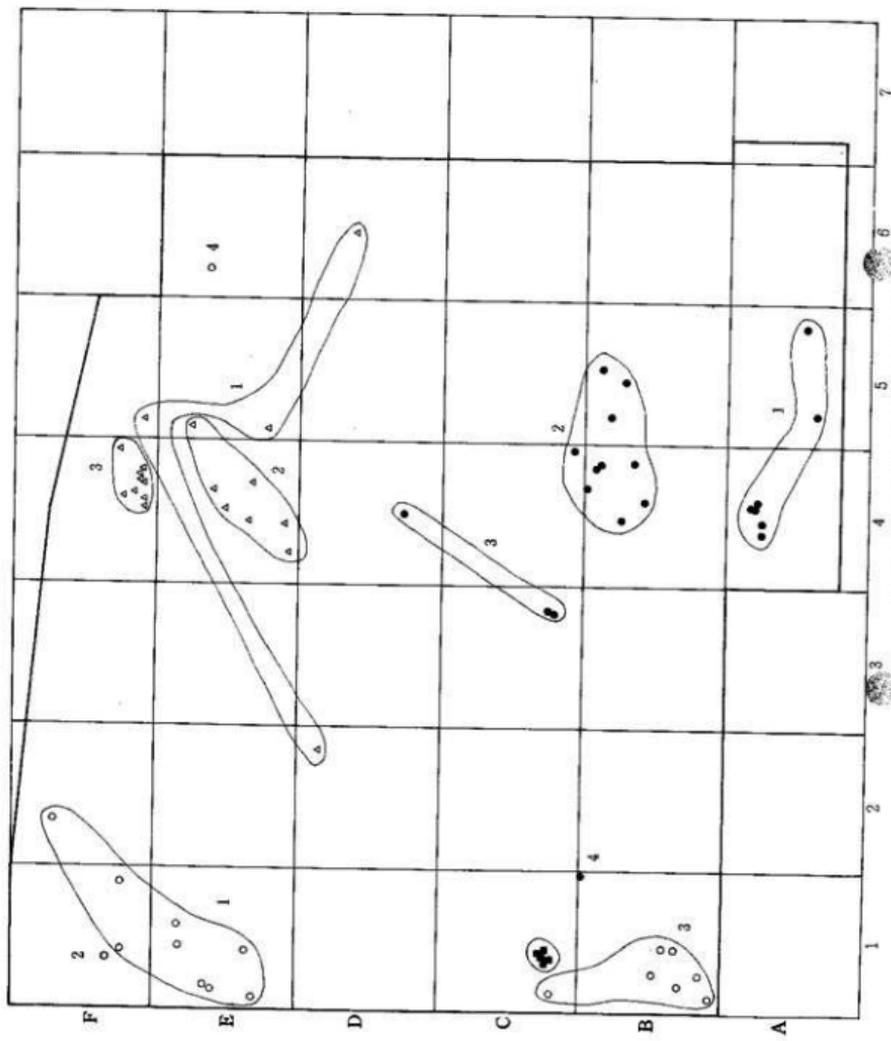
第 9 5 图 出土器类测图 (10)



第96图 出土土器实测图(11)



第97圖 全出土土器分布圖(1/400)

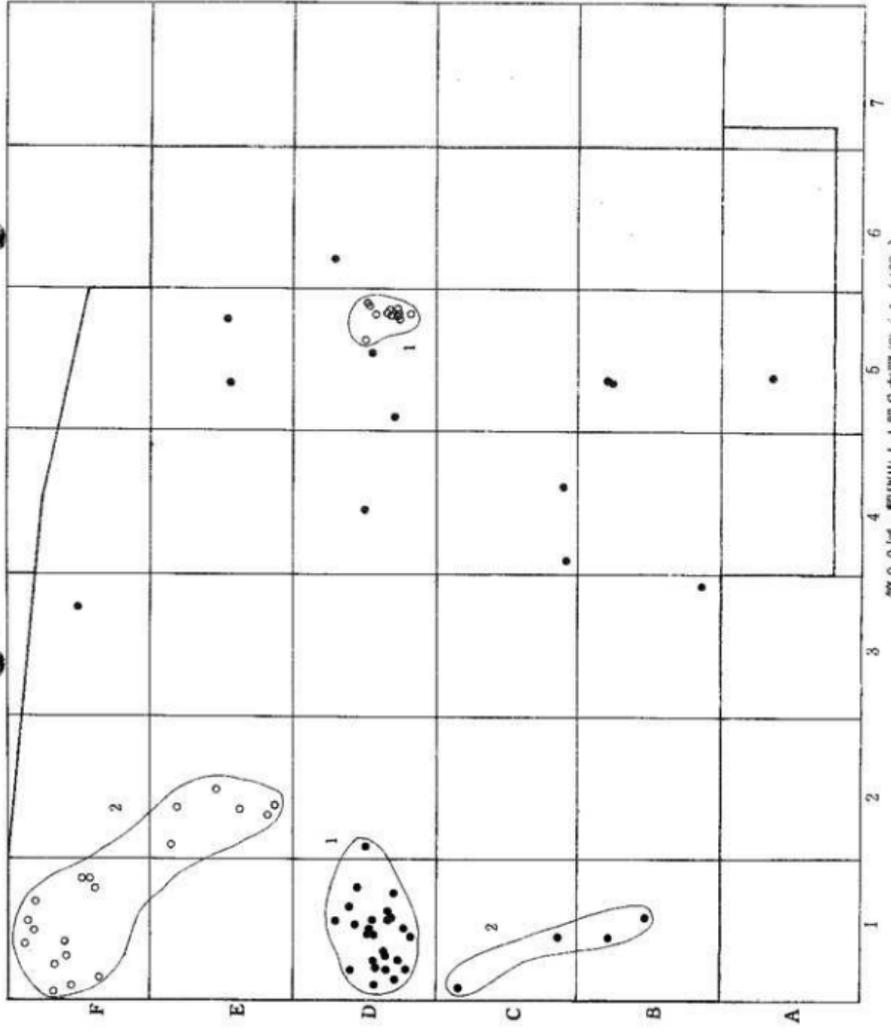


- 1 類
- 2 類
- 3 類
- 4 類
- △ 1 類
- △ 2 類
- △ 3 類
- 1 類
- 2 類
- 3 類
- 4 類
- 5 類
- 類

(類別(個体))

第 9 8 回 類別出土物分布圖 (1) (1/400)

- 1 XI-a類
- 2 XI-b類
- 1 XI-a類
- 2 XI-b類
- XI-b類(個体)



第 9 9 圖 類別出士分布圖 (2) (1/400)

布の差異は認められなかった。

#### 石器(第100~103図)

石器は、石鏃・尖頭状石器・搔器・磨製異形石器・局部磨製石斧・鏃器・砥石・磨石・叩石・凹石・石皿が出土している。

石鏃は67点出土しているが形態及び基部調整により次のように分類される。

I類 U字状の抉りを有するもの

I a-最大幅より最大長が大きい二等辺三角形形状を呈するもの。

I b-正三角形形状を呈するもの。

I c-両側辺が丸く張り出すもの。

I d-両側辺に鋸歯状刃部を有するもの。

I e-全体形が菱形形状を呈するもの。

II類 三角形又は円弧状の抉りを有するもの。

II a-最大幅より最大長が大きい二等辺三角形形状を呈するもの。

II b-正三角形形状を呈するもの。

III類 基部が外側に張り出す円基部を有するもの。

石材としては、姪島産9点を含む黒曜石製が29点、チャート製22点、サヌカイト製10点と多く、その他細粒砂岩・石英脈岩・メノウ等が素材として使用されている。

尖頭状石器は4点出土している。(69・70・78)表裏面より調整された刃部を有しており、断面はレンズ状を呈する。石材は全てサヌカイトであり、破折している。

搔器は2点出土している。(71・72)ほぼ円形を呈するもので2ヶ所に急角度の刃部調整が施されている。

局部磨製異形石器は5点出土している。(73~77)73~76は当初磨製石斧の破損部位と思われたが、77のように全面磨製のものもあり、さらに打面を研磨して刃部を作り出すなどの特徴より1種の切道具としての用途をもつ石器として分類した。素材としては粘板岩・細粒砂岩製の厚さ5mm前後の剥片を利用している。

石斧は局部磨製のもの8点が出土している。(68・79~85)79は装着用の抉り部を有しているのが特徴である。石材は玄武岩と砂岩を用いている。

鏃器は1点出土している。(86)片面は全面調整を施し、他面は原礫面を残して調整を施し刃部を作り出している。石材は黒色細粒砂岩である。

砥石も1点出土している。(87)砂岩の剥片を用い表面に3本の溝が残っている。

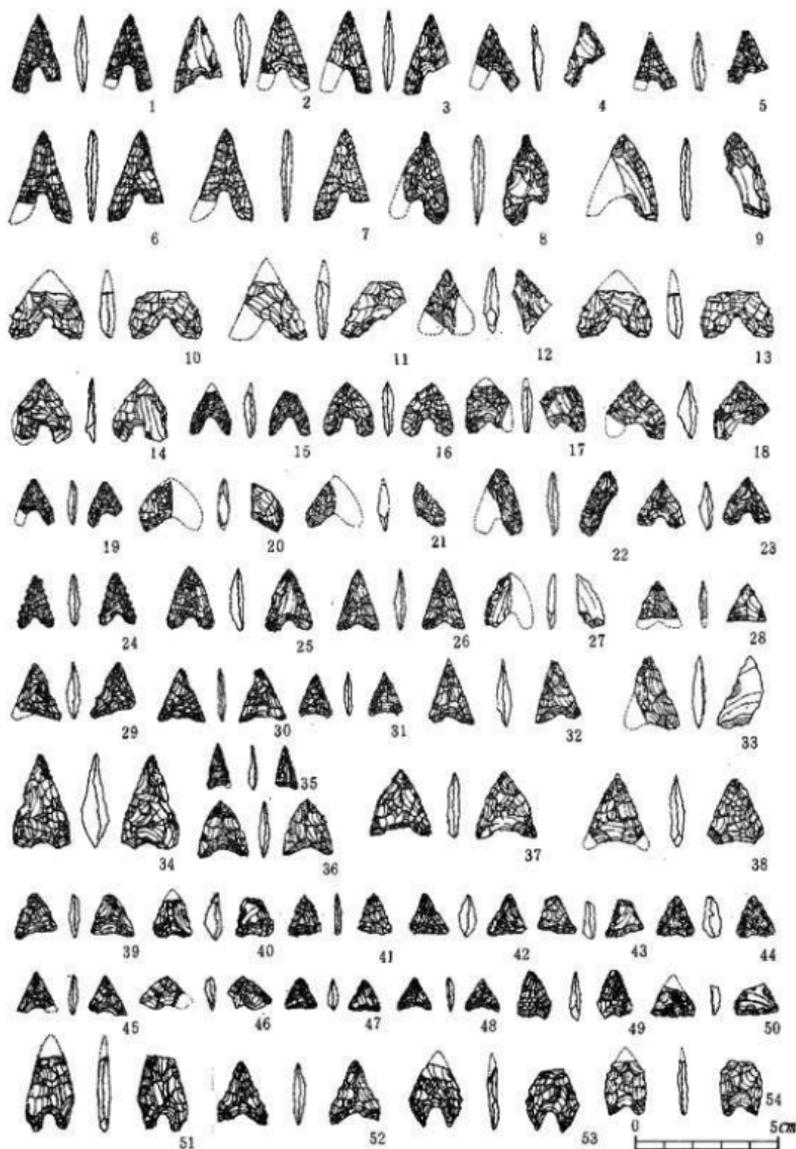
磨石は137点出土している。(88~93)

石材は砂岩が最も多く、その他安山岩・粘板岩・頁岩・流紋岩が利用されている。凹石は11点出土している。(94~96)ほとんど砂岩製である。

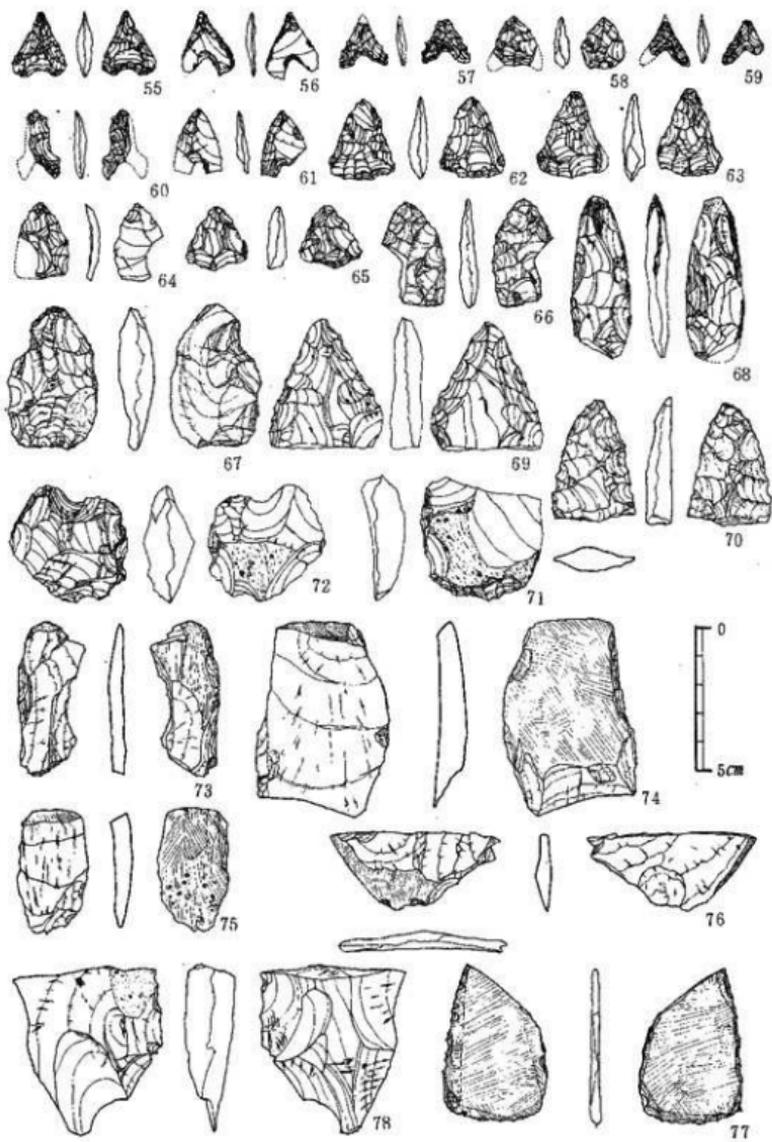
叩き石は16点出土している。(97・98)叩き石はほとんど磨石の転用であり、凹部を有するものも存在する。石材はほとんど砂岩である。

#### 石器の分布(第104図)

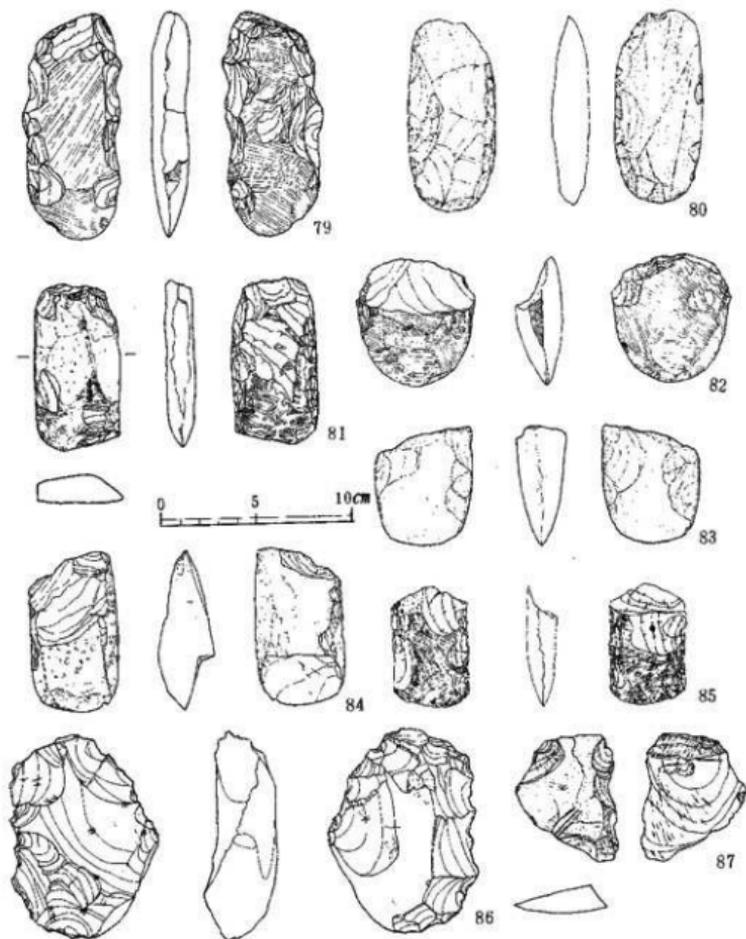
全体的な石器の分布としては、B・C-1区、E・F-1区、B・C-3区を除けばほとんど4・5区の安定した台地状に集中する。その他B・C-2・3Eに磨石等のみ分布していることも特徴とされる。



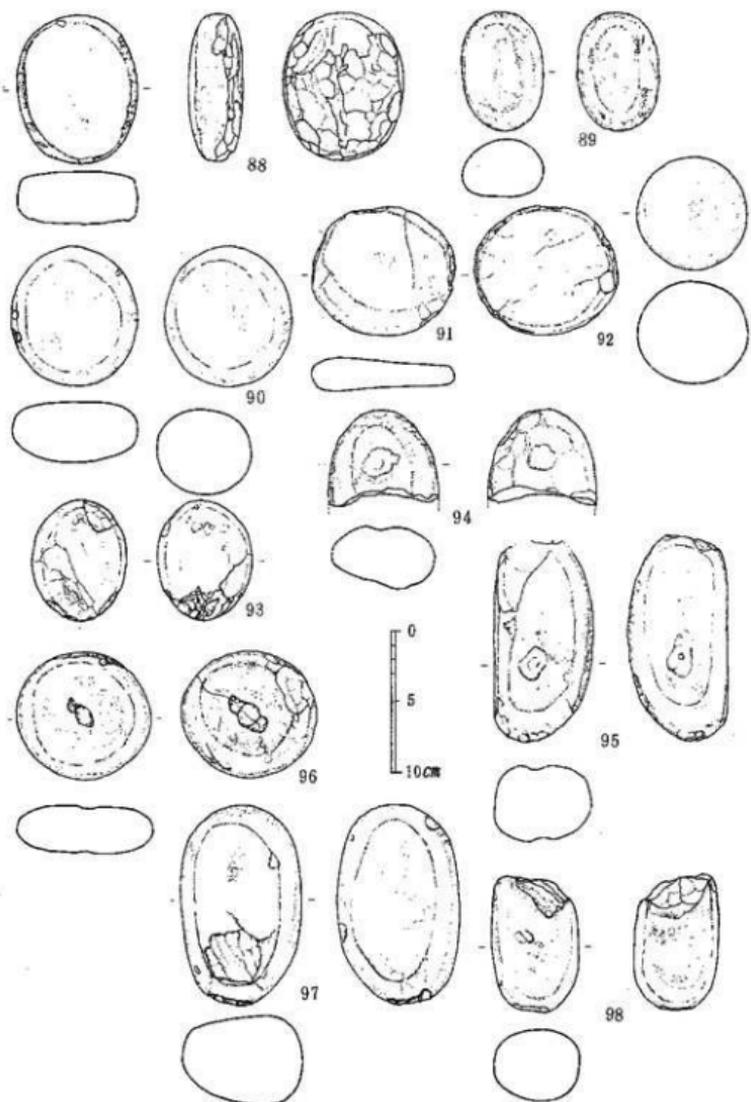
第 100 图 出土石器尖测图(1)



第101圖 出土石器实测图(2)

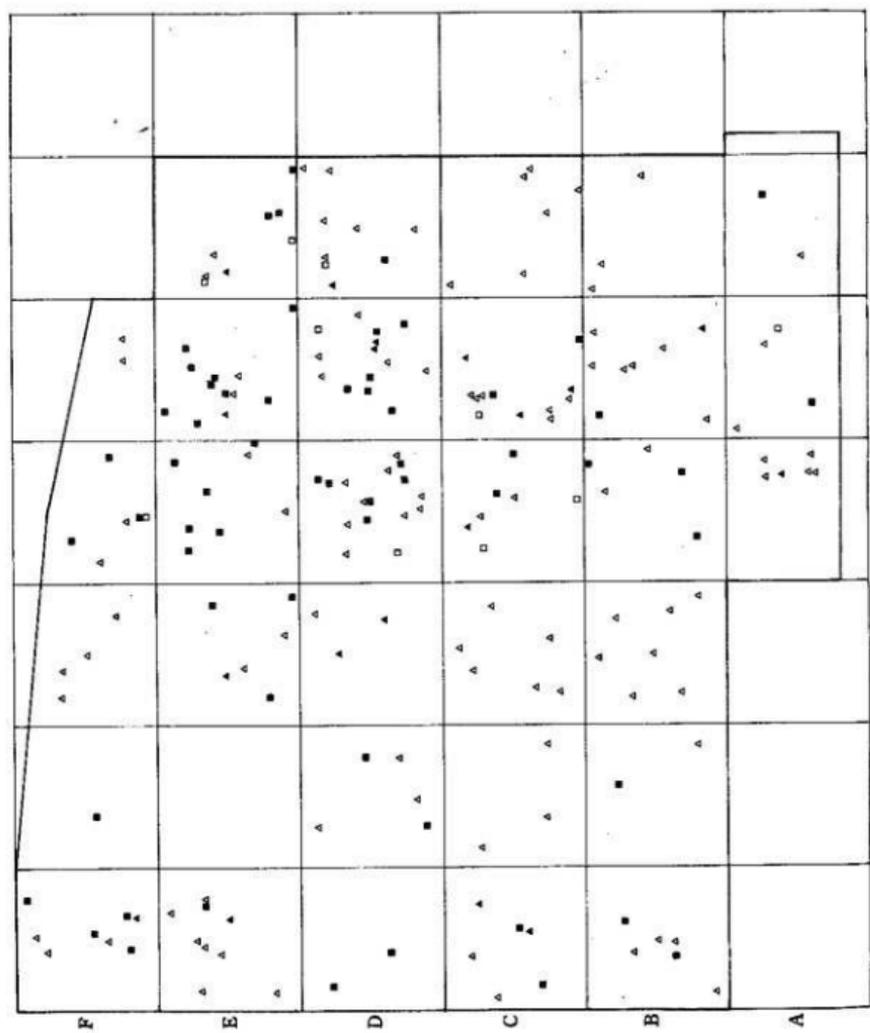


第 1 0 2 图 出土石器实例图(3)



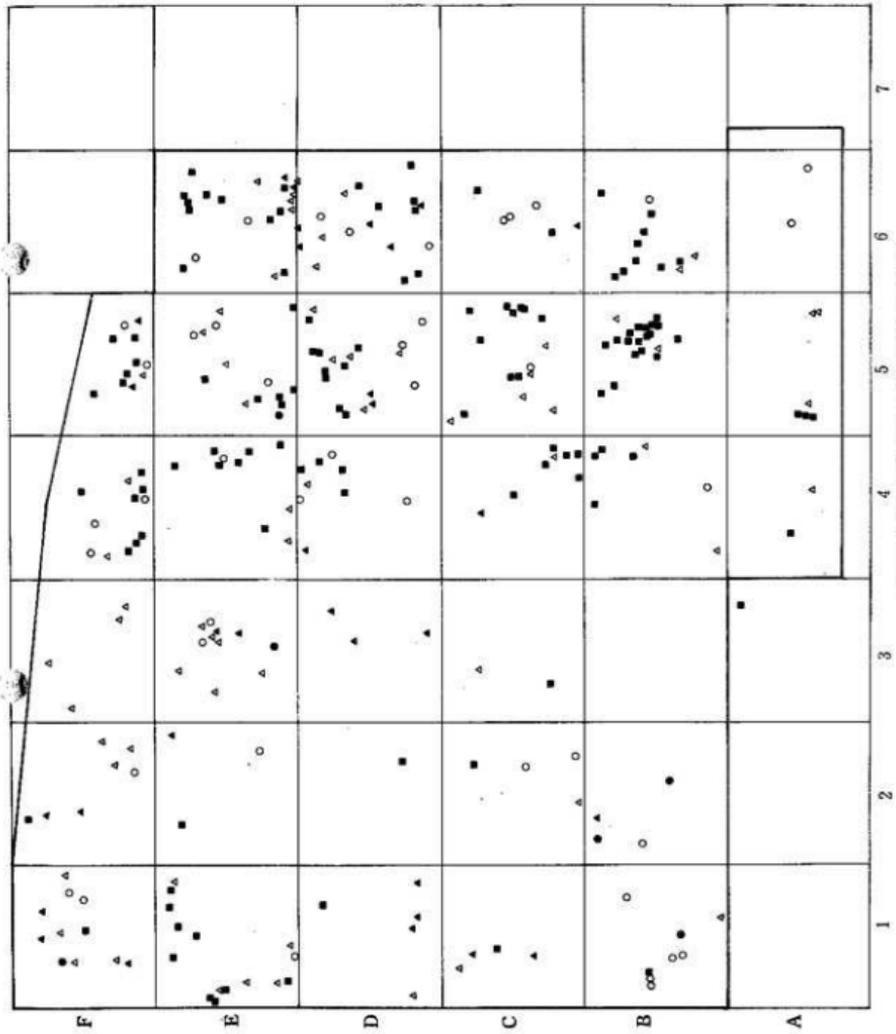
第 1 0 3 图 出土石器实测图(4)

■ 石炭  
 □ 石片  
 ▲ 尖頭狀石器  
 ● 磨石



第 1 0 4 區 出土石器分布圖

花崗石  
 花崗石 (花崗斑)  
 チャート  
 砂岩  
 その他 (安山岩・輝綠岩)



第105図 石材別チャップ分布図 (1/400)

## 第7章 年代測定の結果

前平地区の調査においては、自然科学的調査として花粉分析、熱ルミネッセンス法による年代測定、 $C^{14}$ による年代測定を行った。年代測定結果は次のとおりである。熱ルミネッセンス法については、前平地区遺跡群内での比較検討を行なうため、昭和58年に調査が行なわれ寡ノ神式土器を多量に出土した又五郎遺跡の資料も測定している。その他、広島大学理学部地質学鉱物学教室柴田喜太郎氏の御協力により札ノ元遺跡の土壌分析も行っているが、花粉分析の結果と合わせて芳ヶ追第1遺跡の概報で報告している。

### 第1節 熱ルミネッセンス法及びCによる年代測定結果

#### 1. 芳ヶ追・又五郎縄文遺跡と札ノ元旧石器遺跡の焼石の熱ルミネッセンス年代 (1)

奈良教育大学教授 市川米太

試料	蓄積線量 (ラド)	ベータ線量 (ラド)	ガンマ線量 (ラド)	熱ルミネッセンス年代	誤差 (%)
芳ヶ追No.1集石	2,890	0.240	0.088	8,810	5
又五郎集石(1)	2,250	0.180	0.088	8,390	11
〃 〃 (2)	2,860	0.265	0.088	8,100	6
札ノ元旧石器集石					
No.1 (1)	8,140	0.288	0.101	20,920	13
〃 (2)	8,230	0.264	0.101	22,540	8
〃 (3)	7,800	0.271	0.101	20,960	12

#### 1. 札ノ元と又五郎遺跡出土土器の熱ルミネッセンス年代 (2)

試料	蓄積線量 (ラド)	ベータ線量 (ラド)	ガンマ線量 (ラド)	熱ルミネッセンス年代 (年 B. P.)	誤差 (%)
札ノ元吉田式(1)	1,920	0.138	0.088	8,490	30
〃 〃 (2)	2,020	0.131	0.088	9,220	18
札ノ元前平式	1,980	0.130	0.088	9,080	19
又五郎吉田式(1)	2,260	0.142	0.088	9,820	14
〃 〃 (2)	1,400	0.141	0.088	6,110	16
又五郎前平式(1)	2,350	0.187	0.088	8,540	23
〃 〃 (2)	2,010	0.174	0.088	7,670	13
〃 〃 (3)	2,020	0.172	0.088	7,760	20
又五郎寡ノ神式(1)	1,610	0.142	0.088	7,000	9
〃 〃 (2)	2,080	0.214	0.088	6,880	8
〃 〃 (3)	2,170	0.244	0.088	6,530	5



## 第8章 結語

昭和58年度より昭和59年度にかけて実施した前平地区の発掘調査により検出された遺構は、旧石器時代の集石遺構、縄文早期の集石遺構・礫群・土基・住居跡・縄文晩期の土基である。また出土した遺物は、これらに伴う土器・石器の他中世の遺物が出土している。

### 旧石器時代

旧石器時代の遺構としては、集石遺構が芳ヶ迫第1遺跡で2基、芳ヶ迫第3遺跡及び札ノ元遺跡においてそれぞれ1基が検出されている。各遺跡ともに旧石器時代の全面的な調査は行っていないため、調査区内での集石遺構の分布状況は把握できなかったが、その形態については共通点が見出される。

集石遺構の規模としては、径50cm前後の範囲内に20～30個の拳大の円礫・角礫が円形または楕円形に配置され、掘り込みは有しない。この時期の集石遺構としては、県内でも宮崎学園都市内の堂地西遺跡をはじめ数ヶ所で見出されているが、ほぼ類似した形態を有している。また、検出された層は、始良Tn火山灰に比定される第2オレンジ層の直上であり、札ノ元遺跡の集石遺構内の焼石の熱ルミネッセンス法による年代測定においても20920年B.P.～22,540年B.P.の測定結果が得られていることから時期的には始良Tn火山灰降下後の最も古い様相を呈するものと考えられる。

遺物としては、芳ヶ迫第1遺跡で1ユニットとして把握されるものが調査され、剥片尖頭器・三稜尖頭器・ナイフ形石器・彫器の他剥片尖頭器の素材となる砂岩製の剥片も出土している。また、芳ヶ迫第3遺跡・札ノ元遺跡においても集石遺構を中心に石核・剥片が出土し、剥片尖頭器・ナイフ形石器も出土したが、宮崎学園都市内の堂地西遺跡出土のものと比較するとかなり小型であり、石材としても安山岩・流紋岩・泥岩等が素材として利用されている。

現在、旧石器時代の調査例は増加しつつあり、遺跡間の比較あるいはより全面的な調査によって石器の組成及び技術、さらには生活空間の把握という問題がより明確になってくるものと思われる。

### 縄文時代

縄文早期の遺構は、芳ヶ迫第1遺跡・第3遺跡、札ノ元遺跡において検出された。

集石遺構は、アカホヤ層を除去した面で小礫が一面に散在していた。この礫はまとまりはなく、掘り下げるとまとまりを有するいわゆる礫群が数ヶ所検出される。この礫群には厚さ10cm前後の堆積をなすものもあり、また掘り込みを有する集石遺構を数基含むものもある。この礫群内に

は遺物は出土するものの、上面を生活面としては考え難く、近接または中に含まれる集石遺構の廃棄跡である可能性が高い。このような縄文早期の礫群の検出状況は県内でも頻例が増加しつつあり、生活空間内でのこの礫群の位置づけが課題である。また、集石遺構については前平地区の各遺跡ごとに50～100基の検出例がみられたが、掘り込みの有無によって2つに大別される。そして掘り込みを有する集石遺構には配石をもつものが見られる。配石は中心に礫を置き周囲に並べるいわゆる花卉状の配置をするものがあった。これらの掘り込みを有する集石遺構の埋土中特に床面付近では炭化材や炭化粒が多量に出土し、礫にタール状のものが付着するものも見られ石蒸し炉的な機能が考えられる。

以上のような礫群及び集石遺構の検出例は縄文早期の調査においては一般的なものとなりつつあり、遺跡内での空間的な位置づけ及び相互の関連性が課題となろう。

土坑として注目されるものは、連穴土坑及び長円形又はスプーン状の形状を呈し凹部を有する土坑であろう。前者は札ノ元遺跡において2基検出されている。1基は焼土が確認され後者の土坑と切合っているが、切り合い状況から判断して連穴土坑のほうが古い様相を呈している。後者の土坑は札ノ元Ⅰ型土坑と仮称しておくが、焼土を有する長円形の土坑は熊本県及び大分県内でも検出例がある。しかし札ノ元Ⅰ型土坑はさらに凹部の焼土上に径20～40cm程度の大型礫が検出されるのが1つの特徴となっている。この札ノ元Ⅰ型土坑は数基が連続しているのが特徴であり、ほとんどは調査区内の緩やかな傾斜面に検出されている。札ノ元遺跡においては、調査区東南部の平坦面に土坑を中心とする1つの空間があり、その他の土坑は周囲の斜面に分布している。この土坑の性格については、集石遺構には炭化物は多量にみられるものの焼土はなく、石蒸し料理的な機能がそれに与えられるならば、石を焼く場所としての機能も考えられるが、石を焼くのに特別な場所が必要かどうか焼けた多量の礫の移動法など問題がある。さらに、凹部の焼土上にある大型礫が焼土の直上ではなく間に炭化物を多量に含んだ固く締まった層が存在することや、大型礫自体の機能も不明である。大型礫の検出のされ方は、数個を凹部に乱雑に投げ入れたようなものと、1個だけを横に置くようにするものがあり、札ノ元Ⅰ型土坑及び大型礫の機能については今後の検討課題である。また、土坑内で出土する遺物も全て貝殻文系土器であり、札ノ元遺跡では埋土中から札ノ元第Ⅲ類から第Ⅳ類が混在して出土する状況であった。しかし、それらの土器が全く出土していない方ヶ迫第3遺跡においても2基検出されていることや、類似する土坑が熊本県及び大分県でも確認されていることから、明確に貝殻文系土器に特有の遺構とは断定できない。

住居跡は、札ノ元遺跡において2基検出されたが、調査区東側の平坦な台地上ではなく西側の

緩斜面に検出され、床面は水平であった。1号住居は小型で浅いビットが散在して検出されたのに対して2号住居は大型で深いビットが密集して確認されている。時期的には、1号住居の埋土中からⅢC'類の同一個体と思われる土器片が4点出土しているのに対し、2号住居ではV類の土器片が検出されており、弱冠のずれがあると思われる。2号住居は壁に突出部を有する特徴等から、鹿児島県の加栗山遺跡で検出されたものに類似した要素をもっている。縄文早期の貝殻文系土器に伴う住居跡の検出例は今後とも増加するものと思われるが、他の遺跡との比較検討や調査区内の他の遺構との関連性等は資料の増加を待ちたい。

土器に関しては、各遺跡ともに多型式の土器が混在して出土したが、各遺跡ごとに特徴的な出土を示しており、時期差としての把握は可能であるが、前後関係については明確ではない。

押型文土器は、全て平底であり円筒形に近いものも出土している。芳ヶ迫第1遺跡では器壁が薄く横位にベルト状に施文する古いタイプのものが出土し、また口縁部に横位の条痕文を施すものも出土している。芳ヶ迫第3遺跡では、押型文土器が出土土器の主体を占めているが、口縁部にベルト状の押型文を縦歯状に巡らせるものが出土している。施文は縦位・斜位が多く楕円文も大粒であり、また底部も平底で押型文は相対的に新しい傾向がある。札ノ元遺跡は押型文土器の出土数が少なく、山形押型文土器が10数点で楕円押型文土器は僅かに1点のみである。山形押型文土器は山形口縁を有するものが出土しているが、底部も出土しておらず時期的な位置づけは明確でない。押型文土器は3遺跡ともに出土しているが、形態及び組成が全く異なっており、他地域では出土していない土器も見られるため、周辺の資料も含めて検討したい。

貝殻文系土器、いわゆる吉田式土器・前平式土器と呼称される貝殻による条痕文を主とする土器については、県内の縄文早期の遺跡においては大部分で出土する土器型式であるが、本地区遺跡群内では芳ヶ迫第3遺跡で1点も出土していないのが特徴である。芳ヶ迫第1遺跡では出土数は少なく、角筒の胴部及び円筒の底部等しか出土しておらず、クサビ型張付け突帯を有するものも出土していない。一方札ノ元遺跡では出土土器の大部分を占め、バリエーションも豊富である。この中で№39～№47の胴部に貝殻腹縁の押印文を有しない土器は特徴的なものであり、鹿児島県内ではあまり類例がない。この土器群は、クサビ型張付け突帯を有する土器群の中で他の文様バリエーションのものが円筒・角筒を有しているのに対して、円筒のみの器形であり、クサビ形張付け突帯も形がシャープでなく、粘土ひものを簡単に張り付けただけの粗雑なものである。この土器群は、地域差的な特徴でないとなればクサビ形張り付突帯を有する土器群のうちの初原形態とも考えられるものである。また、№58の土器は、クサビ形張り付け突帯が口縁部に密に巡り胴部には横位に貝殻腹縁の押し引き文を施文するいわゆる吉田式土器であるが、出土したのは

1点のみであり、他の土器と比べて風化が著しく異なった残存状態を呈している。この土器も周辺地域では出土しておらず、宮崎学園都市遺跡群等でも出土していないものである。従って、他地域からの持ち込みの可能性が考えられる土器である。また、第Ⅲ類～第Ⅵ類までの土器群は施文、調整・角筒の有無等によって大まかながら2つのタイプに大別される可能性がある。№24～№27までの角筒土器は、いずれも明瞭な稜を有しておらず口縁部のみをつまみ上げるような造作を施しており、胴部・底部は出土していないものそれらはほぼ円筒形に近いものと考えられる。また山土区もA・B-4・5区に片寄っており1つの土器群を形成するものであろう。

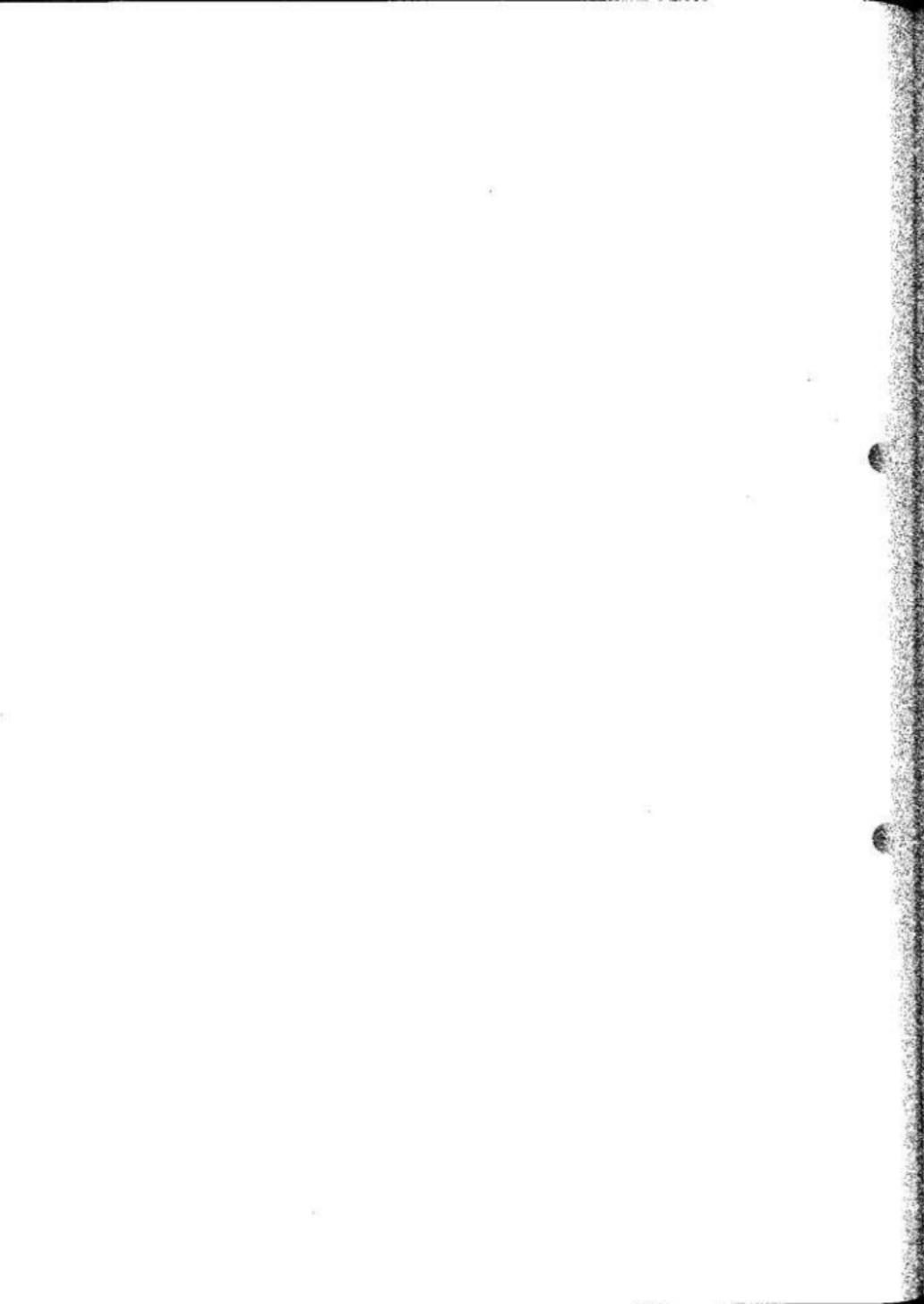
手向山式土器・平袴式は、札ノ元遺跡のみで出土している。量的には、それぞれのバリエーションが1個体分に近い程度でまとまって出土しており、出土層位も包含層中の最も上位であった。

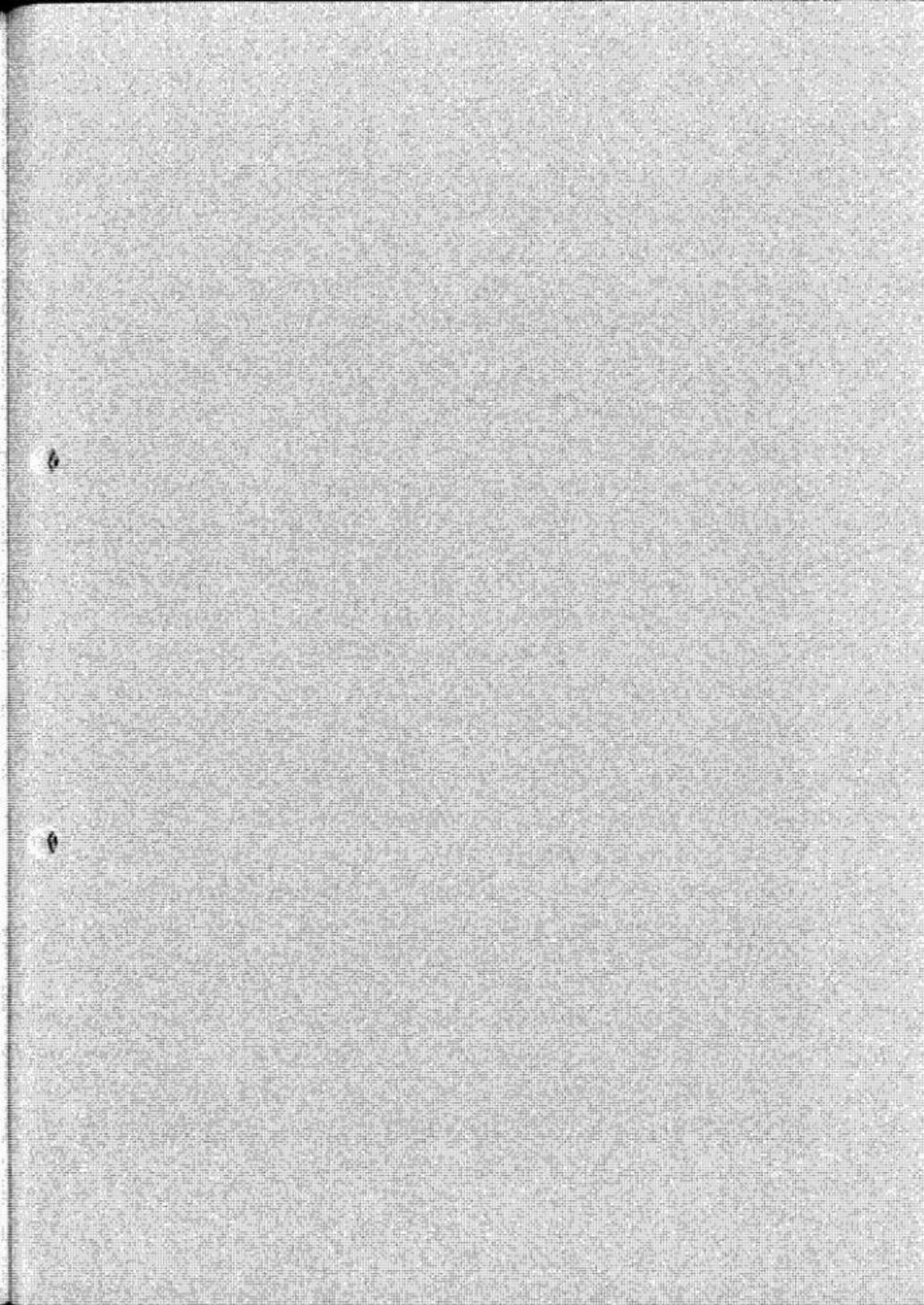
その他型式未設定の上器については、県内で類例が増加しつつある口縁部が内彎する円筒土器群がある。これは芳ヶ迫第1・第3遺跡、札ノ元遺跡ともに出土しており、文様バリエーションも豊富である。施文は、貝を利用する刺突文・押しき文、ヘラを利用する羽状文・沈線文・刺突文等である。また、器形的には口唇部が平担で内傾するものが多く、口唇部及口縁部内面の調整もミガキ状の非常に丁寧なナデ調整を施す。そして、胎土に雲母・石英・白色岩片を多量に含み、花崗岩系の胎土を呈するものが大部分を占め、他の土器群が火山灰系の胎土を呈しているのと異なる。この上器群は類例の増加を持って編年を検討したい。

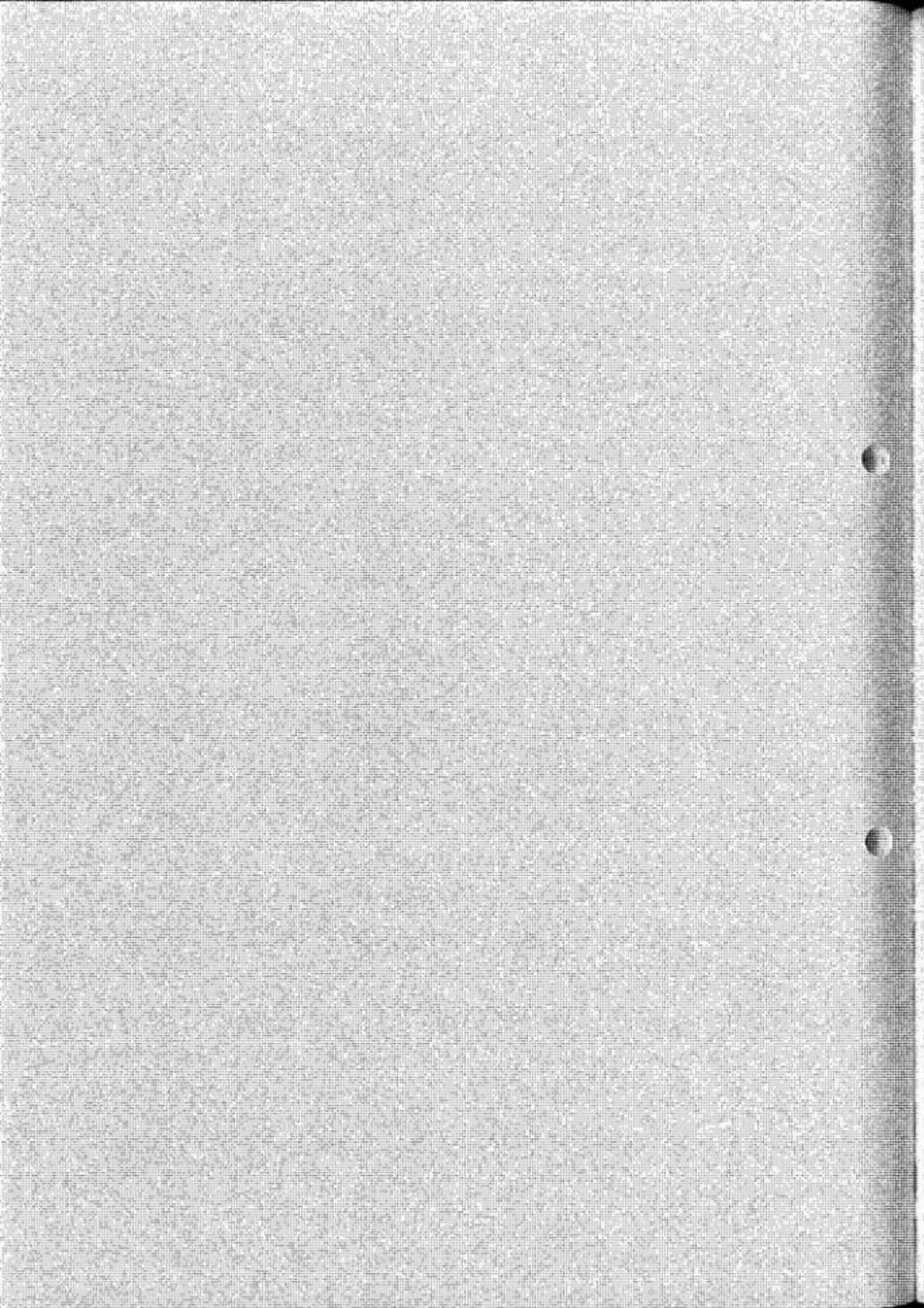
石器は、特徴あるものとしては芳ヶ迫第1遺跡の環状石斧、芳ヶ迫第3遺跡の黒曜石製異形石器、札ノ元遺跡の磨製異形石器等である。環状石斧は最近類例が増加しつつあるが、他は類例がなく資料の増加を持ちたい。その他には、石鏡の石材に関して芳ヶ迫第1・第3遺跡、札ノ元遺跡ともに姫島産黒曜石を利用しており、芳ヶ迫第3遺跡・札ノ元遺跡ではサスカイトも素材として利用している。

以上のように土器・石器ともに縄文早期の遺構・遺物は課題が多いが、前平遺跡群内のもう1つの又五郎遺跡の整理結果を検討して、遺構・遺物の詳細な検討を試みたい。

その他、縄文晩期・中世の遺構・遺物に関しては今回は調査結果の報告のみに留め、課題と検討の報告については機会を持ちたい。





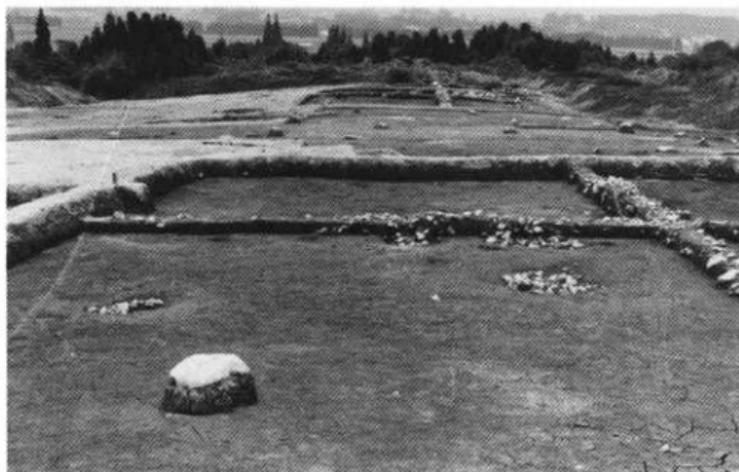




芳ヶ迫第一遺跡空中写真



礫群検出状況(北北西より)



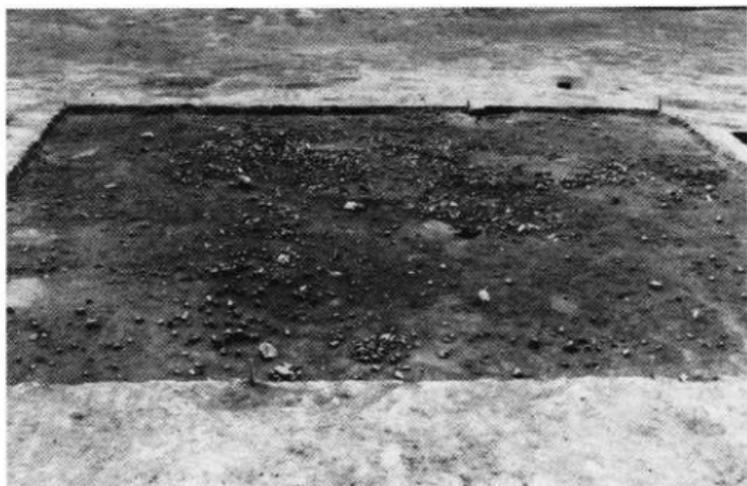
集石遺構検出状況(南南東より)



B-3 区旧石器時代遺物出土状況(東北東より)



B-3 区旧石器時代遺物出土状況



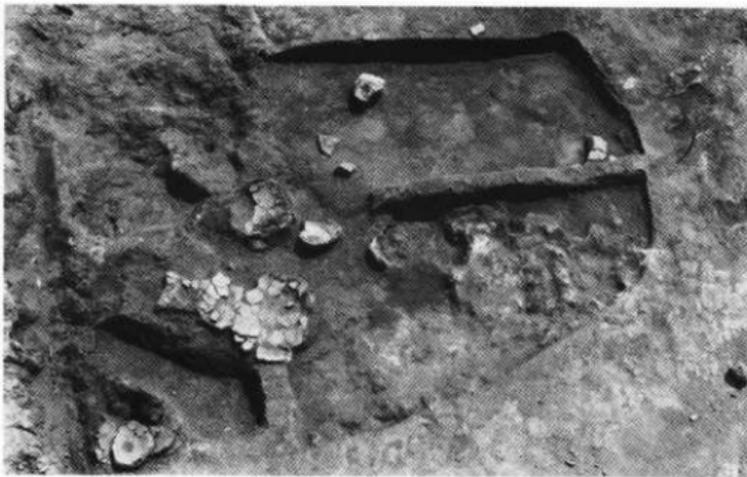
H・I-2・3区礎群(東北東より)



B・C-4・5区礎群(北北西より)



No. 2 土坑 (東北東より)



No. 1 竖穴遺構 (北北東より)



旧石器№1 集石遺構



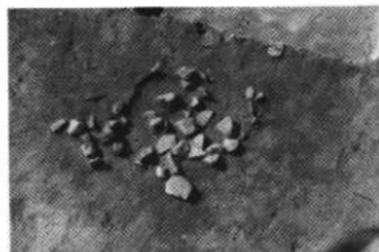
旧石器№2 集石遺構



旧石器時代遺物出土状況



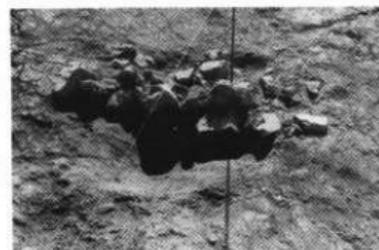
旧石器時代遺物出土状況



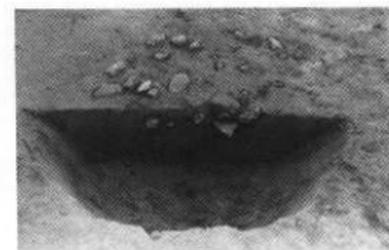
№7 集石遺構



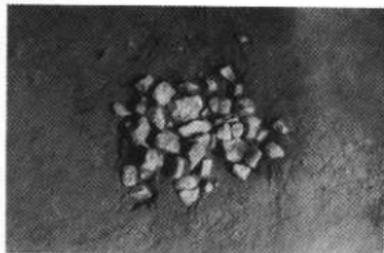
№28 集石遺構



№20 集石遺構



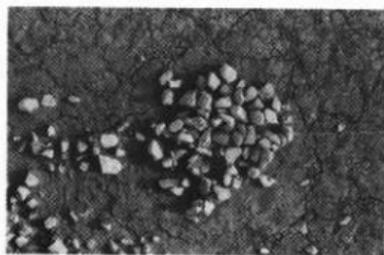
№44 集石遺構



No. 46 集石遺構



No. 13 集石遺構



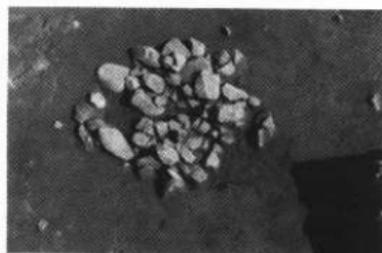
No. 19 集石遺構



No. 39 集石遺構



No. 14 集石遺構



No. 18 集石遺構



No. 8 集石遺構



No. 8 集石遺構



No. 6 集石遺構



No. 1 集石遺構



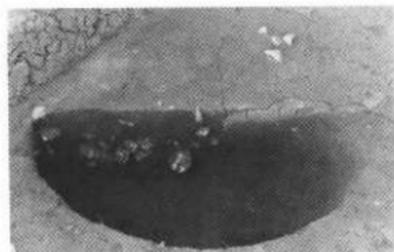
No. 17 集石遺構



No. 17 集石遺構土坑(西より)



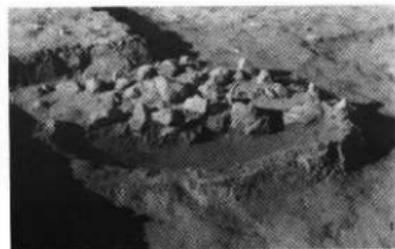
No. 12 集石遺構



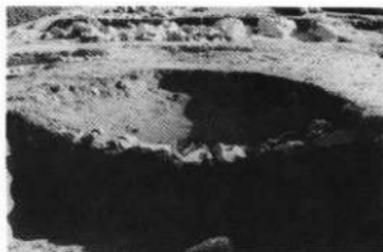
No. 37 集石遺構



No. 35 集石遺構



No. 51 集石遺構



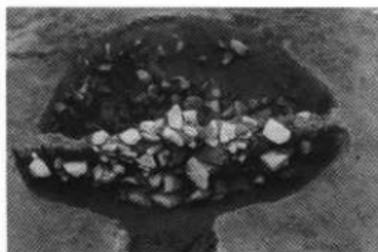
№ 34 築石遺構



№ 31 築石遺構



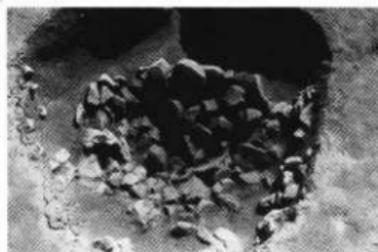
№ 50, 51, 52 築石遺構 (兩より)



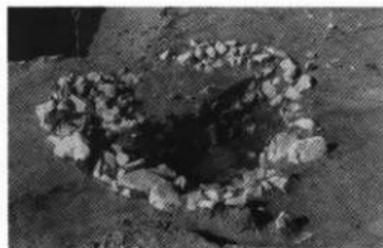
№ 4 築石遺構



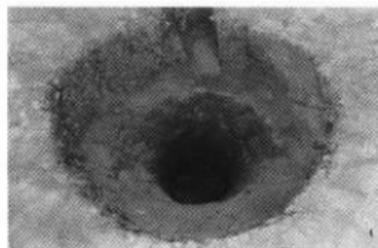
№ 52 築石遺構



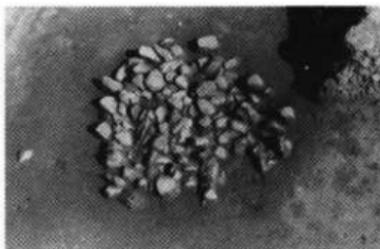
№ 4 築石遺構



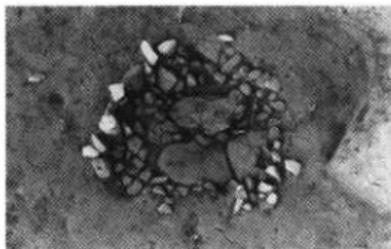
№ 52 築石遺構



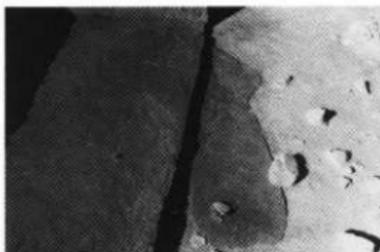
№ 4 築石遺構土城



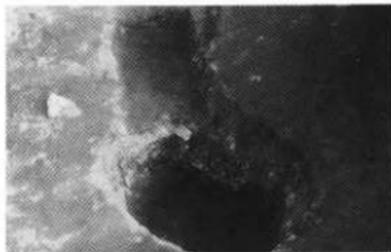
№16 集石遺構



№16 集石遺構



№1 土埴



№1 土埴



石組遺構



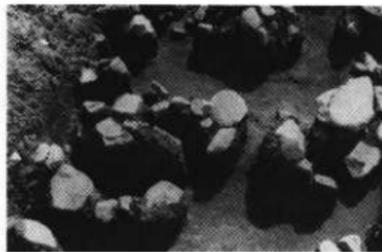
石組遺構内石埴出土状況



I-3 区環状石埴出土状況



I-2 区土器出土状況



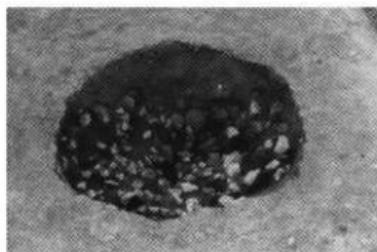
B-4 区円盤状石器出土状況



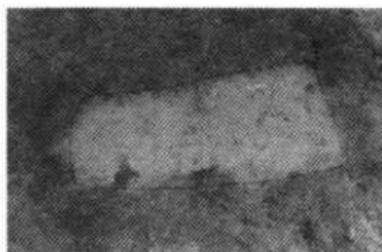
No. 2 整穴遺構出土状況



No. 7 土城土層



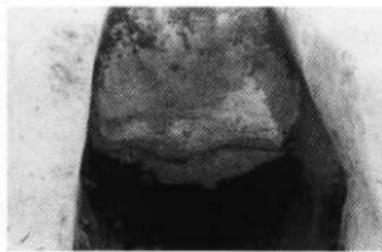
No. 2 整穴遺構



No. 9 土城検出状況



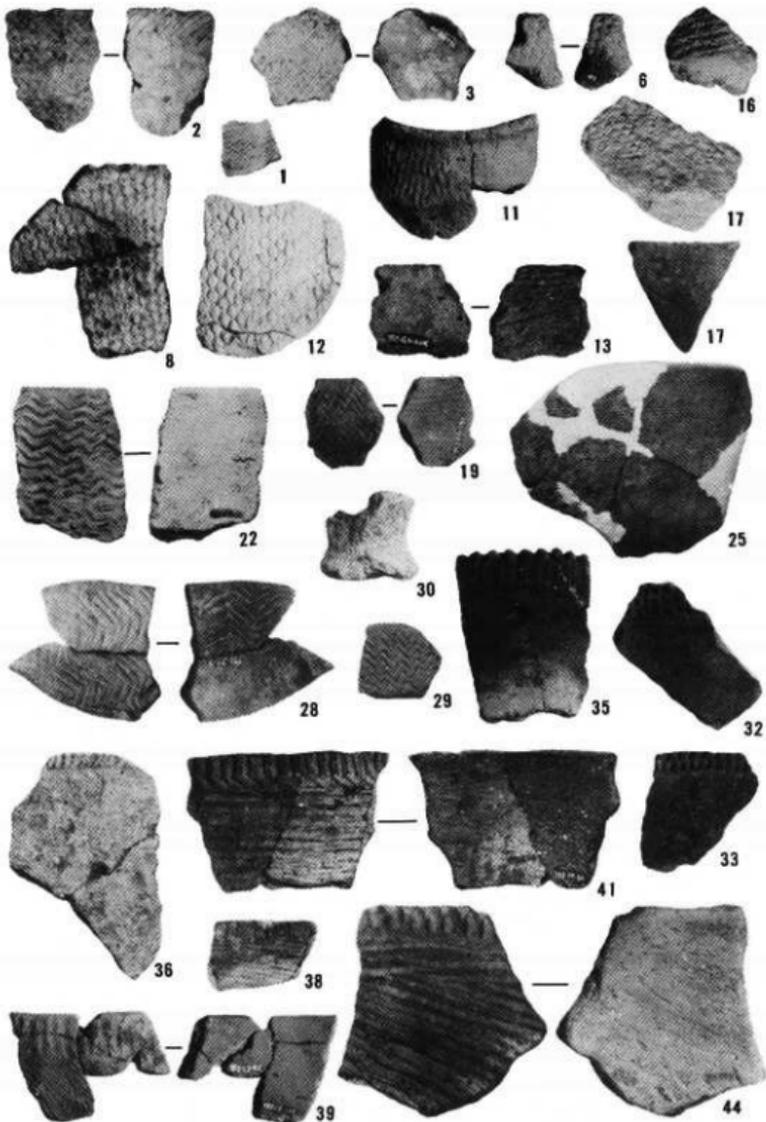
No. 8 土城土層



No. 12 土城土層



地層の回転部 (上にアカホヤ)



出土土器(番号は図面番号に同じ)

